

---

# 剣盗りモノガタリ

松下星哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣盗りモノガタリ

### 【NZコード】

N11211Y

### 【作者名】

松下星哉

### 【あらすじ】

とある国の一人の少年が様々な国を旅しながら妖魔やモンスター、剣の使い手等と闘い、色んな出会い、そして人として剣士として成長していく剣の物語。

バトル、ラブコメ要素ありな昔風の印象を与えつつ、実は未来の話。

## 第1話～序章～（前書き）

とつあえず、不慣れなので見づらいかもしだせんが、ご容赦下さい。

## 第1話／序章

プロローグ

・・・その日、山向こうの夜空が煌めき、大気が震えた。  
家の外では村人たちが何事かと、騒いでいた。今日は祭りで特に人出が多い。

「何だ、何だ今の音は」

「一瞬光つたぞ」

「何もこんな日出度い日に・・・」

俺、トウヤ・ヒノカは家の外から聞こえてくるそんな話し声を聞きながら、そつとため息を吐き、目の前の人物へ話しかけた。

「親父、外が何やら騒がしいが様子を見に行かなくていいのか？」

おれが自分の父親である目の前の人、タチオ・ヒノカにそう言ったのには二つ理由がある。

一つは、俺の親父はこの村で村長に次ぎ一番目にお偉いさんだということ、もう一つは俺自身外に出たいということ。なのだが・・・  
「心配は要らん。話し声を聞く限りでは、このあたりには被害もなさそうだし、余程大事になれば村長が出張つてくるだろう。それよりも今は儀式を終わらせるほうが先決だ。」

・・・これである。ちなみにこの儀式げんぶくというのは、この村の古くからしきたりで、15歳になると元服を迎えた、つまり一人前の人として認めるために、様々な儀式、説明等が行われる。  
まあ、それに伴い色々な権利、例えば剣を持つようになつたり村

の外へ出れるようになつたり、だとか。よつやく旅に出たるなあ・

・

「つまり、そのことを踏まえていれば、これひとつかも・・・  
トウヤツー聞いてるか!?

「モ、モチロン」

聞いてませんでした。

「ふう。お前とこいつやつは・・・まあ、いい。儀式は終わりだ。ど  
うせお前のことだ、最後まで真面目に聞くとは思つてない。」

と親父殿は苦笑しながら、

「明日には旅立つんだから帰つてこいんだから今日は  
せつかぐの祭りだし楽しんでこー」

と話が分かることを言い出した。

「ああ、ありがとう親父。・・・父上。行つてきます。」

俺は立ち上がると、親父に一礼し、外へ飛び出した。

暦255年、7大陸から成る、とある国のとある村の一室より物語  
は始まる・・・話は12年前に遡る。

～暦243年～

空は澄み小鳥のさえずりが聞こえる、そんな爽やかな朝だった。そ

の空の下にある屋敷の庭先で・・・

「えいっ！ やあっ！ とう！」

朝の静寂を打ち破るように一人の少年がそんな気合とともに木剣を振り回していた。軽くよろけながら。

「トウヤ、剣は力任せに降つてもダメだぞ。それに剣に振り回されすぎてるな」

と、たしなめる声が少年の傍から聞こえた。

それは、黒髪を短髪に揃え身の丈180?へ僅かに届かない筋肉隆々な青年だったが、その少年を見守る黒い瞳の眼差しはとても温かなものだった。

「むう。でも、このけんがおもたくてむずかしいよ、とうちゃん」

と、トウヤと呼ばれたこれも黒髪黒瞳の少年は口を尖らせて抗議する。

「はは、そうだな。トウヤの身体より剣のほうが大きいもんな。ただ剣を振るのは力任せじゃ駄目なんだ。ちょっと貸してみろ。」  
と、父ちゃんと呼ばれた青年タチオはトウヤと呼ばれた少年より剣を受けとる。そして、諭すような口調で、

「いいが、トウヤ。人には体内に流れるオーラつてものがある。それを上手く操ることで力も速さも何倍にもすることができるんだ。」

と、タチオは木剣を受けとると同時に全身にオーラを纏いだした。淡く身体が光りだし、剣先まで光りだした。

「よく見ておけ。これがオーラだ。このように自分の身体から手に

持った武器にまでオークを行き渡らせる」とで破壊力や反応速度が数倍から数十倍に跳ねあがる「

と、おもむろに田の前にある大岩へ剣を振りかぶる。

ド、ゴンー！

そんな音がし田の前の大岩が真つ二つに割れる。

「！」のよつこオーラを纏つた武器で斬ると木剣といえどかなりの破壊力になる」と説明する。

「まあ、こきなりやれといつても無理だらうから徐々に覚えていけばいいわ。まあ今日せひここまでにしておけよ。汗拭いとけよ。」

そうじつてタチオはトウヤの頭を軽く撫でて、家のほうへ踵を返した。

「おーら・・・？」

三歳の少年には言葉のみの説明が難しいと判断したのかは分からないが、実際みてもよく分からぬといった風情の少年がそこに立ち尽くしていた。

## 第1話～序章～（後書き）

「」意見、「」感想あればよろしくお願い致します。

## 第2話～旅立ち～（前書き）

大筋みたいなものを書いてないので内容がわかりづらいかもしだせん。  
また、文章の拙さはご容赦下さい。

## 第2話～旅立ち～

暦255年

いざ、出発しようとして家の庭先で佇んでいたら、ふと修行を始めた頃の記憶が頭を掠めた。

「そういや、あの頃はまだ自分の本当の能力も知らなかつたな」  
軽く独りごちてみる。

「まあ、右も左もわからんようなガキだったからな。しじつがない  
か」

その時後ろのほう、つまり家の玄関から大きな声がした。

「トウヤーー元氣でやれよーー魔物に気をつけなーー！」

親父も心配性だな

「分かつてゐつてー、父さん！それじゃあ、行つてきまーす！」

俺も後ろを向き右手を挙げて大声で返す。

「さてと、行きますか」

こうして俺は生まれ育つた村を出た。この先起じるであろう様々なる出来事に胸を躍らせながら。

「村の外へ

そして今、感覚的に村を出て30分ぐらいもした頃だらうか、俺は何と言つて困惑していた。

とこいつのも、

「聞いてるの?アウヤ?まやはいつちの海沿いよりも山道を通ったほうが隣の村にずっと近いのよ?」

と、話しかける奴が居るからだ。

「いや、だからな、俺が聞きたいのは隣の村への近道じゃなくて、何故お前が村を出て此処に居るかということなんだが……ネク」

するとそいつは何故か微かに目をそらしながら、

「だ、だから私も母様からちゃんと許可を取つて村を出できたって言つてるじゃない!」

と軽くキレながら言つてきた。

たしかにこいつ(ネク・カナワ)の母ちゃん(アオイ・カナワ)の大らかな性格なら、例え女の独り旅でも、大して気にせずに旅の許可をくれそうだが……ちなみにこのネクは、俺のお隣さん家の一人娘で、俺にとつて所謂幼なじみつてやつだ。しかも誕生日が二月ばかり俺より早い。そのせいいかやたらと年上ぶつてきやがるのがアレだが……はあ……そんなことよりも、

「いや、俺が言いたいのはなんで俺が村を出た後にお前が後ろから追つてくるようなタイミングで現れたってことなんだが。お前はもう少し早く村を出ることができた筈だろ?」

と俺が言つと、こいつは言い訳がましく、

「い、いや私も自分の誕生日に村を出ようとしたのよ?ただ、色々と都合が合わなかつたっていうか、気がのらなかつたっていうか、・

・・独りじや不安だつたつていうか・・・な、なによ！こんな美少女と一緒に旅ができるつていうのに何が不満なわけ！？と逆ギレしてきた。

不満つていうか、まあ確かにこいつの見てくれは身長155？程度で小柄だけど、腰まで伸ばした絹みたいなサラサラの黒髪に異常なぐらい白くて綺麗な肌、2年ぐらい前から急に大きくなりだした胸、にも関わらずやたらと細い腰、猫みたいな大きな黒い瞳と整った形の鼻や口、と傍から見たら間違いなく美少女の部類には入るんだろうが、いや入るのか？

まあ、人口500人程度の村では同年代の子供は居らずいまいち基準がよく分からんが、そこは大して問題じやない。

俺の自由気ままな独り旅計画が・・・

撒くか？いや、それでもしこいつが魔物や山賊とかに襲われたらさすがに寝覚めが悪いな。

はあ・・・

まあ、とりあえず隣の村までは一緒に行つてそれから考えてみるか。規模が俺の村よりも5倍はあるつて話だしな。

「分かつた、分かつた。一緒に行こうぜ。とりあえず隣の村まで。口入屋で仕事も探す必要があるだろうし、宿屋も探す必要」

そこまで言つて、異常な気配と聞いたことがない声が後ろから聞こえた。

振り替えるとそこには、顔が魚っぽく、体つきは人っぽい何かが立っていた。

## 第2話～旅立ち～（後書き）

「」意見、「」感想、等あればよろしくお願ひ致します。

### 第3話～遭遇～（前書き）

いまいち行の間隔がつかないので、読みづらいかもしませんが  
ご容赦ください。

### 第3話～遭遇～

そいつは今まで見たこともないような姿をしていた。魚のような顔（（といつても大きさは人の顔ぐらいあるが）、大人と同じぐらいの背丈（165～170？程度）、手足に生えた鱗と青っぽいというか、緑っぽいというか何とも表現し難いぬめっとした皮膚、明らかに人間ではなかつた。

ネクが  
「は、半魚人？」  
と言つ。

「半魚人？あれって魔物の部類に入るのか？確かに異形じゃあるが・  
・」

そもそも、今の世でいうところの魔物の定義とは、

『人語を解さず人間へ害意を持つ異形の生物』とされている。つまり、こちらの言葉が通じずしかもこちらへ攻撃してきたり食料にしてこようとする生物が魔物というわけだ。

だから、ものは試しだと俺はそいつに話しかけてみる

「あー、えつとその奴、俺達に何か用か？」

と、俺が言うとその半魚人？らしき生物は目を大きく見開いた。

「オマエ、俺を見て驚かないのかつ！？」  
何か言葉が通じた。

「い、いや、確かに見た目は人間じゃないけど、別に襲いかかって  
くるわけでもないしな。それよりも今お前が喋つたことに驚いたが。  
・・」

俺がそう言うと、半魚人は

「オレはこう見えてオレの一族では天才と呼ばれている。一族の中  
には、人語を喋れない奴も居るぞ？むしろ喋れない奴のほうが多い  
な」

流暢に返してきた

「そうか、天才の一言で片付けるのもどうかとおもうが・・・別に  
俺達を食おうとしたり襲いかかってくるわけじゃないんだな」  
俺がそういう言うとそいつは憤慨して、

「人間が人間以外の生物に対して偏見を持つてはいることは長の話や  
人間の書物などで知っているが、勝手に決め付けるな！そもそも俺達魚民は海藻や貝ぐら  
いしか食べない大人しい生物だ！」

「魚民っていうのか・・・まあ、お前の言いたいことは分かった。  
じゃあ、改めて聞くが俺達に何の用だ。まさか、ただ話しかけたか  
つただけか？」

そう言つと魚民は、

「それもある。この道を人間が通ることは珍しいからな。」

と言つた。

するとネクが、

「そうか、ここはもう村の結界外になるのね。だからか・・・漁師の人達は普段は村付近の結界内で働いてるからね。」

ちなみに結界とは、かつて250年以上前に歴が始まった当初、この『火の大陸』を制覇した時の王スサノオが各地域を統治しやすくするために、結界技能を持った者、当時妖術師と呼ばれた者を書き集めて、当時存在していた集落毎に施していくもののことである。その結界の範囲を基準に現在の各村が作られていった。正式な呼び名は人口100人以上の集落を村、人口1000人以上の集落を町、人口10000人以上の集落を街という。街規模になると、俺の村では見たこともないような珍しい物がある。何年か前に来た行商の持つてきた、あの甘い菓子・・・

「それで、本当に何の用なんだ?確かにもの珍しいとは思うが、この道に全然人が通らないというわけでもないだろう。なんでわざわざ俺達に?」

と俺が言うと魚民は、

「確かに、人間自体は何回か見たことはある。ただ俺的好奇心は並外れていてな、珍しい人間の番つがいが見れて思わず興奮して近づいてしまった。俺達魚民は成人して時期がくれば、卵を産み出して子孫を残すが、オマエら人間は雄と雌が交尾して子孫を残すのだろう?だから交尾が見れると思つてつい近づいたんだ」

といった。なるほど、つまりこの道は人が通ることもあるが俺達のように男と女が二人揃つて通つたことはないと。それが珍しくてつい近寄つたと。納得だな。

すると横の奴が

「な、な、な、何を言つてんのよあんたつ！？、つがいつ！？、こ、こ、こ、こうびつ！？な、なんであたしとこいつが番つがいでこ、こ、交尾こうびしなくちゃいけないわけつ！？交尾こうびするにしても、こ、こいつちだつて、段階だんかとか準備そなへとかそれなりに雰囲氣ふんいきとか必要なんだからねつ！？」

「うん、落ち着け。微妙まほうに論点ろんてんがずれてるぞ。あー、それと魚民うみん？。俺達は別に番つがいでもなんでもないぞ。ただの知り合いの男と女つてだけで、別にお前が期待することはないぞ。」

そう言いうと魚民は、

「や、そうなのか。珍しいものが見れると思ったのだが・・・まあ、初めて人間と話せただけでもよしとしよう。」

と納得した感じだった。

「まあ、俺も珍しい奴と喋しゃべれてよかつたよ。それと偏見は改めるわ。悪かったな。旅の途中だから、俺達はもう行くぞ。縁があつたらまた会おうぜ。」

俺はそう言いつと手を振つて魚民に別れを告げ、踵を返して歩き始めた。

「・・・ただの知り合い・・・そつよね、そんなものよね・・・

横でネクが小声で何かボソッと言つたよつだが、俺にはよく聞こえなかつた。

### 第3話～遭遇～（後書き）

大まかな設定は纏まっているのですが、それを文章にするのが難しいです・・・

## 第4話～魔物～（繪書き）

やたらと説屈くればこ話になつまつた・・・

## 第4話～魔物～

俺の村は名前をカリュウ村といい、場所はこの火の大陸の最南端に位置する。

その名産品といえば、海に近いという地の利を活かして収穫の多い海産物が真っ先に挙げられる。

他の地域に行商に持つて行く主な商品としては、一番近い村でも、大人の足で歩いて片道に最低3日は掛かるためやはり日持ちのする魚貝類の干物等が多くなるのは、まあしようがない。

隣村は海から遠いためそれらは毎回完売するらしい。

他には、農作物やら織物やらが主力商品とは言わないまでも、安定した供給を行えるので、隣村には固定客がついているらしい。

そんな感じで物についてはそれなりに他の地域と上手く取引をしていると村の行商人達は言っていた。

物以外でカリュウ村の有名なモノと言えば二つありその一つには剣術が挙げられる。

それは、ここ数年でじわじわと有名になってきたという話だがそれには理由がある。

この大陸の首都であるカグツチという街で年一回開催される格闘大会でのここ数年の優勝者が、カリュウ村出身のヒノカ流剣術の使い手だということだ。

まあ、知り合いの姉ちゃんだが。

何でも華奢な見た目とは裏腹に鬼神の如き動きで物凄く強いことから人目を引き出身地や流派が他の大会参加者や観客から注目されたらしい。

優勝後、街にある城への土官の話、旅の用心棒、町や村等の警備、ついでに縁談が相当数本人へ舞い込んだらしいが全て蹴つて今は街

で悠々自適に暮らしているとその人のお母さんは言つていたが。まあ余談だが。

もう一つの有名なことは現在より何百年も前から、  
『世界の7大陸にはそれぞれの大陸に一本ずつ、神劍しんけんが刺さつてお  
りそれが大地や生物を活性化させ、生活を豊かにしている。それを  
引き抜き手にした者は人であれ鳥であれ魚であれ神と等しき力を得  
るだろ』『

という確信めいた、冗談のような、『7神劍物語』（ななしんけん  
ものがたり）、という話が言い回しや言語が違うにしてもどの大陸  
にも似たような話が伝えられているらしく、その話を基に、火の大  
陸初代霸王であるスサノオが大陸統治後に火の大陸の神劍を追い求  
めたという話が残つてている。

結局見つかったという話はなく（どの大陸でも）、近年に、とある  
探索方法が見つかるまでは、神劍探索についてはずいぶんと下火に  
なつていたが、その新しい探索方法により、神劍らしき場所に大体  
の見当がついたということで、現在街では神劍探索隊が編成されて  
いるらしい。

その探索方法とは単純な話で、「神劍がある場所に近づくほど魔物  
が活性化するのではないか」

という説をとある学者が以前に打ち出したらしく大陸中の測量と魔  
物の分布図を作成するため旅を10年程度し、最近漸く完成しそれ  
を見当した結果、大陸の南側の方が明らかに魔物の質、量が高いと  
いうことが判明したのだった。

だから、大陸の南側に神劍が刺さつてゐる可能性が高いのではないか？との説が広まっていき、最南端にあるカリュウ村に何かしら神  
剣と関係があるのでは？という話が広まっていき、カリュウ村が大陸で有名になつたのはまあ、大会優勝者の話と合わせ、偶々そんな

時期が重なった、のだと思うことにしよう。

まあ、何故急にそんな事を思つたかといえば・・・

「トウヤー！なにボーッとしてんのよつ…右に回つこまれてるわよ！」

とネクが叫んでいた。

というのも昨日魚民と別れ海沿いの道を進んだあと、山道に入った俺達は今、魔狼の群れに囮まれていた。魔狼とは、見た目は狼のようだ、だが狼の体長を倍ぐらいにした（ざつと見て3mぐらいか）、全身真っ黒な毛に覆われた、自分達以外の生物は餌ぐらいにしか考えていない魔物の呼び名であり、並の人間が戦えば大人2人でようやく一頭と渡り合えるといった程度の強さの生物である。そんなやつが俺達を取り囮んでいた・・・10頭ぐらい。

いや、待て。数がおかしくないか。聞いた話では確かにこの生物の習性は数頭群れて獲物を襲うということだが、明らかに多いよな。いくらこのへんが大陸の南とはいえ活性化しそぎじゃないか。そう思いつつ俺は右側に近づいてきた魔狼へ対して腰から抜いた剣を横に薙ぎ払い魔狼を胴から真っ二つきした。

「ギャウンッ！？」

そんな鳴き声と共にその魔狼は倒れた。

「グルルルルツ」

「ウーーー」

「ガオン！ガオン！」

その様子を見た他のやつが俺達を遠巻きにしながら吠えてきた。今にも飛びかかってきそうな体勢で。

「さすがにあれだけの数に同時に襲いかかられたら不味いな」

俺がそう言つとネクが、

「あんた何言つてんの！？あんたが有無を言わさず切り捨てるから手持ちの食糧を蒼いてその隙に逃げよつとしたあたしの作戦が台無じじゃない！」

と言つてきた。

「いや、やつは言つけどな？それは一頭一頭ぐらいなら何とか通じる作戦だろ？さすがにあの数には足りないと思つんだが・・・」「

するとネクは

「じゃあ、どうするの！？行商の人気が持つてる魔物避けもないし、逃げ切れそうにもないし、どうしようもないじゃない！？」

と焦つた様子である。

「まあ、落ち着け。俺の強さは知つてゐるだろ？あの程度の数どうしてことないぞ。」

俺が言うとネクは、

「ま、まあトウヤが強いのは知つてゐるけど。あたしが言いたいのは剣でどうにかなる数？つてこと

と言つてくる。

そこで俺は漸く合点した。ここへは同じ剣術道場での剣技ぐらいしか見せたことがなかつたつけ。

「違う。俺の本当の実力を見せてやるよ。・・・下がつてろ

俺はそう言つと愛剣の炎斬えんざんへと意識を集中させ始めた。すると・・・

「えつ？なにこれ、剣が光り始めた？」

ネクが言つ。

「ああ、これが所謂オーラつてやつだ。このオーラを利用することによつて、剣と俺の体は何倍にも強化することができる。ただ昔見たけどニールナ姉もオーラを使ってたぞ？知らなかつたか？」

そう言つと俺はオーラを纏つた炎斬をネクへ見せる。ちなみにニールナとは三歳上のネクの姉貴で、実は大会優勝者その人である。

「ニールが？確かに昔から強かつたけど・・・」

と若干腑に落ちない顔をする。

「まあ、いいや。さて行くぞ、魔狼どもつー。」

そう言いながら俺は魔狼の群れに飛び込み斬りかかった。

ズバツ！ザシユツ！バキッ！

「グオーツ！」

「ギャン！ギャン！」

「クゥーン・・・」

そんな鳴き声とともに魔狼は全頭地面に倒れ伏した。

「まあ、こんなもんだ。強いだろ？俺？」

俺がそう言つとネクは、微妙に納得してなさそうな顔で、

「オーラつて何かズルい・・・」

と結構心外なことを言つていた。

いや、別にズルくはないだろ・・・

俺は軽く嘆息し旅を再開した。

## 第4話～魔物～（後書き）

不快感がなければそれでいいです。『ご意見』『ご感想』あればお願いします。

## 第5話～温泉街～（前書き）

イメージ通り、には進まないものです・・・

## 第5話～温泉街～

魔狼の群れと遭遇後、もう一日ばかりかけて夕刻頃、漸く一番近い隣の町へとたどり着いた。

その町の入口にある門を見上げて、

「大きいな・・・」

俺がそう感嘆の声を洩らすと、

「大きいね・・・」

と、横のネクが似たようなことを言つた。

「いや、カリュウ村にも似たような形の門はあつたけど、大きさが違い過ぎるだろ?」

そう、カリュウ村の入口にも門があるが精々3mぐらいの高さしかなかつたが、この村の門はどう見ても10mはありそうだった。

「いやー、流石に村の規模が違うだけあるね。あそこが守衛所かな?」

そう言つてネクが向かって右にある小さい建物を指す。

「だろうな。えーっと、知らない村に入るには、身分証明書が要るんだよな。どこに仕舞つたっけ。」

俺は手持ちの頭陀袋に手を突っ込み身分証明書を探す

「あつた。よし行くぞ。」と言つて、入町の手続きをするため守衛所らしき建物に向かつた。

### （イグナ町）

町へ入る手続きを終えた俺達は、町中に入り目的の場所を探した。我儘を言つ横のやつのために。

「もーーーっ！宿屋は何処なの？イグナ名物の温泉宿屋はっ！！」

「おい、落ち着けよ。守衛所の人も言つてたろ？温泉街は町の外れにあるつて。そう直ぐには着かねえよ。」  
としようがなしに俺は宥める。

ここイグナは源泉が湧き出るとかで温泉が名物の地域である。  
湧き出る量も豊富なため、それを利用して何軒も温泉用の宿屋があるらしい。

それ目当てにこの町へやつてくる人も多いらしく、宿屋も必然的に増えていき、それに伴い色々な商売、例えば料理屋、名産品店、飲み屋、賭博場、等々の建物も増えていったという話だ。まあ、町の外から来た人は、温泉に入った後は羽根を伸ばしたい気分になるのだろう。

また、地元の人も家でわざわざ薪や火を使って風呂を沸かすよりは経済的なのか、温泉には常に人が多いとのことだ。

「おっ！それっぽいところに来たんじゃないかな？」

それから一時間弱も歩いたところで、雰囲気の変わった場所に出た。妙に熱氣があるな。

「キタキタキターネック」ネクがアホみたいに騒ぎだし、駆け出そうとした。

「待てっ！止まれっ！さっき聞いたお薦めの温泉宿屋を探すぞ！飯が安くて量が多く美味しい、チヒロ屋つて宿屋を！」

俺は慌てて声をかける。  
これだけは外せるか。

「ええー。」飯はどうしてもいいよ。それよりも湯船が広くて、美容に効く温泉がある宿屋を探すほうが・・・・・・うん、チヒロ屋を探そう！

何故か俺のほうを見ながら焦ったネクがそう言い出した。

いや、別に腹が減つて機嫌が悪いとかじゃないだ。

本当は温泉はどうちでもよくて飯のためにここまで付き合ったのに、ふざけたことを言い出したネクを物凄い目付きで睨んだとかそんなことはないぞ。

「ああ、美味そうな匂いからして、多分あの正面にある大きめの建物だと思つ。そつと行くがいいわ」

上機嫌になつた俺はネクを促し、早足で先に行く。

「や、そうね。早く行きましょ。」

(危ない、危ない。そういうえばこいつは「飯の邪魔をすると物凄く機嫌が悪くなるんだつた……それにしても匂いつて……)ネクはそう思った。

その時、右の料理屋らしき建物の扉が開き女の子が飛び出してきた。  
「助けて!」

そう言いながら私の後ろに隠れた。

年の頃は私と同じか少し下ぐらいで、着物の上に白い前掛けをしていた。

続いてその扉から屈強そうな顔を赤くした男達が出てきた。3人ほど。

「お~お~お~姉ちゃんよ、逃げる」とねえだらうひょっとお酌してくれって言つただけじゃねえか」

真ん中の大柄な男が笑いながらソレ言つた。左右の二人も何が嬉しいのか笑っている。

「嘘ですー!無理矢理座らせて手とか、お、お尻とか触つてきました  
!」

その女の子が涙目になりながら私に訴えてきた。

「あれー？酒代にお姉ちゃんへのお触り代も含まれてるんじゃねえの？」

右側の太った小柄な男が

嬉しそうに言つ。

左側の瘦せてひょろつとした男が、

「まあ、いいじゃねえか姉ちゃん。戻つてこいよ。呑もうぜ？」と笑いながら言つ。

「う、うちはお料理屋でやつたことは一切してません！」

と女の子が必死になつて言つ。

「うるせえっ！ うちちは代金払つてんだ…やつたらと戻つて相手しやがれっ！」

と真ん中の男が怒鳴りだした。

私は煩わしいと思いながら「あのー、」の子も困つてゐみたいなんで、あんまり無茶なことを言わなほつがいいんぢゃないでしょうか？」

と遠慮がちに言つてみる。

すると、男達が顔を見合させて笑いながら、「お姉ちゃん別嬪だな。いいぜ、店を出るから俺達に付き合えよ。宿屋で一緒に呑もうぜ。」

と真ん中の男が私に言つてきた。宿屋？

「それは嫌です。あなたたちの相手をしている暇はありません。大人しく中で呑めないなら勝手に宿屋でもどこへでも行つて下さい」

とこうと、何が嬉しいのか、

「おー、気の強い姉ちゃんだこと。まあ、いいから、いいから。」

と言つて、酒臭い息を撒き散らしながら私の腕を掴んできた。その時、

「おい、ネク！何やつてんだ！早く行くぞ？」

結構先まで歩いていたトウヤがこちらへ走つて戻ってきて怪訝そうにした。

「誰だ？」

トウヤが言つので、私は

「酔っぱらい」

簡潔に答えた。

「ふーん。おっさん、こいつは俺の連れなんでその手を離してもらえるか？」

と言つと、

「あーん？なんだてめえは？」この姉ちゃんは俺達と一緒に呑むんだよ。すつこんでろ！」

と凄んでいた。だがトウヤは、

「いや、おっさん、聞こえなかつたか？俺は手を離せつて言つたんだが。それにそいつは今から俺と飯を食うんだよ。邪魔すんな！」  
キレ氣味に言つた。

「い、このガキイーおこつーこのガキやつちまえ！」と後ろの一人

に言ひ。

「おじおい兄ちゃんよお。お前」那人の楽しみを邪魔するとはどういつつもりだ？あん？」

「そうだぞ。そんな野暮なやつはこうだつ！」

とひょろつとした男がトウヤに殴りかかつたが、トウヤはその腕をかわし、右拳を男の顔面に叩き込むと、もう一人の小柄な太つたほうのお腹を右足で蹴りとばした。

二人の男は悶絶した。一人は口から何か吐いていた。「ぐうう」「ぼえええつ！」

一連の動作はほぼ一瞬である。

そこに居る女子と大柄な男はポカーンと呆けていた。

「て、てめえクソガキ！なにしやがる！」

と私の腕を離すと、大柄な男はトウヤへ向きあつた。

「いや、なにつて？殴りかかつてきたんで、殴つて蹴つただけだが？」

トウヤがキレ氣味に言うと男は青ざめた顔で、

「て、てめえツラ覚えたからな！覚えてろよ！」

と言いながら後ずさり、二人の男を引き摺るように逃げて行つた。

するとトウヤが呆れたように、

「なんだ、あれ・・・まあいいや。ネク！早く行くぞー。もう腹が減つて腹が減つて・・・」  
と、踵を返して歩きだす。

「わかったわよ。さあ行きましょ。」

と私が言つと、

「待つて下さい！」

そんな声がかかつた。

女の子は、

「あ、あの、ありがとうございました！おかげでたすかりました」と律儀に礼を言つてきた。

「いいの、いいの。偶々通りかかっただけだから、気にしないで？」と私が言つと、女の子は

「いいえ！そういう訳にはいきません！お礼をさせて下さい！あのー、もし良かつたら」飯を食べて行かれませんか？もちろん代金は結構です」

女の子が私にそう言つと、それが聞こえたのかトウヤが振り返った。目を輝かせながら。

これは絶対食いついてるわよね・・・温泉でお肌ツルツル計画が・・

まあ色々な話が聞けるか、と思い直し  
「わかった、有り難くご馳走になるわ」と、女の子へ笑いかけながら言つた。

## 第5話～温泉街～（後書き）

「意見」感想などあれば、お願いします。

## 第6話～仕事～（前書き）

内容をぶつりやけないと説明の回です。

## 第6話～仕事～

田の前にどんどんお皿が積まれていく。  
確かにうちの店の料理は地元の人にも観光客にも評判が良く、イグナ温泉街一の料理屋と言われることもある。でも、いくらなんでもこの量は・・・

そんなことを思いながら、給仕の女の子はボーッと田の前の状況を見ていた。

田の前には、

「うん！これは美味しいな イグナ地鶏だつけ？肉の歯応えも最高だし、甘辛い味付けも肉に合つてやたらと箸がすすむな！」

と、箸を休めることなく料理を片付けていく少年が居た。

「あ、あんた！少しほは遠慮つてものをしなさいよ！もう何皿目なの、イグナ地鶏の丸焼き？ひー、ふー、みー、・・・もう一〇皿いつてるじゃない！」

と連れの少女が叫んでいた。

「えー？もうそんなに食つたか？美味すぎてついついおかわりしちまつたよ。まあ、腹八分が健康にいいって話だし、このくんにしどくか！」」ちやうさん！ありがとう、マー！」

と、給仕の女の子」とマー」・ナカヤに少年がお礼を言つてきた。

「い、いえ喜んでもらえて私も嬉しいです。それにしてもトウヤさ

ん、よく食べられるのですね？」

ちなみに私はイグナ地鶏の丸焼きは、一皿の三分の一ぐらいでお腹がはち切れそうになるのだが……

「やうか？ 何ならちょっと食い足りないぐらいだぞ？ まあ、それだけ料理が美味かつたってことだろ」

と、恐ろしいことを言った

「ま、まあこいつの食べ物にの量に関してはいつものことだから気にしないで？」

と、連れの少女ネクさんが言った。

さらに、

「何か」「めんなさいね。大したこともしてないのにこんなに駆走になつて……」

と謝られた。

私は焦つて、

「いえいえ、とんでもない！ 本当に助かりました。お礼ができる嬉しさです！ あと、色々お話ができて楽しかったです！」

そう、お一人の出身地のカリュウ村の話や、女の子同士の話ができる、私はとても楽しかったのだ。年も私より一つだけ上なため、話も合つたし。

すると、厨房のほうから、「そつだぞ、姉ちゃん！

あいつらは、イグナでも有名な質の悪い「ロロツキ」もだ。丁度俺が出かけてた隙に店に来て、マーミにちょっかい出してやがったんだ！ 俺が居る時は全然そんなことしねえのによ……」

と、この店の店主兼料理人兼私の父親、ガシュウ・ナカヤは言った。

(店主は見た目がいかついから、それを怖がつていつもマーマーライ

悪戯ができないんじゃないかな)

俺は密かにそう思った。

(まあ、俺達も飯をぐる駆走になつたから、結果的には良かつた、と思つことにしよう)

俺達は食事のお礼をいって料理屋を後にした。

翌日、俺達は町の中心地である場所を探していた。

(昨日は結局、温泉宿屋には行かなかつた。だつて飯をぐる駆走になつたしなあ。俺の目的の九割は飯、残り一割が温泉だ。そのことについて連れは何か言いたそuddtたが、めんどくさいので無視した。)

)

それで、今探している場所といつのは口入屋だ。くちいれや

口入屋といつのは、平たく言えば職業斡旋所あっせんで、日雇いの仕事から短期、中長期の仕事を紹介してもらう場所だ。

また、自分で仕事の依頼、人足の紹介を頼むこともできる。まあ、依頼料に加えて、口入屋への口利き料も必要なので、とりあえず今は関係ないが。えーと、今の手持ちはと・・・795丸か。がん

もう、何日かは宿屋に泊まるが、あんまり余裕はないな。

ちなみに、丸はこの大陸唯一の共通貨幣で、大陸の初代霸王スサノオが、大陸を探索中に見つけた、数百年程度経つた朽ちかけた遺跡から、恐らく貨幣ではないかという数種類の丸い貨幣らしき物を基に作成されたとされている。

作成場所は、これもまた铸造所らしき遺跡を手本として建てた首都の貨幣铸造所しかなく、一目見て分かる見た目の緻密さと材質の稀少さからそこ以外では作るのは可能とされているため偽物は作れないはずだ。

材質は一番小さい物から、1丸、5丸、10丸、（銅製）  
50丸、100丸、500丸（鉄製）1000丸、5000丸、（銀製）  
10000丸（金製）

そして形は呼んで字の如く丸く、大きさは数値が大きくなるたびに一回りずつ大きくなつていく。

1丸は親指の先程度の直径だが、10000丸は手のひらぐらいの直径であり、しかも金製なので重い。

物価は、この町で料理屋での定食が一食50～60丸、宿屋に一泊すれば200～300丸といったところだ。

旅立つときに親父から1000丸ほど餞別にもらつたが、このままで宿屋に泊まなくなつてしまふので、こうして豊かな生活のために口入屋を探しているわけだが。

「ああ、あつた。あれでしょ、この町の口入屋。やっぱりカリュウのよう大きいね。」

とネクが左前方の建物を指していたので見ると

「ああ、あれだな。よし、入ってみよう」

俺は言いその建物に入った。

「いらっしゃいませっ！」

口入屋に入ると、正面の受付らしき木の机に座つた二十代ぐらいの男もとのパツチリした髪の短い綺麗なお姉さんが笑顔で元気よく言った。

俺は、愛想よく笑いながら

「元気いいね、お姉さん？ あんまりきつくなくて稼げる割りのいい仕事を探してるんだけど、何かいいのある？」

と常連っぽく言つてみた。するとお姉さんは怪訝そうに、

「えつと…お密さまは以前こちらをご利用されたことがありますか？」

と言ひのいで、

「ないですっ！」

ところからも元気よく言つてみた。するとお姉さんは若干顔を曇らせながら、

「あ、あのー。それなら初期登録を先にお願いします。

それと大変申し訳ないのですが、初期登録の方の場合は丙の下から<sup>へい</sup><sup>げ</sup>の仕事しか受注ができないのですが…」

と本当に申し訳なさそうに言つてきた。するとネクが

「『めんなさいお姉さん！』このバカの言い方が悪くて。確かにこち  
らにお世話になつたことはないんですが、別の村の口入屋で登録し  
て何回か仕事をしてきてますんで初期登録は必要ないです。」

と横から言つてきた。

バカつてお前・・・

「あ、あー そうなんですか。妙に慣れた感じがしたのはそのせいなんですね。では、登録証を見せて頂いてよろしいでしょうか。」

お姉さんが言うの俺とネクは其々の登録証をお姉さんに見せる。

「ほうほう、お一人はカリュウ村の『出身なのですね。お名前はトウヤ・ヒノカ様とネク・カナワ様。

えっ！トウヤ様は等級が乙の中なんですか！？ネク様も乙の下！。ほうほう、登録証を見る限りお一人は今までにかなりの仕事をこなされてますね？」

何か軽く驚かれていた。

まあ、三年ぐらい前に登録して、色々な仕事をこなして来たからな、それなりの等級にもなるつてもんだ。

ちなみに等級とは、下から丙へいの下、丙へいの中、丙へいの上じょうの下、乙とうの中、乙とうの上じょう、甲こうの下、甲こうの中、甲こうの上じょう、甲こうの特上とくじょう

と、十段階に区分されており当然上の等級になるほど難易度が上がっていく。等級を一つ上げるにはその等級の依頼を最低3つは成功させ、なおかつ口入屋の責任者の許可が要る。まあ、魔物退治とか最低限の強さは必要なので、そのへんを見極めるために不可欠な仕組みだとは思う。ネクが俺より等級が一段階低いのは倒せる実力があるのに見た目が可愛らしいという理由で兔（毛皮を採るために）を仕留めそこなつたり、変な失敗を何回かしたせいだ。

大まかな仕事の内容といえば、丙の下などは草むしりとか家の掃除

とかで、大したことはないが、この下とかになつてみると、魔物退治や獣を何頭か狩る、などと難易度がはね上がつてくる。

俺は手つ取り早く稼ぎたいので

「ええ、まあ。数は多くこなしてきたんで、少々きついのでも期間が長いのでも大丈夫ですよ?」

と丁寧に言つてみる。

ちまちまやつて報酬が安いのは嫌だしな。

横を見ると俺の言葉に賛同したのかネクもうんうんと頷いている。

お姉さんは少し思案して、

「うーん。そうですね。仕事に慣れてらつしやるようですが、こちらなんかは如何でしょうか? お一人の希望に沿つことができると思われますが。」

と、受付机から一枚の紙を取り出した。

その紙には、

『鬼族きぞくの村、探索隊募集!  
集え強者つわもの!』

未知の種族を調べてみよう!

参加資格: 乙の下以上の等級者十名程度

参加期間: 最短1ヶ月

報酬: お一人最低3000丸、但し成功報酬等は別途ご相談。

依頼人: アズト・ミタワ『  
と書かれていた。

## 第7話～異変～（前書き）

別の人物視点にしてみました。

## 第7話～異変～

（首都カグツチ）

当代の第16代スサノオ王の居城の一角のとある部屋では一人の男が手元の書類を見ながら馬鹿でかい声で怒鳴っていた。

「これはどうこういことだ！ 何故警備兵の被害報告がこんなに多いのだつ！」

警備の者は何をやつておる！ 他に被害は…！」

この方はシバ・ウチカネと言い、『宰相』（さいしょう）という王を武力・経済共に補佐する立場にある、王に次いで地位の高い者である。

年の頃は65ぐらいで、白髪で細く小柄な体格ながらも昔取った杵柄というか、武力官僚出身といつ經驗に由来するのか、よく日に焼けたその皺の多い顔は険しくその怒鳴り声は時に王ですら怯ませることがあるというほどの厳しい御仁だ。

私も今より小さい頃はよく叱られたものだ。主に悪戯で…。

その凄まじいまでの大声で怒鳴られながら、

「はつ！ 事に当たつた警備部隊長からの報告によりますと1隊と2隊の警備部隊を総動員して、魔狼の群れを何とか倒し、街の結界内への侵入は防いだとのことですっ！」

と顔以外を全て保護できる鎧を身に付けた男が答えていた。

こちらの男は名をガロウ・サイハと言い、年は23、高い背丈に引き締まつた体格、黒い長髪を真ん中から無造作に分けた髪型、その下にある整つた凜々しい顔立ちから、城内の給仕の女の子、首都内の女の子から大変な人気がある。

また、この若さで首都の警備部総隊長を務めるほどの武力の腕を持つていることもその人気に拍車をかけているのだろう。私はあんまり好きじゃないが。

その人気者がそう答えるとシバが、

「戯けつ！ 街中への被害が出ないようにするのは警備隊として当然じやつ！」

儂が言いたいのは、何故たかだか魔狼の群れ15頭程度に2部隊48人のうち怪我人が10人も出たかと言つことじやつ！ ましてやその内の重傷者が2名じやとつ！

最近の警備兵は鳥合の衆かつ！――」

と、さらに怒鳴りつけていた。

すると、ガロウが若干氣まずそつに、

「それに関しては面白次第もございません。

今後は今まで以上に訓練に励むように全部隊へ通達致します！」

と答えた。

すると、シバは

「ふんつーまつたくつ！ 儂の若い頃の警備部は・・・・・・

と長々と説教し始めた。ガロウも可哀想に。

だが、と私は考える。

確かに魔狼はそれなりに手強い。手強いが警備部とは口頃から対魔物用の鍛練をしており、魔狼程度なら並みの警備兵1人でも2～3頭程度なら倒せる実力があるはずだ。それこそ1部隊24人なら魔狼15頭に対して余るぐらいの戦力だ。にも関わらず第1部隊のみならず第2部隊まで投入して、さらに怪我人まで出るとはどうも納得がいかない。

シバとて、そのへんの警備兵の実力などは把握しているはずなのに、頭に血が昇っているのか、その事には触れずに結果だけを見て説教している。どうもおかしい。そう思つた私は説教がうざいといつこともあり、声をかけてみる。

「シバッ！説教はもうそのへんでいいんじゃない？」

そんな昔話よりも今の問題は魔物が街近くまで侵入してくる現状をどうにかすることだと思うんだけど。警備兵の訓練にしたつていきなり強くなるものもないしね。」

するとシバは

「確かにそうかもしけんがのう、姫。じゃが最近魔物に襲われることなく、弛んどつた警備兵にも責任はあるじやない。なにより今の若いモンは実践経験が少なすぎる。

儂らの若い頃は今よりも危険な任務ばっかりじやつたぞ。」

姫と呼ばれた私は、

「でもねえ。私もお父様と何回か警備兵の訓練見たことがあるけど、お父様も別に訓練内容に文句なさそうだったわよ。ねえ、ガロウ？」

と横のガロウに話を振つてみる。

ちなみに私の名前はシエル・スサノオ、年は15のつら若き乙女だ。父は現国王の第16代スサノオで、一人っ子の私は第一王位継承者となる。

（まあ、婿を迎えるのが王になるのだが、私より弱いやつと結婚する気はさらさらない。

自分で言つのもなんだが私の容姿はそれほど悪くはない・・・と思う。

今は亡きお母様譲りの栗色の髪を短くまとめた髪型にそれなりに整つていて、と思つ顔、贅肉のない引き締まつた体、あまり大きくなない胸・・・

だから高官の息子とか親族が私を見て怯えるのは見た目の問題じゃなく小さい時から剣術の実験台でボコボコにしてきた結果だ・・・と思つ・・・）

なので、今年元服を迎えた私は政務を覚えるために、宰相であるシバに付き合つて、ここ執務室でガロウの報告を聞いていた。

「はっ！ありがとうございます姫！しかしシバ殿の言われる通り警備兵達にも弛んだ部分もあるかと思いますので、訓練は増やそうと思いますっ！」

と言つないので私は、

「うん、それはそれでいいんじゃない？」

それよりも私が言いたいのは何故精銳の警備隊が魔狼相手にそこまで傷を負つたつてことなんだけど。

シバ？報告書にそのへんの所見はある？

するとシバは、

「まあ、実は僕も最初そう思つた。いくらなんでもそこまで苦戦するとはのう。だが報告書には魔狼の数、出撃人数、襲撃してきた日ぐらいしか書いてないのう。何か追記はあるか、ガロウ？」

と言い、ガロウは

「はつ！自分は事後報告しか受けていないので実際にその魔狼を見てなく、各部隊長の言い訳かとも思うのですが・・・」

と歯切れ悪くなつたので、私は

「いいから、どういう風に言われたの？」

と促すと、

「はい、報告の際に、第1第2部隊長が口を揃えて、「今まで戦つてきた魔狼よりも数倍強かつたです！」と言つておりました。

田付は報告書に書いてある通り4日前です。まあ、今まで魔物の襲撃を経験したことなく不意をうけたところもあるでしょうが・・・」

と言つた。私は、

「ふーん。数倍強いねえ。言い訳にしてもおかしいわね。でも、あの真面目な2人がそう言つなら、冗談とか言い訳でもなさそうだから、それこそ実際に強かつたんでしょう？」

と言つた。するとシバは別の報告書を見ながら、

「ふむ、偶々魔物が襲撃したのも4日前か・・・直接は関係ないと  
は思うが、4日前に大陸の南のほうで何か大きく光ったという報告  
も入つておるな・・・こちらは何が起こつたか見当もつかんのう。」

と何かブツブツ言つていた

「シバ？光つたって何が？どこが光つたの？」

気になつたので聞いてみると、シバは

「まあ、魔物の襲撃云々とは別の報告なんじゃが、大陸の南、イグナ町に治安の管理者として置いておる者からの報告でな、4日前の夜にある場所・・・これは島じゃな、島から大きな光が見られたといつ報告じや。ふーむ。」

と言つので、その話が気になつた私は、

「とある島？どこなの、その場所は？」

と聞いてみるとシバは、

「ああ、結界外の場所じやな。イグナの町から数10？離れた場所にあつて直接近くで見たわけではないらしいが、その方角にはその島ぐらいしかないのでそらくその島に間違いないじゃね？といつ報告じや」

と言つが私は場所にいまいち見当がつかないので、

「ふーん？結界外なら人は住んでないんでしょう？何なのかしら、そ

の光？」

と疑問に思つて言つと

「ああ、人は住んでおらんじゃろつ。ただ大陸平定当初にスサノオ王が結界を張れなかつたというその場所には、ある者達が住んでおるという話じやよ。

儂も見たわけではないから詳しいことは言えんがのう。」

と言つので、私は

「結界が張れなかつた？

ある者たち？どういうこと？」

と言つとシバは、

「ああ、結界はある強大な力を持つた者たちに阻まれて張れなかつたと、文献で見ただけじや。

255年前、当時大きな力をもつた妖術師と呼ばれた者たちの力を

持つてしても、それは叶わなかつたらしい。

その時島に居たのが人語を解し、人の形に近い人在らざる異形の者、  
亜人あじんだつたという話じや」

と言つので私は、

「えつ！？それってもしかしてお伽噺とかに出でくる鬼とか、妖精とか、あの？」

と言つとシバは、

「そうじや。まあ、若干種別が違う氣もするが・・・ともあれ、魔

物と違ひそれら亞人あじんなどは滅多にお田にかかるんが当時の書かれた文献には絵入りで書かれておつたよ

とシバが言つので、私は興奮し、目を輝かせながら

「へえーっ！－！亞人つて実在したんだつ－－！  
すごいね－－！」

そこにはどんな亞人が住んでるの－－？」

と言つと、シバはこう言つた。

「その島のことは、いつ書かれておつたよ

『鬼族きぞくの住まつ島鬼ヶ島おにがしま』

と。

## 第8話～島～（前書き）

話があんまり進まないですが・・・

## 第8話／島／

「いやー、予定人数には少し足りませんでしたが、それでもこれだけの方々に参加いただけるとは思いませんでしたよ！」

ワハハハ！つと走行中の蒸氣と帆を動力にした船の先頭に座つている男が上機嫌にそう言つた。

名前をアズト・ミタラと言い、一昨日口入屋に言つたときに面白そな仕事の依頼をしていた男だ。20代後半ぐらいで意外と若い。聞いた所によると商人兼探索屋で様々な場所で取引しつつ、未知の場所や財宝などを探しているらしい。

あのあと口入屋で受付のお姉さんに他の依頼書をいくつか見せてもらつた俺たちは軽く相談し、最初に見せてもらつたアズトの依頼を受けることにして（一つ依頼を受けると依頼を完遂するまで重複は不可なため相談した。）

資格も依頼条件に合つてたし、中々稼げそうだし、なにより鬼族きしゃくつていう言葉にとても興味が沸いたからだ。

どんな姿をしてるか、とかどれだけ強いのか、とか。まあ、そもそも旅の目的が色々なものを見たり、強くなつたりすることなんでそこは仕方がないと思う。

それにしても当初の予定より数が少ないらしいが、これで大丈夫か？とも思う。募集は10人程度とは書いていたのに俺とネクとアズトを入れても9人しか居ないぞ？予定人数に足りなくていいのか？まあ、依頼内容は調査ということらしいが。それとも、人数が揃うまで待つてられない何らかの事情があるのか？

と、アズトの言葉を聞いて参加者の中で一番年嵩の男が口を開いた。

「ふん、お主のその口ぶりだとよほど参加者の応募が少なかつたと  
みえる。

報酬の嘉多は兎も角、内容はそれほど厭込みするほどのものではな  
いと思つたがなあ？」

と他の参加者を見回しながら云つ。

最初の自己紹介のときもこのおっさんは文句を言つてたな。この程  
度の依頼内容で人が集まるのが遅いだのなんだ。

たしかこのおっさんの名前は、レンジ・ミタノ、等級は甲の下だつ  
たか、見た目は色んな戦いを経験してきたみたいな傷がいくつかあ  
る顔に髪を無造作に伸ばした坊主頭、うちの親父ぐらい大柄な筋肉  
質の身体を鋼の大鎧に包んだ大体40歳前後ぐらいか。

得物はそばに置いてある槍だろう。

と、おっさんの連れらしき男が慌てたように言つた。

「い、いや、それは言ひますけどねレンジさん。僕たちみたいに依  
頼が始まつてすぐに偶々口入屋さんに言つた方は少ないんじゃない  
でしょうか。

それにレンジさんだつて一度運よく中期の仕事が見つかつたつて喜  
んでたじゃないですか？」

この男はおそらくレンジという男と今までに何回か一緒に仕事をし  
たことがあるのだろう。気安い感じで喋りかけている。

こちらの男は名前をリクオ・シクラと言い、レンジよりも5~6歳  
は年下に見える。見た目は短めの黒髪に浅黒い顔、多少小柄で引き  
締まつた俊敏そうな身体に動きやすそうな革の鎧を見につけている。  
確か俺と同じこの中の等級でこちらは得物が左右の腰に差した二刀  
か。

アズトが、

「いや、私も募集期間は長いかとは思つたんですよ。ただ、以前別口で似たような依頼をした時に募集期間を短くしすぎて人が集まらなかつたので。

まあ、今回は募集期間をあまり長くしそぎても機を失なつたら元も子もないのに、早めに募集を打ち切りましたが・・・」  
と尻すぼみに答える。

すると

「まあ、良かつたんじやないの？予定人数はほぼ集まつたんでしょう？この子達は見た目以上に役にたちますよ？」

それにこれだけ屈強そうな殿方たちが居るんだから充分だと思いま  
すよ」

と同じ顔をした2人の少女に挟まれた妙に色っぽいお姉さんが言つ  
た。

このお姉さん名前はリシナ・ト「コウ」と言い、年は20代半ばぐらい  
で、見た目は肌の白いやたらと整つた小さな顔に、色素が薄いのか  
茶色いさらさらの髪を肩まで伸ばしすらりと高く細い身体にでかい  
胸と尻を包む上が白く下が黒い羽織袴のような服で雰囲気がとにかく  
色っぽい。

等級は乙の上で得物はまあ見たまんま』だらつな、あと手元の分厚  
い本も何なんか気になるが・・・

お姉さんの言葉を聞いた、傍らの右側の負けん気の強そうなほつ  
少女が

「そつよー。私たちが居るんだから何も心配しなくていいよ、ね！師匠！」

おじさんもそんなにくよくよしないで大丈夫だよ！私たちが居るんだから！」

と、朗らかに答える。

一回言わなくとも・・・

ちなみにこの少女は名前をアリナ・クロカゲと言う。ネクと妙に気が合って話してたみたいなんで年を聞いたら俺達の一つ下らしい。見た目は黒髪をおかっぱにし程よく日に焼けた目元のパツチリした美少女と呼べる顔、ネクより僅かに低い背丈に細い身体にリシナさんと同じような羽織袴を着ている。身体の凹凸はリシナさんに比べると少ないもののそれなりに出るところが出ている。等級はネクと同じ乙の下で得物はリシナさんと同じ『』か。

「わたしはまだギリギリ20代なのですが・・・おじさん・・・はあ、頼りにさせていただきますよ、クロカゲさま。」

アズトが軽く落ち込んだように言ひ。

すると、リシナさんの傍らのもう一人の少女が

「・・・うん・・・がんばる・・・」

とボソっと言った。

こちらはアリナの双子の妹でユリナ・クロカゲという。見た目はアリナとほぼ一緒で等級も一緒だが見た感じ性格はアリナと比べて大人しそうだ。得物は・・・ないな。いや、腰に差した短刀か？それとリシナさんが持つてるような本と似たような本が手元にあるが？あの本は・・・？

「まあ、まあとにかくみなさんようじくお願ひしますよーもつやうやう島が見えてくると思いますのでー！」

と、アズトが大きな声で言つた。

そのとせ一番後ろに離れて座つた男が口を開いた

「・・・漸く島か。漸く鬼と戦うことができるのか・・・」

その男は低い声でそう言つた。

見た目は、頭から顔まで覆う兜を被つており、身体もすべて覆いかくすようなこの大陸に伝わる鎧とは意匠の異なる銀色に輝く鎧を身に付けていた。

名前はミシル・タイナつて言つたか。背丈は大柄でおそらくレンジより少し高いぐらいではないかと思つ。兜を取つてないので顔と年はいまいちよくわからんが、声の感じからおそらくそんなに年はいってないと思う。20代半ばから後半つてところか。  
等級は乙の上で得物は背中に背負つた大剣だらう。

それはともかくこいつは今鬼と戦つて言つたか？

確かに全員武装してるがそれはあくまで島に生息する獣とか魔物とかへの備えだろ？仮に鬼が居ても調査が前提の依頼でこいつは何故戦うことが前提なんだろう？

そんなことを考へてゐるとネクが

「ねえ、ホントに鬼族つて居るのかな？」

と言つてきた。依頼を受けてからずっとこの調子である。楽しみにしそぎだら、こいつ。

「多分な。会えるかどうかが分からんが。

古い本で読んだことがあるが、かつて、それこそ250年前か？には実際に鬼を見たこともある人が居るらしい。その当時の記録はあるからな。

ただ気になるのは、その当時からかなり文明が発達して今みたいに大して時間もかからずに行ける距離なのに何故今まで誰も行ってないのか。行く価値すら無いと判断したのか？

いや、もしかしたら行つた人も居るかもしれないが鬼族に会つたといつ記録もない。何故その記録がないのか？それが分からん」

と俺の話しを聞いていたのかアズトが、

「ええ、もちろんヒノカさまの言つ通り過去にも何回か行つたという記録はありますよ。

ただ、それは海の途中で断念して引き返したりだとか、予算の都合上だとか、島内の地理が険しいとか、様々な理由があるらしいです。それで結果としては悉く鬼族に会えなかつたということです。かつて鬼族に会えたのはスサノオ王率いる妖術師を含む優秀な調査団だけでスサノオ王や妖術師が居たから何らかの特殊な力を使って鬼族に会えたのでは、というのが今現在の最も有力な説です」

俺は、

「じゃあ、アズトさんは何故今回はこの計画を実行しようと思った？過去に何度も失敗してるなら今回も失敗の可能性が高いと思うが？スサノオ王も居ないし、妖術師も居ないのに」

疑問に思つて聞いてみる。リシナさんが何か言いたそうにしたがアズトが、暫く何かを考えるようにして、

「そう思われるのはごもっともだと思います・・・・・・ここまできたら正直に白状します。実は今回の依頼に関しては政府が大元

の依頼者なのです。

そして依頼書には便宜上、鬼族の調査依頼と書きましたが、実際の目的は違うのです。」

と言つので俺は

「目的が違う?

じゃあ何のためにアズトさん、いや政府は結構な予算まで使ってこの依頼を行つたんだ?」

微妙に納得できないので聞いてみた。するとアズトは  
「それは島に到着してから話そつと思つていましたが・・・いいで  
しょう。今からお話しします。隠すことでもないですしね。

実は今から約1週間前の夜に、これから行く鬼ヶ島で大きな光が観  
測されたそうなのです。一番近い町であるイグナの観測所から見ら  
れたので光った場所は鬼ヶ島に間違いないです。それに何か不吉な  
ものを感じた政府つまり王ができる限りその光が何かを早く迅速に  
調査すべきだと判断し、イグナに拠点のある商人の私にイグナで人  
を募つて調べろと私に命じたのです。

首都から調査隊が来るまでは時間がかかりますしね。何があるか居  
るのか分からないので本当はまだ人数が欲しかったのですが、そう  
いった事情により募集の延期が不可能だったので、募集を希望人数  
以下で打ちきつたのです。」

と教えてくれた。するとネクが、

「えつと、じゃあ鬼族に関しては何もしなくていいことつことです  
か?」

と尋ねた。するとアズトは

「いえいえ、そもそも島のどこが光ったか分からぬため結局は島全体を調べてもむづつことになります。その過程であわよくば鬼族に遭遇できたら何かしら結果を残したい交流をしてみたい、とは当初から考えていました。最低期間の1ヶ月とは島を調べながら回るのにそんぐらいはかかるだらうとのことで設定しました。」

ネクが、

「わかりました。教えていただきありがとうございます。別にやることは変わらないようだし、何故急に鬼ヶ島へ行くのか理由がわかつたのですつきつきました。」

と言つ。アズトが、

「みなさま、そういう事情ですので、よろしくお願ひ致します。つと、見えてきました。あのうすら見えるのが鬼ヶ島です！」

と進行方向を見ながら行つた。感覚的にはあと20～25分ぐらいで着くだろうと俺は見当をつけた。

それから適当に雑談しながら15分少しつた頃、俺達が乗つてゐる舟は鬼ヶ島まで数百mの距離まで近づいた。

アズトが、

「あと5分ぐらいで島に着きます！みなさん一準備はよろしいでしょうか！」

といつので、参加者が各自返事をしたり身支度をし始めた。

「では、みなさま。島に着きましたらくれぐれもほぐれないようこ

・

と、アズトが注意事項を言おうとしたとき、

ド――――ンツ――!

という大きな音がし、それとほぼ同時に、舟のすぐ傍の海が大きな衝撃に襲われた。

第9話～大砲～（前書き）

少し間が空きました

## 第9話／大砲

それは唐突に起こった。

転覆こそしなかつたものの乗っている舟は大きく傾き水飛沫が波となり舟を覆つたため、最初は何が起こったのかは一瞬分からなかつた。

ただ、先程聞いた音と現在の状況を鑑みるに、乗っている舟そのものではなく、すぐ傍の海に何らかの攻撃を受けたのだということは分かつた。

俺は舟の周りを見渡して、凡そ数百m後ろのほうに僅かに白煙を上げている舟が一隻見えた。

火の大陸では火の神剣の恩恵によるものか硝石がどの大陸よりも多く採掘される。

硝石はそのまま使わずに加工をすることによつて火薬となり使うことができる。暦が始まる前ですらもほぼ全ての集落で加工方法は確立されていたのはこの大陸ならではの特性だとも言える。加工された火薬は様々な面で人々の生活に活用されている。

それは、日常生活において調理や風呂焚き、鍛冶などの火を使う作業の際に燃焼を促進するためというのが最も普遍的な活用方法であるが、一部の者にとつては別の利用方法がある。

例えば首都や街、大きな町などにある技術研究所では、過去の文献資料や遺物を基にした様々な研究、開発を行つてゐるが（場所によつて規模や求める内容の違いは勿論あるが）、その研究の中でも最

も急務とされるのが燃料、武器、この二つの確保、開発である。

まず燃料の研究の必要性とは何か？

それは移動の効率化、新たな移動手段の開発にある。

現在でも馬車などの移動手段はあるが、舗装がされていない山道等が各集落を繋いでいるため移動速度は決して早くない。辺鄙な場所にある村へ行く際にはその手前の村に馬車を預けることもあるぐらいだ。

それゆえ一部の富裕層を除いて馬車の使用方法はあまり好まれていない。

そういうつた現在の状況により燃料を優先的に研究するのは必然とも言える。

そして、かつて数千年前にあつたとされる文明においては移動について驚くべき記録が遺されていた。

それはこの広大な大陸を僅か2日程度で縦断していたというものだ。現在でこそ約二十年前に確立された蒸気船の移動速度により海上の移動においてのみ、大陸の端から端まで約10日程度でたどり着くことができるが（海上で運よく魔物に遭遇しないことを前提として）かつては陸路を通つて大陸を縦断するには最低でも半年はかかるとされていた。

なので、各村や町の交流、非常時への迅速な対処などの理由から陸路においての新たな移動手段の確保、移動手段への燃料の開発は最も急いで確立すべき分野だとされている。

（ちなみに実物や絵こそ遺つてないものの文献から推測された移動手段の形は、車輪が2つないし4つある本体に動物を利用せず燃料を利用した数人ていど運べる無機物、車輪を利用せず移動手段用の専用通路が確保された数百人が一気に移動できる燃料を利用した大きな無機物が検討されている。

前者は普遍性はあるものの移動手段である本体の開発における途中過程が行き詰まりまた燃料の確保開発方法に検討もつかない状態で

あり、後者は蒸気船の応用により移動の原理や燃料は解析可能なもののようにも思えるが実は、現在ある道の整備且つ移動用の専用道の確保が先ずは先だといつ、大きな問題点を抱えている。

武器の開発については、新たな移動手段の発展と同じく大きな規模で研究が進められている。  
基本的にこの大陸で武器というのは、魔物との戦闘用のもののこと

を指す。

倒しても倒しても絶滅することのない魔物、その発生源や発生要因は魔物の分布図を作成する際にも不明だつたという話だが、人を襲つてくる以上はそれに対抗する手段を得なければならぬ上に素手の格闘のみでは限界があるので、より効率の良い武器の開発というものは必須となる。

対抗手段の主流としては剣術だが、遠距離からの攻撃ができる弓、石や刃物の投擲とうりきも戦法としてよく使われる。（鉄鉱石の採掘、鍛冶屋、警備兵、等は安定して職が得られるためなりうとする者は少なくない）

なので、剣や弓等の武器屋は大抵どこの村にある。だが、戦いの手段を持つものの自体は、人口の多い街ならばともかく人数が少ない村などは少ない、もしくは1人も居ないというところがあるため、例えば大量の魔物に襲われたり不意に襲撃を受けた際の対応等が懸念されている。

そんな状況の中、20年程前に火薬を利用した武器の開発をしてはどうかという声が上がり、数年前試作品とも言えるものが完成した。それが大砲である。

大砲が現在の形となつた経緯は（まあ、実物を見たことはなく村に来た行商人に話を聞いただけだが）首都近くの沿岸に置いてあつた奇妙な形の彫像を調べていくうちにその用途が推測され、昔の文献を調べるとその彫像、弾の作成、使用方法が載つていて火薬や鉄を使用し、それを基にして完成にこぎ着けたという話である。

大砲の利点としてはその大きな威力、非力でも使い方が解れば誰でも使えることがあるが、欠点としてはその重量により持ち運び、移動が困難なことにある。

また、技術的、予算的な問題により現在のところ首都にしか製造場所がなく、他の町への移動には時間がかかるため完成した数個は未だに首都にあるはずだが、そこまで考えて声がした。

「ね、ねえ今のついで……」

ネクが不安そうに言つので「大砲だらうな。」

俺が簡潔に言つと、

「やつぱりーでも、どうして！？」

このどうしてには2つの意味があると思つ。つまり

「どうしてってこいつのは、どうして海上に大砲があるのか。どうして俺達を、おそらくこの船を撃つてきたか、だな」

もう一つ疑問はある。

聞いた話じゃ大砲ってものの射程距離は最大で数十m、つまり視認はできるがあれだけ離れた距離から届いたのはどういう理由だ？

技術が進歩した？ 短時間で大幅に？ あり得ないだろ。首都にある最先端の技術で漸く固定式、車輪式の大砲が完成したというのは、結構最近の、ここ数ヶ月程度の話だつたはずだ。あり得ないだろ。いや、そんなことよりも、

ド――ーン――!

音がして今度こそ船に直撃したか、と思つたとき、

船より約20m程手前で、砲弾らしき塊が空中で爆発した。見えない壁でもあるよつて。

「えつ、何今の？途中で止まつた？」

「止まつたな。どうしたことだ？」「

ネクと同様俺も全く意味が分からなかつたので、だれか説明してくれないかとあたりを見回してみると、

「出来れば使いたくなかったんだけどね。流石この状況がしうがないか。」

リシナが船の後ろ側、もう一隻の船の方向に両手をかざしながらそう言った。

よっぽど困惑訝な顔をしていたのだろう（双子の姉妹は妙に嬉しそうだが）

慌てたようにリシナが続けた。

「つまり、大砲に狙われてると思ったので対衝撃用の不可視の壁を作つたんですよ。」

と照れくさそうに言った。と言われても・・・

「結界術の応用つてことよ！師匠は凄いんだから

双子の姉アリナが胸を張つて言つ。

「結界術？つまり妖術か？」

俺が疑問に思い聞くと、

「古いなあ、言い方が。

昔は確かにそういう風に言われてたけど、師匠は退魔師なの。だから厳密には退魔術つて言つべきね！」

偉そうに言われた。

「成る程。どうこう理屈が分からんが、その退魔術とやらを使って

砲弾を途中で止めたわけか。凄いな。でも退魔術つまり結界術は昔にその技術が失われたんじゃなかつたのか？使い手が居なくなつて

と言つと、リシナが

「ええ。確かにそつなんだけど、うちの家系は代々魔物退治を生業としていてね、様々な技法を研究していく過程でかつて妖術と言われたものの技術を確立したの。」

と言つが、そんなに簡単なものだらうか？

「まあ、とにかく助かりました。ただこちらへ攻撃した輩はまだあそこに居るので、取り敢えずどうしましようか？逃げきれるかどうか。・・・」

アズトがそこまで言つたといひで、

ブオーーーンッ！  
ドルルルルッ！…！

と言つ音がした。

ネクと俺が、

「なんかあの船、どんどん近づいてない？」

「ああ、凄い早さだな。」

見ると先ほど変な音がしてから、船が一いつ瞬く間に早さで接近している。

距離凡そ300m、200m、100m、50m、・・・

乗っているやつの姿が視認できるよくなつたので見ると見たこと  
もない格好をしていた。派手な色合の服、身軽そうな格好だ。  
それに細長い筒みたいなものを手に持つてゐるが、あれは・・・?

距離30m、20m、・・・

そこまで近づいたとき、

ミシィ！

という何かが軋むような音がして接近が止まつた。

乗つてゐるやつらが慌てたようだが、おそらく先ほどリシナが張つた対衝撃用の壁にぶつかったのだろう。しかし結構な早さでぶつかつて船に傷がないのはよほど頑丈な作りなのか?それにとんでもない早さだった。

あいつら(ざつと20人ぐらいか)が手に持つた筒を此方へ向けた瞬間、

パンツパンツ！

という音が鳴り、見えない壁のあたりに小さい塊が一瞬止まり十数個の塊が海へ落ちた。

あの筒はつまり飛び道具か!火薬を利用した小型の大砲みたいなものか?

威力はいまいち分からぬが・・・

「ダメね。そもそも限界みたい・・・」

という声ががした。

見るとリシナが青い顔でつらそうにしていた。

「やつぱり、規模の大きな結界を張ると妖力をかなり使うみたい。  
と、しゃがみこんでしまつた。つまり壁がなくなつたということだ。  
あいつらは間違いなく敵だろうな。しょうがない。」

「ネク、俺ちょっとあっちに行つてくるわ。」

と言いながら、オーラを全身に纏わせて身体の強化を行う。

そして20m程跳んだ。

## 第10話～疑問～（前書き）

ようやくとうとうあえずの目標十話を達成しました。  
これもひとえにご愛読いただいている皆様のおかげです。  
今後とも、よろしければ拙作にお付きあい下さい。

## 第10話 疑問

私は、私という存在を為すものを殆ど全て失った。

あの日から・・・

あの日・・・ウォルス王国、その王族を護る立場である護衛騎士、その隊長であるミーシュール・オルレアンはいつものように王宮に出向き務を果たしていた。武官長会議、部隊編成の相談、王家の食事の付き添い、など本当にいつも通りの一日だった・・・そのまま筈だった。

だが、それは突然起こった。

いや、やつて來たというべきか。

夕食も終わり、1日の責務も別の者との交代時間が近づいていた、ということもあり多少私の気が抜けていたということを差し引いても、私の動搖は護衛騎士隊長にあるまじき対応の遅れに表れていた。王宮内、しかも王の寝室の扉の前にそいつは立っていた。私よりも一回りは小さく見えるその全身を覆う黒いローブを身に纏い、その右手には銀色に輝く杖を持つていた。唯一見ることが出来る肌の部分、両手とフードに隠された顔の下半分は驚くべき白さだった。

如何にしてここに? という疑問、あまりにも唐突すぎる出現、といふこともあったが、何よりそいつのあまりにも異様な雰囲気に私は立ち竦んだ。

明らかな害意らしきものを持ってその場所にそいつは立っていた。だがそれも一瞬のことだ、

「何者だつ！貴様つ！」

と、私がそいつへ向かつて言つといつは

「貴方に用はないわ。邪魔をしないで頂戴。」

と丁寧な口調で言つた。

若い、まだ少女と呼んで差し支えない女の声で。

「貴様つーー」がウォルス王の寝室と知つてのことかつ！

私はそう言いながら背中に背負つたバスターードソードを抜いた。

「勿論。王を消す為にここに来たのだから。面白いことを言つね  
貴方？」

「貴様つーー！」

言つと同時に私は約5m程度の距離を一気に飛んで詰め、剣をふりおろした。

だが、

ギインツ！

弾かれた。

何も持つていなかの細い左手で。

「な、なに？」

今起じつたことが信じられなかつた私は、更に剣を振つた。何回も。何回も。

ギインツ！  
ガギイツ！  
ガイインツ！

しかし、全て左手に弾かれ、防がれる。  
何者だ・・・いや、今はそんな場合ではない。  
こうなれば、最も強力で速い技を出すしかないと覚った私は、一瞬  
呼吸を整え・・・

「セイヤアツ！！！」

銅を狙つた高速の一呼吸での三連突きを繰り出した。

ギンツ！ギンツ！ギンツ！だが、全て左手に全て弾かれた。

「ハアツ、ハアツ、まさかこんなことが・・・この私がこうも簡単  
にあしらわれるだと・・・？」

「ふうん。この国の剣技は中々のものね。消すのは少し勿体無いか  
しら。」

「さ、貴様！消すとはどういってんだつ！？それに何故王の命を狙  
うつー？」

「フフ、消すっていうのは分かりづらかったかしら？文字通り消滅  
させるのよ、この国を。何故？決まっているじゃないの、邪魔だか  
らよ。王も國も。まあ、他の歯いたえのないのよりは貴方は多少ま  
しだったから残してもいいわね。」

と、少女は言いながら

「まあ、貴方とのお遊びに付き合ひのは飽きてきたからそろそろ終わらせるとしましょう。」

そう右言い、手に持つた杖を此方へ翳しながら、

「ファング」

そう言つた瞬間杖が物凄い勢いで太く長くなり、それが私の銅へ伸び私の身体は杖で壁に押し付けられた。

「ガハアッ！」

私はあまりの衝撃に声をあげながら、口から血を吐いた。

「あら、呆気ないわね。まあ、私の波動に触れながら戦えるだけでも大した腕だけだね」

そう言つと少女は杖を元の大きさに戻し左手を扉に向け、扉を吹き飛ばした。そして無造作に中に入つていった。  
途端に中から、

「貴様、何者じやつ・ミショールツ！曲者じやつ・ミショールツ！」

といつウォルス王の声が聞こえてきた。

「ウォルス王つ！

お逃げくださいっ！！」

倒れ伏した私は氣力を振り絞つてそう叫んだ。だが・・・

「あや―――――！」

といつ断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「ウォルス王―――！」

それを聞き私はウォルス王の死を覚つた。

少しして、

「ふう、お掃除終わり。」

と言いながら少女が部屋から出てきた。

「あ、貴様よくも、」

私は倒れた状態で少女を睨み付けながら、そう言った。

「ふふふ。貴方しぶといなだけじゃなく精神力も大したものね。」

何故か嬉しそうに少女が私を見てそう言った。

「殺してやるぞ、貴様あ」

「そうね。そのぐらいの気持ちなりいつか辿り着けるかもね。貴方なら・・・」

「何を言つ、グハア！」

ようめきながら立ち上がろうとした私を少女が杖で打ちさえ、私は意識を失つた。

「まあ、貴方が生き残るかどうか分からぬけど、可能性はあるわ

ね。」

少女は独り、ちて、僅かに微笑した。

「…  
目が覚めたとき私は悪い夢を見ているのだと思つた。何故なら目の前には、

「すつきつしたでしょ、う？」

後ろから声がしたが、

「な、なんと・・・い・・・う」

私は振り向かなかつた。

何故なら、目の前の光景に目を奪われていたからだ。

「ど、どひこひことだ・・・こは何処だつ！」

私は混乱しながらも、後ろを振り返り少女に怒鳴つた

「何処？貴方の祖国でしょ？ いえ、正確には元祖國と言つたほうがいいかしら？」

その声を聞き、私はさらに混乱した。

あたり一面火の手が上がり、建物らしきものすらないここが我が国だと？  
バカな！

「まあ、信じられないのも無理はないでしょ、うね。でも、」

と、少女が言いながら自分の真後ろを指した。

そこには、先ほどまで自分が居た城があった。ウォルス城が。

「ウォルス城だ……と？」

驚愕に満ちた目で私は城を見た。何故なら、城の周りにあるべきものが何処にもなかつたからだ。

「バカなつ！……」これがウォルス城なら他の建物はつ……町はつ！  
城下町はつ！私の家はつ！」

「全部燃やしたわ。人々と一緒に。」

「ふざけるなつ！そんな戯れ言をつ……」

「信じられないのも無理はないけどね。」「やつたのよ。」

と少女は言つと、城へ向かつて杖を翳しながら

「ヘルブレイズ」

と言つた。すると凄まじい規模のそれこそ城ぐらいの蒼白い炎が出  
現し、瞬く間に城を呑み込んだ。

「あ、あ、あ……」

「つまりこういう風にしてウォルス王国を燃やしたっていうこと。  
理解できた？」

私は目の前で起きたあまりに現実感のない出来事にただ呆然とした。

「あらら、分かりやすく説明したつもりだけど、驚かせたかしら？」

「え、き、貴様は、な、何者だ。な、何故こんな残虐非道な真似をするつ……！」

「何故？先ほども言つたけど、邪魔だからよ。」の国が。それに会いたいモノがあるから。私が何者つていうのは知らないほうが良いと思うわ。もし、いつか辿り着いたら自然と分かることだしね。」

「辿り着く？どういう意味だつー？」

「そうね、可能性がある貴方には辿り着けるヒントぐらいあげましょーか？」

そう言つと少女は少し寂しそうな顔をした。そして、「まず私は、人間ではないの。そうね、この水の大陸や他の大陸での呼称で言えば亜人とか鬼とかデビルとか呼ばれているわ」

そう言つとおもむろに被つていたフードを捲つた。

そこには、長く伸ばした金髪に青い目をした一目見ただけでは人間の少女と変わらない顔があつた。  
額から出た角を除いて。

「まあ、見た目の違いと言つても角ぐらいだけじね。あと、年齢で言えば貴方の数倍は上ね。」

「貴様……何処からやつてきた……？」

「言つてもいいけど……今の貴方には決して辿り着けないわよ。  
それよりも、」

と、言うと此方へ杖を翳してきた。

「私を殺すつもりか？」

「まさか！折角可能性がある人に会えたもの。ただ今の貴方じや駄目ね。もつと強くなつてもらわないと」

と、私の周りに光る文字が浮かび上がってきた。

「な、なんだこれは！」

「転送魔方陣よ。今から魔法で貴方を何処かの大陸に飛ばしてあげる。ちなみに貴方を倒したのも、城を燃やしたのも魔法によるものよ。」

「魔法だ・・・と？」

「そう。私は太古に失われた筈の魔法を使えるの。ひょっとしたら貴方も使えるようになるかもね。」

「ま、まで！私を何処へ！」

「さあ？まあ、人が居る大陸だとは思つけど。じゃあ、さよならね。再会を期待しているわ」

そして身体が光ったと思った瞬間、私は意識を失った。

目を覚ましたとき私は山中に居た。

そして人の悲鳴を聞いた。人が居ることと悲鳴の原因が気になりその場所へ行つてみると、1人の男が大きな一頭の熊に襲われていた。幸いなことにと言つべきか私の騎士の鎧と愛剣は装備したままだったので、すぐさま熊を倒すことができた。

男に事情を聞いてみると、隣村に行商に行く途中に熊に襲われたしい。

現在自分の置かれた状況を把握するためその男と色々な話をした。どうやら、ここは火の大陸という大陸らしい。1日で様々な信じがたいことが起きすぎて頭が麻痺してしまったらしい。疑うこともなく私はその話を信じ、他に当てもないので男と共に行動させてもらうことに頼んでみた。

用心棒が欲しかつたらしい男は一つ返事でその申し出を了承した。

男の名はアズト・ミタラと言つた。

／＼＼

3ヶ月程前に自身に起つた出来事をミショール（今は偽名としてミシリル・タイナを名乗つている）は思い出していた。

思い出す契機となつたのは先ほどの光景にある。

リシナと名乗つた女が見せた技、あれこそあの少女が使つていたような魔法ではないのか？

呼び方は違うみたいだが、共に人智を越えた力という点では似たようなものではないのか？

それに、トウヤとか言つたか。あの少年は今、身体が光り普通では考えられない距離を跳んだが、あれも魔法の一種ではないのか。この大陸には魔法が伝わっているのか？

当初アズトから鬼の巣窟に行く話を聞いたときはあの少女や魔法に

関して何らかの手がかりが得られるかも知れないかと思つたが、思  
わぬところから手がかりが得られそうな感触があり、ミショールは  
密かに唇を歪めた。

（）

船に飛び降りた途端乗っている奴らが手に持っている筒を俺の方へ  
向け、何かを飛ばしてきた。火薬の臭いがしたので、おそらく大砲  
を小さくしたような物だと俺は見当をつけた。  
その武器らしき物からはかなりの速さで塊が飛んできた。  
だが、オーラで強化している俺の身体には傷一つつかない。  
すると、

「何故だつ！何故大砲も銃も効かないつ！！」

と、一人の男が言った。

「と言われてもな。大した威力じゃないしな。全然効かないが。む  
しろお前らに聞きたいがお前らは何者だ？あと何故俺たちを狙う？」

俺が聞くと、男は

「貴様のような小僧に話すことはないつ！死ねつ！」  
と、憲りずに手に持った筒（多分銃というのだつ）を此方に向け  
て、塊を飛ばしてきた。だが、

「いや、だからその攻撃は効かないって言つてるだろ？そんな無駄

な」とをするよりも「

と、塊を弾きながら俺は剣を抜きその男を斬った（手加減は一応した）

男は倒れ、他のやつは驚いた顔をしていた。「俺達を攻撃しているつもりなら俺は降参を薦めるぞ。」

と言いつつさりに近くに居た数人を斬った。

「質問に答えないなどんづらお仲間がやられるぞ。」

「う言ひと」の中で一番歳上らしき男が答えた。

「俺達は探索者だつ！失われたものを探している。貴様らを襲つたのは先を越されないため排除しようとしただけだ！」

「探索者だと？失われたものとはなんだ？それにお前らの技術だ。この船は何だ？何故大砲がついている？それにこの船はいつたい何故あんな速度が出せる？」

俺は気になっていたことをまくし立てた。

「UJの船はレビュアス国で最新鋭のモーターと武器を積んでいる。失われたものとは太古の・・・」

男はそこまで言つて後ろの男達と何やら話しだした。

「キャプテン・・・どうやって・・・」「

・・・手持ちの武器だけじゃ・・・

「逃げるにも・・・」

「・・・いつそのこと・・・」「

と話していく声が聞こえる。俺は、何となく納得できず、

「つまりこういうことか。お前らはとあるものを探している探索者で、それを手に入れるため目的の場所つまり鬼ヶ島に行こうとしたところ、先に俺達の船が見えたんで先を越されまいと、この大砲を積んだ船で攻撃してきたというわけか。それにしてもレビューアス国とは・・・？」

と言つた。

「あ、ああそりゃ。だが鬼ヶ島だと？あの島は何らかの加護を受けているとはばずなのだが？」

「加護？ああ、加護といつ言い方をするならこの大陸は火の神剣の加護を受けているぞ。」

と俺が言つと、男は

「火の大陸だと！？バカなつ！？そんなばずはつ！？な、なら・・・我らは・・・間違つたというのか・・・」

驚愕に満ちていた。

「ん？火の大陸ならまづいのか？」

不思議に思い聞いてみると  
「貴様には関係ない！」

と、焦つていた。その態度に軽くムカついたので、

「そりゃ、何を間違つたかよく分からんが残念だつたな。  
ただ、別に心配しなくていいんじゃないかな？」

軽く深呼吸し、

「お前らはここで全滅するんだから、なあつ……」力を込めてオーラを放つてみた。

結果、  
グォオーッといつ音とともにオーラの奔流がその船の男たちを襲つた。

（）

直接怪我こそしないまでも、その少年から進る「プレッシャー」により  
我が船の乗組員達は立つこともままならなくなつていぐ。  
これはなんだ？圧倒的な力を感じるが……」のままでは田的を果たせないまま・・・それだけはつ

決して目の前の少年に勝てないことを覚つた私は、

「また、まつてくれ。君達に服従するーだから助けてくれー！」

命乞いをした。  
すると、

「へえ、判断が早いな。  
プレッシャーが止んだ。

「まあ別に殺す気はなかつたけどな  
」

「とにくぐ、あんたらの存在とか目的とかが分からなさず。服従とかはどうでもいいが、知つてこることを全て喋つてもうおつか？」

「あ、ああ。私も知りたいことがあるしな。勿論話せ。」  
「こうなつたら仕方ない。本来他国の人間に言つべきではないが……あの島にはあれは存在しない可能性が高いが、命を失うよりはまだ。まあ、殺されなかつたかもしれないが……」

「とつあえず、その手に持つてる物は渡してもうおつか？」

「勿論だ。そもそもこんな物では君に傷一つつけられないしな。おいつ！」

私は、乗組員に銃を渡すように促した。それを袋に入れ少年に全て手渡した。

「俺より遙かに色んな知識を持つた奴があつちには居るからあつちで話そ。あつちまで船を寄せて乗つてくれ。あんたに危害は加えないから」

「ああ、分かつて。ただその前に一つ聞かせてくれないか？」

「ん、なんだ？」

「先ほどの君の力、あれはいつたい……？」

「ああ、あれはオーラだ。一応説明すると、オーラっていうのは人が体内に秘めたエネルギーのことだ。それを体外に出し自分の力として肉体を強化したり、具現化したり、放出したりするなど色々な使い道がある。」

「そうか、あのプレッシャーはそういうことか・・・それで銃も効かなかつたのだな。」

「やつぱりあれは銃っていうのか。それはともかく俺もあんたに聞きたいことがある。」

「なんだ? この期に及んで隠し事はしない。」

「先ほど言っていた(失われたもの)とは一体何だ? 気になるんとどりあえずそれだけ教えてくれ?」

なるほどと私は頷いて、

「その失われたもの、というのは、つまり太古に存在していたとされるものだ。」

「太古に存在していた?」

「ああ。実物を見たことはないが、私の国レビュアスでは建国当時よりそれを崇めている」

「崇める? つまり火の大陸で言つところの神剣みたいなものか?」

「神剣? 七つの神のことか?」

「そうか・・・火の大陸では剣として伝承されているのか。まあ、どちらが正しいのかは判断のしようもないが。」

船が少年の船に接した。

「いや、1人で頷いてないで説明しろよ。何を崇めていたっていうんだ?」

「神だよ。ただ火の大陸と違い、剣ではなく獸じそだがね神獸しんじゆと呼ばれるものだ」

「神獸?」

「そうだ、神獸レヴィアタン、水を司るとされている伝説の獸だ。そこまで話したところで、私は少年と共に少年の船へ移動した。」

## 第11話「探索者たち」（前書き）

大した違いはないですが、サブタイトルが今までより少し長くなつたりします。

## 第1-1話「探索者たち」

（）

『大いなる守護者により、この地は護られている。

かつて大地は荒れ果て、海は猛り、およそ生物と呼べるものはその存在さえ叶わなかつた。

だがある日、この地に神が舞い降りた。巨大な水龍に姿を変えたその神の御力により、川は流れ出し、大地が潤い、生物が生まれ落ちた。この地と肉体を分けた彼の6大陸と共に。

我らは決して忘れてはならない。今こづして我らが在るのは水神の御加護によるものだということを』

レビューアス国聖書より抜粋

（）

「つまり、その祈祷師きとうしとやらの御告げに因つて、貴方達はこの島を目指して来た、というわけですか？・・・しかも私達を略奪者と勘違いして攻撃してきたと？」

アズトは憤慨しながらそう言つた。まあ、怒るのも無理はないだろう。こちらからすれば、いきなり大砲をぶっぱなされて殺されかけたのだからな（リシナがいなければ間違いなく船に直撃していた）

言われたガルディアは、

（先ほど自分のことをレビューアス国レビューアタン探索団団長ガルディア・ソーヴと名乗った）

「そのことに関しては申し訳ないとしか言い様がない。だが、我が国が置かれた状況も察していただけると助かる・・・」

若干すまなそうに言い訳がましく言つた。口だけならなんでも言えるからな。それにしても、

「まあなんだ、その隣国のウォルス王国だつてか？そこが一夜にして壊滅、いや消滅して、早急に対応策を練る必要性があるっていうのは分かるが、他にやりようがなかつたのか？」

と、レンジが疑問に思つたことを言つた。

「他に、と言つてもな・・・我が国の王や知恵者、科学者などが全員で相談しても一体何が起つたのか見当もつかない様子だつた。」

ガルディアは答える。

が、俺は改めて考えた。

そんなことがあり得るのだろうか？

聞いたらウォルス王国というのは、国土こそ火の大陸の5分の1もないが、人口は約10万人程度しかも文明は明らかに火の大陸より進んでいるであろうレビュニアス国と遜色ない程度だつたということだ。建物も木造はあまりなく土を練つた硬く燃えにくく崩れにくい材質だつたらしい。

もし、ガルディアの話が本当だつたとしたらどうやってそんな状態になつたのか全く見当がつかないというのは理解できる。

「襲われたことはともかくとして、あの島に何かありそうなのは確定だな。」

俺はそう納得した。いや、おそらく俺以外も皆納得している。が、

「いやいや、それは確かにそうかもしれないけど…でもこいつらはあたしたちを殺そうとしたのよ！」

ネクがガルディアのほうを見ながら興奮した様子で文句を言つ。

「まあ、さうだけじゃなあ。でも、こいつやつてみんな無事だったし。それに正直鬼ヶ島で何があるかは全然分かつてない状態だから少しでも戦力はあつたほうがいいと思うぞ？しかもレビュニアス国の中は大陸に持ち帰つたら丸を稼ぐよりも割がいいんじゃないかな？」

「…」

俺の説得（？）によりネクは納得できたのか口をつぐんだ。すると、

「いやあ、それにしてもトウヤさんがあれだけ強いとは思いませんでしたよ。」

アズトが妙にこじこじながら言つた。

アリナが、

「そうね、ちょっと離れててよく見えなかつたけど、それでも凄い速さで動いてた。何人も一撃で倒してたし。いきなりあの距離を跳んだときは一瞬何が起つたか分からなかつたよ。」

と、言つた。

俺はそこまで本気でやつたわけでもないし驚かそうと思つてやつたわけでもないのだが。とりあえず一件落着したからよかっただんじやないかな。

横でガルディアが苦虫を噛み潰したような顔をしているのはさておいて、

「まあ、さっさと行つて片付けたほうが安全だと思つてやつただけなんで。それよりもリシナさんのほうが凄かつただろ？」

「師匠はねえ。確かに凄いけど、もうその凄さに見慣れたつていうか・・・師匠なら間違いなく何とかしてくれるつていうか・・・特に驚くことでもないんだよね。」

そう誇らしげにリシナのほうを向きながら言った。

「私も大砲ぐらいなら何とかなると思つてましたからね、退魔術で。ただ、防いだあとはどうしようかと考えてなかつたので助かりました。」

此方を微笑みながらリシナがそう言った。

「まあ、こいつらの遭遇に関しては、降伏したんだしこのまま上陸して一緒に調査をしたあとで考えたらいいんじゃねえか？」

レンジがそう言つて、リクオが、

「そうですね。ただ単に割のいい仕事だと思つてたら雰囲気が怪しくなつてきたんで、仲間は多いほうがいいですね。」

「と言つた。話を聞くうちに光の正体がいよいよ得体の知れないものに思えてきたのだろう。神獣つて。  
俺も神獣をどう調べればいいのかせつぱりだしな。

「ああ。此方は殺されても仕方ないぐらいのことをしたので、殺されないのでなら勿論協力させてもらつ。正直な話を言えば大幅な戦力増強になるのでとても助かる。」

ただ・・・

ガルディアが言いにくそうにしたので、

「なんだ？」

レンジが促すと

「島内を調査したあと、もしその光の正体がレヴィアタンだつたら、我々を解放してくれないか？国に戻りどうしても報告しなくてはならない。

勿論相応の見返りは支払う。現在、我が国は大変押し迫った状況にある。平たく言えばいつ得体の知れない輩に襲撃されるか気が気がではないのだ・・・だからどうしても結果を報告する必要がある。」

「うーむ・・・どうするよ坊主？」

レンジが何故か俺に振った。坊主って。俺はそんなに子どもに見えるのか？

確かに、実際に降伏させてこの船に連れてきたのは俺だから分からなくはないが・・・しうががないな。

「いいぞ、ガルディア。解放してやる」

「ほんとかつ！感謝する！」

「ただし、俺も連れていけ。他の大陸それも文明が進んだ大陸を見てみたい。」

「あ、ああそれは構わないが、あの最新式の船でも片道で約1週間かかるぞ。国でも用事を済ませるのに少なくとも10日ぐらいはかかるから」「ちらへ連れ帰るのは一ヶ月ぐらいはかかるぞ。いいのか

？」

「ああ、構わない。」

「あたしも行くつ！相棒のあたしも忘れないでよね！」  
急にネクが言い出した。相棒つてお前・・・この仕事が済んだら別行動しようと思つてたが、別に断る理由がないな。

「だそうだ。ガルティア、いいか？」

「大丈夫だ。」

「あのー、私も連れて行つてもらえませんか？それともう一人。」  
今度はアズトが言い出した。ガルティアとミシルのほうを交互に見ながら。

「アズト？あんた仕事はいいのか？」

「いや、むしろ稼ぐために行きたいんですよ！そもそも水の大陸まで行くにはカグツチにある最新式の蒸気船でも片道一ヶ月は早くてもかかりますからね。それに伴う費用が尋常じゃないのですよ。ガルティアさん、あの速度と大きさの船なら少々の荷物は大丈夫ですかね？」

「ああ、人があと何十人か乗つても余裕がある。その点については問題ない。」

「じゃあ、よろしくお願ひしますっ！」

旅費やら護衛費がかからず莫大な費用を使わずにいける、とか言うアズトの声が聞こえてくるが、気にしないことにした。

ガルティアがミシルを見て

「その男もだな・・・全部で4人か。まあ、こちらとしては断われる立場でもないし、特に問題はないのだが・・・それとは違つちょつとした疑問といつか謎といつか・・・」

言つべきが言わざるべきかといつ風にガルティアが言い淀んでいたので、

「どうした、ガルティア？どうこいつなんだ？」

聞いてみると、

「いや、な。その男、もしかしたら水の大陸の者ではないかと思つたのだが。」

と、ミシルを見ながら言つ。

「何故だ？」

「つむ。先ほど言つた水の大陸の国の1つウォルスの騎士があの男が持つているような大剣を好んで使つていたからな。ただウォルスはもうないし移動手段やウォルスの国交を考えてもこんなところに居るはずがないと思つてな・・・」

こいつは水の大陸から来たのか？と思つてミシルを見てみたが、

「・・・・・・」

ミシルは何も言わなかつた。

「ま、まあそれはどちらでもいいじゃないですか？そんなことより

も時間が惜しいので早く島へ行きましょう!」

アズトが僅かに慌てたように言った。確かに早くしないと時間がもつたいないな。夜になつたら調査どころじゃないし。

皆が顔を見合せ頷き、

ガルディアが、

「お前ら島へ行くぞ! …」の船に付いてこいつ…

自分の船へ叫んだ。

（＼＼＼

あのガルディアという男、そう言えば何年か前に見たことがあるな。レビュアスのウォルス担当の行商人のお供か何かだつたか。先ほど黙っていたのは別に素性を知られたくないとかじやなく、単に我が身に起こつたことを説明できなかつただけだ。いや、できなかつたというよりむしろ説明しても信じないだろうと思つたからだ。特に不都合はない。

それにしても神獣か・・・あの少女もその類のものだつたのかもしれないな・・・

ミシエールはそこまで考え他の者と一緒に上陸の為の準備を始めた。

（＼＼＼

そして、

俺達は漸く鬼ヶ島へ上陸した。総勢20人。

ガルディアの船には19人乗つていた。その内何故か未だに立てないやつが5人その看病で1人もう2人は船の管理、整備のために残

した。つまり上陸したのはガルディアの船からは11人（銃はとつ  
くに返している）、俺達は9人だ。

話してみて俺達を殺すよりは（無理だろうが）協力したほうが遥か  
に効率的だと考えたのだろう。皆協力には納得していた（俺のほう  
を見て若干怯えていたが）

そして、調査の効率を上げる為に班分けをした。

もし戦いになつた際に強さや連携、親しさのバランスも考えた結果、

1班

俺、ネク、アズト、ミシルガルディア（この期に及んでないとと思う  
が万が一の裏切りに備えて俺と一緒にした）

2班

リシナ、アリナ、ユリナ、ガルディアの仲間二人

3班

レンジ、リクオ、ガルディアの仲間三人

4班

ガルディアの仲間五人（一人は副団長とか言つていた）

以上の五人ずつ4つの班に分けて、東西南北へそれぞれ進むことにな  
した。

再会は船があるここで3日後の予定。もしそれまでにもどれそうに  
ない場合は合図を送る（火薬を利用した技術で狼煙という物をガル  
ディアからもらつた）ことにした。

さあ、行くか！

鬼が出るか神獣が出るか？楽しみでしようがない。

探索者20人は4方向へそれぞれ歩き出した。

## 第1-2話「守護者」

己の領土内に侵入したモノを感知したソレは、数百年の間何回か繰り返した作業を行うため、侵入したモノの方角へ移動を開始した。金属の身体を持つソレは錆びることなく、壊れることなく、今から己のやることに疑問を持つこともなく、いつものよつて口ひごえられた唯一無二の義務を果たそうとするだけだった。

己の義務、すなわち侵入者の排除を・・・

「そ、殺風景といつか何という、か・・・行けども行けどもおかしか、み見えませんねえ。はあ、はあ。ほんとにこの島には何か住んでいるので、しょうか、ふう、ふう。歩くのが、け、結構きつく、なつて、きましたよ。ふう、ふう」

アズトが息を切れ切れにさせながら横から言つてきた。出発してから小一時間ぐらいは経つたとは思うが、まだ大して進んではないぞ。でこぼこした岩山を登つたり降りたりしてるのでそんなに息切れしなくとも。

ただ、歩くだけで暇なんで

「そうだな、ここまで進んで分かつことと言えば、このやたらと続く岩山には生き物が居ないっていうことと、アズトが意外におっさんだつたつてことぐらいか・・・」

真面目な顔で軽く言つてみると、

「わ、私の体力がないのはべ、別に歳のせいじゃありません！いや、商売で、それなりに色んな僻地へ、行つたりするんでむしろ体力はあるほうです！そ、そもそも私はまだ29です！」

と、やたらと興奮していた。おっさんは禁句なのか。

「まあまあ、落ち着いてアズトさん。どうせこいつのことだから暇潰しにおちよくなつただけだと思つわよ。だから、あんまり気にせずに。

」

とネクがとりなすように言つた。付き合い長いだけあって俺のことがよく分かつてゐるなこいつ。

「むう。それはそれで何か納得が行きませんが・・・」

アズトが唸りぶつぶつ言つていた。

ちなみにガルティアとミシルは何も喋ららず黙々と歩いている。

「ま、あたしはこいつの言動に慣れてるからね。多少何か言われても気にしないけど。」

ネクが何故か自慢げにそう言つとアズトが、

「そうですか。やはり夫婦ともなると性格も何を考えてるかもよく分かるものなのですね。」

うんうんと何か1人で納得していた。ん？聞き間違いか？今、

「べ、べ、別にこ、こいつとあたしはふ、夫婦なんかじゃないわよ

つ！か、勘違いしないでよねっ！ねつ？トウヤツ？

そう、やつぱり夫婦って言つたよな。そんなバカな。それにしてもネクもそんなに顔を真つ赤にして怒らなくてもいいんじゃないかな。よつほど夫婦と言われたのが気に入らなかつたんだろうな。よし、

「そうだぞ、アズト。どう見たら俺達が夫婦に見えるんだ。俺達はただの幼馴染みだ。」

フォローしどかないとな。

「・・・そ、アズトさん。あたし達はただの幼馴染みよ・・・」

何故か頃垂れながらネクがそう言つた。

と、ガルディアが

「一つ氣になつたんだが、君たちは見た目に反して結構年齢が上なのか？」

聞いてきたので、俺が、

「見た目に反してつていうのは氣になるが・・・俺は15歳だ。ネクも。」

言つとガルディアが、驚いたように

「そ、そ、うか。やはりそのぐらいか。アズト氏が夫婦と勘違いするからてつきり20歳前後ぐらいかと。」

「ん、といふことはレビュアスではそのあたりの年齢にならないと

結婚できないのか?「

聞いてみると、

「ああ、正確には18歳からだがな。」

「なるほどな。ちなみに火の大陸では15歳からだ。そのへんの決まり」ととか、文化の違いも興味深いな。」

そうやって俺達は互いの文化の色々な違いなど様々な話をしながら岩山を進んでいった。

そつこいつするうちに漸く岩山の切れ目が見え、岩山を降りた先にはやたらと広い平原に辿り着いた。平原の向こいつ側に森らしきものが見える。

「やつと皆曰がおわらましたね!」

アズトが本当に嬉しそうに言つた。

「確かにやたら長かつたな。まるで・・・」

ガルディアが何やら考えこんでいる。気になつた俺は「ん?どうしたんだ、ガルディア?何か気になることでも?」

「いやな、岩山がいくらなんでも長すぎたと思つてな。まるで、外部からの侵入を防ぐよしな・・・要塞みたいな島の構造だと思つてな。」

「ああ、なるほどな。言われてみれば確かに。あの岩山なら馬車は確実に使えないし、外から狙撃つていうのも難しそうだな。」

俺が同意すると、アズトが  
「いよいよこの島に何か住んでいる可能性が少なくなつてきました  
ね・・・この島から他の場所に移動をするのに手間がかかりすぎま  
すからね。」

若干落ち込んだように言つ。

「まあ、まだあの森の奥とかに誰かいるかもしれないから諦めるに  
は早いんじやないか？光つたと思われる場所も見つかってないしな。  
」

少し可哀想になつて俺は言つた。アズトにしたらこのまま何も見つ  
からずには手ぶらで帰つたら大損害だろつからな。まあ、まだ日にち  
もあるし、  
とガルディアが

「おそらく大丈夫だとは思うが。祈祷師が指示した場所の信憑性  
は高い。確実にこの島に何かはある。生き物もいないうような場所を  
指示示すというのは考えられない。

今まで一切生き物を見ていないというのは確かに気になるが・・・」

「まあ、諦めるのは島内を隈無く探して何も無いと分かつてからで  
いいんじゃないか？今はとにかく先にすすむ」

そこまで言つたところで、俺は何かとても嫌な雰囲気を感じた。の  
で平原の半ばあたりを見てみると、いつの間にか見たこともない、  
銀色の物体が立っていた。それを見た瞬間ざわつ、と背筋が粟立つ  
ような感覚を覚えたので、

「みんなっ！伏せろっ！  
俺は他のやつへ叫んだ。

（）

ソレは森の中から平原を挟んだ向こう側の様子を見ていた。岩山に何者かが入った途端感知可能な己のセンサーが感知したとおり、岩山を越えて侵入者が平原まで辿り着いていた。

数は五体。平原の距離は凡そ700m程度。己の侵入者排除機能の射程距離は500mはある。

常ならば平原を半ばまで進んで待ち構えておき侵入者が岩山を降りると同時に排除機能を使用する。だが今回は侵入者を感知してからここに辿り着くまでがいつもより遅いのか侵入者を視認したときは己はまだ森の中だった。

何かいつもと違う点があるか？一瞬そういう考えが己の回路にうかんだが、すぐにそれを打ち消し、自動で目標つまり侵入者が射程内にはいるように音もたてずに移動を開始した。

そして平原も半ばまで進んだソレは侵入者へ向けて排除機能を作動させた。

（）

俺の焦った声に何かを感じ取ったのか皆が一斉にその場に伏せた。と同時にその銀色の物体の銅あたりから青く光り輝くものが照射された。先ほどまで俺たちが立っていた高さの場所に。

伏せたおかげでその青い光は誰にも当たらなかつたが、俺たちの後ろに立つ岩山に当たり岩の表面が抉れていた。

「い、今のはいつたい？」

「伏せなかつたら明らかに致命傷を負つっていたぞ。」

アズトとガルディアが伏せながら話しているのを尻目に俺は銀色の物体へ向かつて駆け出した。

距離がだいたい300～400mか。10秒ちょっとはかかる。

ソレは最初、己の認識機能に異常があるのかと思考した。かつて己の侵入者排除機能「イレイザー」を使用して斃れなかつた侵入者などただの1体も存在しなかつた。だが今、イレイザーを使用する直前に侵入者の5体はまるでイレイザーが当たる位置を知つていたかのように地に伏せかわした。それどころかその内の1体は凄まじい速さで此方へ近づいてくる。

ソレは再度レイサーを放つた。その近づいてくる一休へ向けて。

丸太を2つ立てて、縦に繋ぎ（太さは丸太よりは一回り太いぐらい）それより細い棒を人でいうところの手や足の位置に生やしたような感じの形の（長さは丸太1mずつぐらいい手足の位置にある棒は70～80？）銀色の物体が此方へ向けて先ほどのように青い光を照射しようとしている。

一気に走つて距離は凡そ10mぐらいまで詰めたが走りながらじや回避が間に合ひそうにならぬ、これは。

思つた瞬間、光が再度照射された。

煙が巻き上がり視認が不可能だが、この至近距離からのイレイザーなら確実に捉えた、と判断しさらに他の4体を排除するためにソレ

は岩山のほうへ進んだ。

否、進もうとした。

だが、

近づいてきていた1体が先ほどと変わらぬ姿でそこに立っていた。そして己がその姿を認めた瞬間、その1体が一気に己の頭上まで跳んで近づくと同時にそれまで腰に差していた金属を振り下ろした。その瞬間ソレは思考する機能を失った。

（）

オーラの使い方には大別して2つある。

1つは自らの体内から練り上げたオーラを使い、身体の筋肉や神経、手持ちの武器防具を強化し攻撃力や防御力、速さ等、威力を底上げする方法（体氣術と呼ばれている）

もう1つは、自らの体内から練り上げたオーラと大気中に浮遊している精氣（プラーナと言われるもの）を混ぜ合わせ、自らのオーラのみよりも強大な威力を發揮できる方法がある（大氣術と呼ばれている）

（）

俺は銀色の光の照射が此方へ当たる直前に大気中の精氣と自らのオーラを混ぜ合わせた大氣術を使い身体の防御力を大幅に上げたため、光の直撃を受けても特にダメージはなかった。さすがに自分のオーラだけで受けてたら立ってられなかつたかもな。それにしても・・・

「それは一体何なんでしょうね？見たところ大きな金属の塊にしか見えませんが……」

と、いきなり攻撃してきた銀色を倒した後、安全を確認して後ろに居た他のやつを呼び寄せ、考え方をしながら来るのを待っていた俺に追いついたアズトが尋ねてきた。

「ああ。俺も遠目にには変わった生き物が居るぐらいにしか思ってなかつたが、近くで見ると……何だこれ？真つ二つにしたが、血らしきもの出でないし。ガルディア、これが何なのか分からぬいか？」

俺は銀色を指しながら、同じように合流してきたガルディアに尋ねてみた。

「いや、レビューアスでもこのよつなものは見たことがない。ただ……」

「ただ、なんだ？」

「金属が動く、といつのは見たことがある。」

「ふーん。これとは形が違うのか？」

「そうだ。まだ実用化の目処は立っていないが、自走式貨物車と呼ばれるものが現在研究されている」

「自走式貨物車？それを木じゃなくて金属で作るのか？」

「そうだ。木よりも頑丈で腐りにくいからな。ただ自走式ならではの馬力がある大きな動力装置を使う必要上、どうしても本体を巨大にしなくては作れない。そんな巨大な貨物車を何処にどうやって移動させるかというのが現在の課題だ。それにそこまで詳しいことは分からぬが、仮に作れたとしても前後に移動する、といふ機構を組み込むぐらいが限界だろうと思つ。だから・・・」

「仮にこれが金属だとしたら、どうこいつ仕組みでこの大きさで自走し、しかも攻撃までできるかといふのはまったく分からぬな・・・」

「やうじいじいじだ。それにしても、トウヤ。」

探索者というのはやはり好奇心旺盛なのか、俺が真つ二つにした箇所を色々な角度から眺めたり触つたりしながら話していたガルディアが不意に俺を振り返つて言つた。

「なんだ。」

「やはりトウヤの強さはめちゃくちゃだな。この金属は鉄ではないにじろそれに近い固さだぞ。それをこんな風に剣で綺麗に真つ二つにするとは・・・」

「やうか？そのぐらいの固さならネクも出来るぞ？なあ、ネク？」

俺の横にいつの間にか立っていたネクへ話を振つてみると、

「えつ？あ、ああ、うん。鉄ぐらじの固さだったら斬れるわよ。」

「だよな。通常でも鉄ぐらいは斬れるよな。」

この場合の通常とはオーラやプランを使わない状態のことと指す。すると、ガルディアが

「なんというか・・・火の大陸ではそれぐらいの剣術の腕は当たり前なのか?レビュースでいうと、騎士並みの実力だぞ。いや、騎士でも何人が斬鉄ができるか・・・」

鉄を斬ることを斬鉄っていうのか。そのままだな。  
一応補足しどくか。

「いや、火の大陸全部じゃないと思うぞ。俺たちの出身の村では剣術が盛んだつたつてだけだ。」

「いや、それにしてもその若さで・・・凄まじい腕だな・・・」

何かガルディアが落ち込んでいる。まあ実際俺の腕を田の当たりにしたからな。

「むつ?これは?」

と、ガルディアよりも念入りに銀色を調べていたアズトが何かを発見したような声を出した。

「どうした、アズト?何か見つかったのか?」

聞いてみると、

「ええ。全身銀色の金属なのにここのだけ色が違つてよく見ていたんですよ。」

と言つて丸太の繋ぎめあたり、人でいうと丁度臍のあたりになるのか。

よく見てみると、そこには

「宝石？」

赤く輝く真つ二つになつた宝石らしきものが埋め込まれていた。

？？？

「守護者がやられただとつ！」

「いえ、やられたかどうかは分かりません。正確には反応が途絶えたのです。」「反応？精石の反応か？」「はい。通常ならば精石の反応が途絶えるのは考えられない事態です。私もこの250年間の話を色々と知つておりますがそのようなことは初めて聞きました。」

「そうだな。確かに俺も初めて聞いた、反応が途絶えるなど。」

「ですから考えられるのは、精石自体の効力が長年の酷使により切れたか、侵入者がこの島に入り守護者を倒し精石を壊した、という2つの可能性です。」

「前者は考えづらいな。口伝に因れば精石はブランーナを取り込み半永久的に使用可能らしいからな。だとすると、やはり・・・」

「侵入者ということになります。」

「しかしつ！あの守護者だぞ。そう簡単にやられるか？」

「分かりません。ただ、もし守護者すら倒せるような侵入者がすでに大平原あたりまで迫つてゐるとなると・・・」

「ここまで来るのは、あと1日つてところか。あいつらはどうした？」

「あの2人はいつものように島内を散策してますよ。」

「またか・・・こつ帰つてくるかは、分からぬいよな・・・？」

「見当もつきません」

「はあ――――」

「溜め息は女性が逃げますよ。」

「そこは女性が、じやなくせめて幸せが、にする配慮をしりつー。」

「それはともかくこの守りは手薄ですね」

「ああ。侵入者の目的は分からんが、守りを固めんとな・・・」

「目的はほほ間違いなくあれだと思ひますが。」

「それは言つくな！もしかすると違うかも知れないだらうが」

「・・・」

「分かつた。あれが目的だと認めよう。だからその田をやめりつー。  
「あれだけは何としてでも護らなくてはなりませんからね。下らな  
い現実逃避はやめてください。」

「お前は本当に厳しいな。ああ、分かつてゐる。あれだけは何として  
でも護るだ。」

「勿論私も護ります」

そこまで話すと2人は自分達が今居る神殿、その中央の祭壇で体長  
50?程度の光輝く獣がすやすや眠つているのを眺めた。

（）

## 第1-3話～柱～（前書き）

最近はどうも時間が取れずに投稿が遅くなりがちです。

クロカゲ家は元々護衛を生業としている。

アリナとユリナの父親は2人の娘が物心ついた時から同じように護衛の為の術を教えているが、双子とは言え生来持つて生まれたものが違うのか、成長するに従いその2人の性格と共に能力、性質の違いがはつきりと表れ出した。例えばアリナの場合は運動神経が良く格闘も出来るがユリナはあまり良くなくあまり戦いには向いていない。アリナにはオーラの流れがよく見えないが、ユリナは自分の人よりも良く見える。などとわかりやすいところで例が挙げられる。

鍛え方としては、父親は初めの頃こそ同じように教えてはいたもののお互いが出で結果に余りにも偏りがあるため、やり方を変えてそれぞれの長所を伸ばす方針にした。その長所つまり本人達にとっては得意なことのみをやった。その結果、12歳になる頃には、アリナは格闘や何種類かの武器の使い方を、ユリナはオーラを利用するための基本的な下地が出来ていた。とは言えまだまだ、発展途上にある2人をさらに上達させるため、甘えを無くすため、あわよくばお互に足りないものを身に付けさせるため、知り合いの家へ2人とも預けることにした。

預けるには理由があつて、まずそこが心安い知り合いの家だということ、そしてその知り合いは退魔術という戦いや魔物退治に大きな対抗手段を持つて生業としているからである。

リシナ・トゴウが預けられた2人の少女を現役退魔師である父親から面倒を見るように言いつけられて、自らの身に付けている術を教えたのにはそういう経緯があった。

「一しょう。ししょう。」

初めて二人の姉妹が家に弟子入りしに来た時のこと振り返りながら歩いていると、後ろから声をかけられた。

「なにかしら？」

リシナはアリナのほうへ向き直り尋ねた。

「うん。さつきからユリナが結構きつそうで・・・出発してからもうかれこれ2時間は歩きっぱなしじゃない?もつもろそろ・・・」

アリナが遠慮がちにユリナのほうを見ながら言つ。

「そういうばあ、ごめんなさい気づかなくて。なら、そろそろ休憩にしましようか?お一方もそれでよろしううか?」

アリナと少し顔色の悪いユリナへ声をかけ、さらに後ろから歩いてくるレビューアス団の男性一人にも尋ねてみた。

「我々は、貴女のご判断にお任せします」

と一人が言つので、休憩を取ることにした。

「それにしても、何もない場所だね。ほんとにこの島に何かあるのかな?」

アリナが周りを見渡しながら言つた。

「そうね。上陸する前に見た感じだと島の両端が見えないぐらい広かつたから、相当な広さだと思うわ。4班に手分けして探すというのは正しい判断でしょう。アリナちゃんが言うように何もないかもしれないわね。それに3日後には入口まで戻らないといけないから、あまり奥深くまでも進めないわね。」

私がそう言つと、

「・・・でも、生き物の気配もない」

多少体力が戻ったのかユリナが言つた。

「そうね。それは私も思ったわ。いくらこんな道でも虫とか小動物が居てもおかしくはないわよね・・・」

私は、歩いてきた荒れ果てた道を見ながらそう言つた。無人というのはともかく生き物一体いないというのは不自然、というより変だ。

まるで、

「・・・まるで結界が張つてあるみたい」

ユリナがそう言つた。やつぱりそつ思つわよね。そもそもトゴウ家の退魔術というのは、魔物を退治するよりもどちらかといえば不可視の物理結界を張り魔物を押しとどめたり封印したりするほうに本領を發揮する。なので、結界術や封印術の修行を重点的にすることになるため、自分でできるようになるのはもちろんのこと、他者が行つた術も違和感を感じたりと結界が張つてあるかどうかが感覚的に分かるようになる。ただ、術者が己以外を排除する種類の結界を張つているなら、その場所は違和感どころではなく、前に進もうと思つても進めない程の圧力がある。ここまで何の違和感もなしに進めたから結界が張つてあるといつのは考え難いけど、もしかしたら・

「・・・私たちが島に入つてから結界を張つたのかも・・・出られなくするため・・・」

「私もそれは考えたわ。でもそれだと、どうやって私たちが島に入つた時が分かつたのかしら」

私が、ユリナの考えに疑問を持つと、

「あのう、我々の砲撃音のせいではないでしょうか・・・  
と、現在私たちの班員である男性の1人がおずおずと言いました。  
ああ、そういうば・・・

「そうだよねー。おじさんたちが有無を言わさず攻撃してきたもんね」

若干からかいの口調でアリナが答えた。

「ええまあ、あれはなんと言いますか・・・

申し訳なさそうに男性が答える。

「そうですね。あの時結構大きな音がしましたね。いくらこの島が広いと言つても音が響いたかもしませんね。ただ、あれはもう気になさらずとも良いのではないですか?結果的に皆無傷でしたし、やむを得ない事情がおありになつたでしようから。」

私が悪気なく微笑みながらそう言つと、

「はあ、そう言つてもらえると助かります。」

と男性が言つた。

「結局、おじさんたちのほうが被害が大きかつたしねー。」

言わなくてもいいことをアリナが言つた。

「ええ、貴女とそしてあの少年に完膚無きまでにやられました・・・

」

男性が私を見ながら言つた。いや、あの少年はともかく私はただ砲弾を防いだだけなのですが・・・

「ま、まあ終わったことは気にせずにつ

アリナが慌てたように言つた。

「・・・でもあの子強かつた・・・」

ユリナが思いだしたように言つた。

「確かにそうだよねー。あれで私たちと一つしか違わないっていうんだから・・・」

若干へこんだようにアリナが言つ。そこで私は、

「アリナちゃん、ユリナちゃん。人は人、自分は自分です。あの少年は確かに強いですが、貴女たちは気にせず自分の腕を磨いてください。もちろん私もまだまだ修行不足の身ですが。」

とりなすように一人へ言つた。

「そうか、そうだよね師匠。修行頑張る!」

「・・・私も頑張る・・・」

と、男性が

「あれで修行不足と言われたら・・・」

「戦いが本業でないとはいえ我々は・・・」

二人して頃垂れていた。

「まあねー。でもそれはしようがないんじゃないかな。師匠の強さは化け物じみてるからね。だからこんなに美人なのに普通の男が怖がつて恋人の一人もいないんだよねー。」

と、アリナが言つてくれやがつたので私は

「アリナちゃん？あとでお話があるのでぞいいかしら？」

アリナへ微笑みながら言つた。

「ヒイツ。『』、『』、ごめんなさい師匠。」

何故かアリナが私の方を見て怯えていた。

「まあ、ユリナちゃんも元気になつたことだしそろそろ休憩を終えましようか？」

「「「「ハイツ！」」」

私がそう言つと全員が一斉に返事をした。何故？

立ち上がり、また荒れ果てた道を進もうとしたその時、突風が吹いた。

（）

リシナ達から約1？離れた場所に1人の男が立つており、その男は目を細めながらリシナ達のほうを見ていた。

「大きな音がするんでわざわざここまで様子を見にきてみれば、1、2、・・・5人か。久しぶりの客だ。精々もてなしてやるとするか。

』

そう言つて男はリシナ達のほうへ向けて飛ぶような凄まじい早さで飛んだ。

（）

一瞬巻き起こつた突風でよろけて目を瞑つていた私が目を開けたらいきなり目の前に見知らぬ男が立つていた。

赤い髪の体が大きく屈強そうなその男は私たち全員を見ると、

「よつこそ火喰い島へ、侵入者よ。歓迎するが。」

と言つた。この口ぶりだと「この住民でしょつね。

ただ、そんなことよりも・・・「ん?どうした侵入者どもよ。珍しいものを見るような顔をして?」

その赤い髪の男はそう言つた。それはそうだろう。つい先ほどまでも気配すら感じなかつたし、その男の額には・・・

「ああ、ひょっとしてこの角が珍しいのか?」

と、男は自らの額にある角らしきものを指してそう言つた。

「亜人・・・?」

アリナがそう言つと、

「はつ!人間つてのはどいつもこいつも同じ反応をするな。確かに俺たちは貴様らからすれば亜人と呼ばれる存在だろつよ。いや、何十年か前の侵入者は鬼とか呼んでいたつけなあ。」

男は私たちを蔑むように見ながらそう言つた。

「何十年か前?といつことはやはり以前にも誰かこの島、火喰い島と言つたかしら、に來ていたと言つわけね・・・」

私がそつと、男は

「ああ、来てたぜ。もつとも、骨すら残つちゃいないがな。」

と言つた。

その言葉に全員が警戒し、身構えた。さうして

「まあ、その時の奴等の目的が亜人を捕まえて売り飛ばすとかいうふざけたものだったからな。何の躊躇いもなく消してやつた。どうせ貴様らもそんなところだらう?」

男が言つと、レビュアスの男性の1人が、

「違つて!我々の目的は神獣だつて!この島に神獣の居る可能性が高いのでやつて来ただけだつ!」

慌てたよつとそつ言つた。すると、

「なんだとつ?成程な。どうやつてアレの存在を嗅ぎ付けたかは知らんが尚更生かして帰すわけにはいかなくなつたな。」

そつ言つと、男は両手を前に突き出した。

「アレ?といふことは、この島には神獣が居るん

レビュアスの男性がそこまで言つたといひで、數十秒後に吹き飛んだ。

「えつ・・・?」

それを見た全員が驚きで固まつてゐる。

「ふん、脆弱だな。」

男がそう言つと、アリナが  
「な、何今い？」

と言つた。男は、合点したよつて

「ああ。 そういうやうだな。 人間たちの中では廃れたらしいが今のが魔法つてやつだ。 僕は親切だからな。 自分がどういう風に死ぬのかぐらいは教えといてやるよ」

私たちへ説明した。今、有無を言わさず吹っ飛ばしたけど・・・  
「魔法？ 廃れた？ その言い方だと人間でも以前は魔法を使ってたみたいね？」

私がそう言ひと、

「ああ、 そうだ。 今もその名残があるじゃないか。 人間の村に張つてある結界とかな。」

「結界？ あれを魔法といつの？ 昔に妖術師と呼ばれる人たちが使つた術を？」

「呼び方は知らん。 だが250年ぐらい前に来た奴等は確かに強力な魔法を使つていたぞ。」

「250年前？ その時に誰か来ていたの？ それに貴方はいつたい何歳なの？」

「俺はまだ精々300歳ぐらいだが。 誰が来ていたかは貴様らのほうがよく知つてるんじゃないか？」

「つー・スサノオ。といづことは・・・」

「まあ、そんなことはどうでもいい。貴様らは消すだけだからな。」

「待つて、まだ聞きたいことが。」

「お喋りはここまでだ。どうせ貴様らはここで消える。あと、最後に教えてやろう。俺の名はロナン・サタク。火喰い島かみつきじま4柱ちゆうが1人口ナン・サタクだ。この名を頭に刻み込んで・・・死ねつ！」

男が再び両手を前に突き出した。

火喰い島（大陸の者や人間には鬼ヶ島と呼ばれているらしい）は、その全長が数十？ありその道の険しさと合わせて島内を全て歩こうと思えば数日はかかる。並みの人間や動物ならば・・・自分は生まれて物心ついた時からずつとこの島に居り、他の場所がどのような様子なのか知らないということもあるが、広いこの島から出る必要も外との交流も必要もないと考えている。ただ此方がそう思つても外からは数十年に何回かは侵入者がやつてくる主に人間だ。どういう理由でこの島へ來るのか、例えばこの島を自らの領地にしたいのか、亜人と呼ばれる我々を捕まえたいのかは不明だが友好的な者は1人として居ない。それに外から來る人間はどいつもこいつも皆弱い。唯一の例外を除いてはだが。

そんな今までの経験から、ロナン・サタクは侵入者を見つけたとき、いつもするようにすぐさま排除しようと決めた。暇潰しに多少は話してみたが、やはり侵入者の目的が録なものではないということもあり特に躊躇いもなかつた。あいつらには後で結果の報告だけしつけばいいと、島の中央部に居る者たちを思い浮かべて、自らの風魔法を放つて1人を吹き飛ばした。死んだかどうか分からぬがおそらく致命傷だらう。続いて残つた奴等へもまとめて同じ魔法を放つた。

～～～目の前の口ナンと名乗った男が両手を前にかざしたとき、私は無意識に物理障壁を展開していた。見えない攻撃・・・先ほど男

性が飛ばされたことを考えればおそらく物理的な圧力があったのだとは推察できたので、選択としては間違いないと思う。

「オオオオー

風が吹くような音が耳に響く。

魔法？と言つていたが、いつたい？この障壁にかかる圧力がその魔法というものなのか。すると口ナンが私と私の物理障壁を見ながら

「ほう。疾風<sup>はやて</sup>を防ぐとはな・・・貴様も魔法使いか？」

「疾風<sup>はやて</sup>？それが魔法の名前ということなの？魔法を使つた覚えはないのだけれど」

私はその物理的な圧力を障壁で抑えながらそう言つた。が、

「そうだ。だがつ！」

と言つと口ナンの両腕がさらに力を入れたのか膨れ上がり圧力が明らかに強くなつた。

「くっ、押しきられるつー！」

すると横からユリナが、

「・・・手伝つ」

と、同じ物理障壁を開させ此方の方が優勢になる。

「もう1人だとつ？ばかな？貴様らは何者だ？」

口ナンが驚いて言つ。

「何者と言われてもね。ただ退魔術を使う退魔師ってだけよ

今度はアリナがそう言いながら』を構えた。

「退魔師だと？聞いたこともないぞそんな奴等は。だが俺の魔法を防いでいるのは紛れもない事実。魔法の一種では、グhaar！」

「へへ。どう？退魔術式弓術の威力は」

アリナの障壁の此方側から放った矢がロナンの右太もも当たりに突き刺さっている。だけど・・・

実際、退魔術式弓術の破壊力は岩も碎くぐらいある。それは、プラーナと呼ばれる大気中の精氣を弓矢に取り入れ弓矢自体の強化、矢の速度を上げるのに利用される。アリナは未だ結界を張つたり障壁を開発させることは出来ないがその代わり武器等の身の回りの物にプラーナを纏わせたり格闘の際に自らの身体の強化をすることができる。それにしても2人分の結界を貫いた上にさらにあの風の中を通すなんて、そんなに威力があつたのかしら。

「さ、3人だと。き、貴様ら全員魔法使いかっ！全員？侵入者は五匹居たはずだつ！」

先ほどまでの余裕が消えたロナンが焦つて周りを見回すと、

パン

音がした。

「グアアツ！」

ロナンが急に右腕を押されて痛がりだした。

見るといつの間にかレヴィアスの男性がロナンの右側「ごくらい」のところにたつており銃を構えていた。

「グッ。何だこれは。貴様がやつたのか?今何をした?」

ロナンが腕を押されて男性のほうを睨みながらそう言った。  
男性は、

「どうやら匪人とはいえ銃は通じるようだな。今度は決めさせてもう一つ!」

そう言って再度引き金を引いた。だが・・・

「ハアツ!」

銃弾はロナンの手前で一瞬止まり地面に落ちた。

「なつ!くそつ!」

それを見て焦った男性は再度引き金を引いたがまたしてもロナンに当たらず地面に落ちた。

「俺に鎧風がいふうを使わせるとほな・・・だがここまでつ?グアツ!?」

再度、アリナが矢を放ちロナンの左肩辺りを掠めた。  
「あれ?外したつ?」

アリナがそう言つとロナンが、

「鎧風がいふうを貫くだとつ？ いつたい何なんだ貴様らつ！？」

何故か怯えたように私たちのほうを見た。

「だから、あのオジサンはともかく私たちは退魔師って言つてゐるじゃない」

アリナが若干呆れたように言つ。

「くつ。退魔師かなんだか知らんが此方の分が悪い。追い風つ！」

と、ロナンが叫ぶと、どこからともなく突風が吹いた。一瞬目が開けられず、

と言つたので、田を開けてみると、そこには

「あいつは何処に？」

男性が言つよつにロナンの姿がどこにも無かつた。

成る程。私は念点したよつに、男性へ

「おそらくですが、私たちに倒されそうになつたため魔法とやらを  
使つてこの場所から逃げたのでしょうか。」

「といつことは我々はあの亜人を退けたのですねっ！」

助かつたと言いながら男性は安堵していた。そして

「そうだつーあいつを」

と言ひながら飛ばされた男性のほうへ駆け寄つていった。私はそれを見ながら、

「大丈夫かしら？」

と呟き、

「師匠が居るから何とかなるでしょ」

「・・・師匠が居るから大丈夫」

アリナとユリナがそんなことを言つた。まあ確かに退魔術には怪我をしたときの為に治癒をする技もあるのだからそのとおりなんだけど・・・それにしても、

「アリナちゃん？」

「ん? 何、 師匠?」

「貴女はいつあんなに腕を上げたの? 矢で障壁を突破する破壊力なんて以前はなかつたでしょう?」

「うーん、私もまさかあれほど威力があるとは思つてなかつたんだよね。ただ、矢にプラーナを溜めるとき何時もより遙かに精気が集まつていいくのは感じたよ?」

「そう。何となく分かつたような気がするわ。」

そう言われてみれば私もユリナちゃんも何時もより大分障壁の展開

が早かつた。だとすればおそらく、

「えつ？ どういうこと？」

「多分だけどね。この島には大陸よりも遙かに濃いプラーナが大気に漂っているの。だから私たちみたいなプランナーを利用する退魔師は何時もより強大な力を発揮できるというわけ」

そう言うと、2人は納得したような顔をしていた。  
と、もう1人の様子を見に行つた男性が、

「大丈夫ですっ！」 といつは所々怪我をしてますが気絶しているだけ  
ですっ！」

向こうのほうから此方へ大声で叫んだ。

「よかつた。じゃあ行きましょっか。」

私は2人へ促すと男性が居るほうへ歩いていった。

「――「くそつ！ 人間風情がつ！」

ロナンは風の魔法を使って飛んで移動しながら悪態をついていた、  
時速約200kmぐらいで。

今まで侵入者、それも人間にここまで手傷を負わされたことなど  
なかつたから急いであの場所から離れた。だが・・・

「いつたい退魔師とはなんだつ？ 何故人間が魔法じみたものを使え  
る？」

自問しても、知らないことが分かるはずもない。そもそも脆弱で戦う術もないものが人間だ。我々のように亜人と蔑まれながらも、人間ではもちえない能力もないのに、あそこまで強いのが信じられない。

「どちらにせよ一度戻つて報告する必要があるな・・・」

そう考へるとロナンは憂鬱になつた。傷を治す必要もあり侵入者の目的も話さねばなるまいが・・・この傷を見てあいづらは小言を言うだろうな。独断で行動するなどか油断したバカ者とか。ただ、あいつらは間違いなく強い。下手をすればあいつよりも・・・今もおそらく自分のように島の何処かに独断で彷徨つている仲間の顔を思い浮かべ、首を振つた。まさか、あいつは我々の種族の中でも飛び抜け魔力が高い。それはないか。

そこまで考えたところで島の中央部が見えてきた。

（――）

その男は魔力を感じる能力を持つていた。だから自分の仲間の1人が自分の居るここから島の反対側辺りで、おそらく侵入者であろう者たちと交戦していたのは分かつていた。だが、

「・・・おかしいな。ロナンのやつは何故帰つたんだ？」

思わず呟いていた。何故なら侵入者らしき3つの魔力がそのままその場所に残つているのに、好戦的な仲間であるロナンがそれを残して帰るなど何時もなら考えられないからだ。

「逃げ帰つたか？」

多分それしか考えられない。そんなにあの侵入者は強いのか。それに・・・

「もう一つのほうも気になるな」

先ほどロナンが居たのとは別の場所で一瞬だが凄まじい魔力を感じた気がしたのだが。まあ、あの辺りは守護者の範囲内なので、仮に侵入者が居ても守護者に排除されたとは思うが・・・男はそこまで考へると、前方に気配を感じた。

／＼＼

「レンジさん。漸くそれっぽいものがありましたよっ！」

リクオが前方を見て、弾んだような声を出したので見てみると、そこには木で出来た巨大な門があつた。

「ほお。でかいな。」

「いや、感想がそれだけですか？レンジさん。あれは明らかに建造物ですよ。つまりこの島には何者かが確實に居るということでしょう！」

リクオがやたら興奮していた。まあ、島の入り口から四時間ぐらい歩きっぱなしだったからな。何もなさすぎて心がおれそ娘娘だらう。分からんではないが、

「まあ、落ち着けリクオ。まだ住民が見つかったわけでもないだろう、なあ？」

おれは後ろについて来ているレビュアスの3人へ言った。だが、

「おお」

「これは・・・」

「やはり神獣はこの島に・・・」

3人はリクオと同じように前方の門を見てそれぞれ感嘆の声を漏らしていた。

俺は苦笑して、

「お前らなあ。仮にも探索団だろ? じつは大して珍しくもないのじゃないか?」

と言つと、一人が

「それは言いますがレンジ殿。我々はこういった未知なるものを発見するところ行為のためにこの仕事をしているのですよ。それに、門があるということはこの先にこの島の住民の集落がある筈です。ここまでくれば一気に神獣に近づいたと言つても過言ではありますん。」

リクオと同じく興奮した様子で言つた。

ちなみに俺たちは歩きながら話しているので先ほどは遠くに見えた門まであと数mといつとこりまできていた。

「まあ、そりだけどな。でも結局神獣が見つかなければ、それも

その時その巨大な門の陰から1人の男がのそりと出でてきた。そして、

「ようこそ、侵入者の諸君」

と言つた。その姿を見て

「な、何者だつ！」

トリクオが言つ。若干怯えたような声なのはその男の姿によるものだろう。なにせその男は・・・

「ほう。中々度胸があるな、人間よ。以前見た侵入者は私の姿を見ただけで怯えて声もだせなかつたがな」

見た目は、顔こそ赤茶けた髪を立てた火の大陸の者とそこまで違わない造詣だが、体は一mを越える大男で体は筋骨隆々なのに妙に落ち着いた口調で話しかけてくる。・・・何よりその額からは一本の角が生えている。その姿はまるで伝承にある、

「お、鬼かつ！？」

再度リクオがそう言つと

「ふふつ。面白いものだな。侵入者はいつも私の姿を見てそう言つ。それか亜人とな」

その男が微笑みながらそう言つた。

「違うのか？」

俺がそう言つと、

「まあ、間違つてはいない。我等は鬼族きやくと名乗つてゐる。呼び方は好きにすればいい。今後の付き合いをどうするかは今からの展開次第だな。」

「今からの展開次第？」  
「うう」と、リクオはうなづいた。

「簡単だ。諸君らのこの島に来た目的次第といづれどだよ。もし、我々と友好を結びに来た、といつなら歓迎しよう。だがそうでなかつた場合……」

「なんだ？」

言い淀んだので俺が聞くと、

「ここで全員死んでもうつくなるな」

と言つて此方を鋭い目で睨んできた。

その瞬間リクオをはじめ他の3人も驚愕で固まつた。おれは、

「死んでもうつ、とは穏やかじやないな」

「まあ、気にすることはない。例えば今までこの島にやつて來た侵入者の目的は大抵我等を捕まえるだとか、この島を自らの陣地にしようとか、あろかにも自分の弱さを理解していないよつなものばかりだったからな。諸君もそうならば、といふ話だ」

穏やかな口調で話しながらも此方を睨みプレッシャーをかけてくる。

「いや、俺達の目的は神獣探しだ。そいつたことじやない

と、俺が言つと男は僅かに目を見開き、

「神獣とはな……やはり人間の中にも魔力を感じ取れる者が居る

ようだな。だが、何故神獣を求める？あれは我等にとっては必要だが諸君ら人間にとつて不必要的チカラだと思うが」

「この男の口ぶりだと神獣が居るのは間違いないな。

「ああ確かに。俺は、というより火の大陸には別に必要ないな。ただの調査だ。だが、」

と後ろの3人を見ながら、

「この水の大陸の奴等にはどうしても必要らしい。というのも・・・」

「

俺は目の前にいる男に、ガルディアから聞いた水の大陸の状況を聞かせてやつた。さすがに驚いたようで、

「一晩で国が消滅しだと。そんなことが・・・もしや・・・」

「心当たりがあるのか？」

「あ、ああ。さすがにそんな真似ができる存在は限られている。だが目的が分からん。」

「知っているやつなのか？」

「知っていると言えば知っている。我々からすれば雲の上の存在だ。太古の昔から存在しているお方だ」

「太古の昔？御伽話みたいだな。」

「そうだな。私は精々500年ぐらいしか生きていないがそのお方は少なくとも数万年前から存在しているはずだ。」

「何者だ。そいつは？」

「我等鬼族を創造した、とされて居るお方だ。」

「創造？それはまるで神様みたいだな・・・」

「ある意味では間違つてはいない。そのお方は魔神と呼ばれている」

「魔神？」

「そうだ、そして創造主であると同時に我等の始祖だとも言われている」

「つまり、あんたら鬼族の産みの親でしかも『先祖つて』ことか・・・」

」

「ああ。だが伝え聞いた話に因ればあのお方は此処より遙か彼方の大陸に居られるはずだ。それにわざわざ国を潰す目的が」

目の前の男がそこまで言つたとき、生暖かい風が吹き周りが見えなくなつた。

そして、

「何のお話をしたのかしら？私にも聞かせて頂戴」

声のしたほうを見てみると銀色の杖を持ち、黒いローブを着た小柄な少女が立っていた。

第14話～風～（後書き）

「意見」「感想等あればお待ちしております。

（）

鬼族(きぞく)である自分は生まれつき魔力が高い。それに加えて他の仲間にはない能力、すなわち他者や自分の魔力の内包量を見ただけで分かる、離れていても誰の魔力かも分かるという能力を持つている。その能力を使い仲間同士で誰が一番高い魔力を持つているかを調べてみたら……私だつた。

勿論、戦いの優劣や立場の序列などは魔力のみで決まるわけではない、が鬼族の中でも最も魔力が高いということを私は誇りに思っている。また、知能も高いと自負している。現在、島の中央で神獣を見守っている4柱の中でも神官という立場としては私より上の奴にも私に指図することはできないため、私は島内で自由に行動している。侵入者の生殺与奪も私の気分次第だ。（もっとも口ナンの奴も自由に行動しているが）

今日は数十年ぶりに侵入者（おそらく人間のものであろう魔力）の気配を感じ、軽い期待を込めて島の正面入り口から比較的侵入しやすいと思われる、島のとある集落の門の陰で待っていた。すると予想どおりに5人の人間がやってきた。（ただ、島の数か所でも侵入者の魔力は感じるのでどこで待っていても同じ結果だつたとは考えられる）

私は別にわざわざ戦う必要のない相手と戦いたがる戦闘狂というわけではないので、久々に出会う人間の侵入者との会話を少し楽しんでいた。

だが、話をするうちにどうもおかしなところがいくつか出てきた。神獣を探しにやってきたと言わたときは人間に扱えるチカラでは

ないが、まあ長い年月が経てばそんなことを考へることもあるだろうなど軽く考へていたが、何故神獣を求めるかその目的そこに至るまでの経緯を聞いたとき私は今まで生きてきた中で一番驚いたのではないかと思う。

何故なら、私は確かに魔力が高いほうではあるし、それによつて様々な強力な魔法も使うことができる。しかし、聞いた話の中でウオルス王国という一つの小国をたつたの1晩で滅ぼすほどの強さはない。（やろうと思えばおそらく数カ月はかかるだろう）私にも無理なことなのでこの島に居る仲間の誰でも間違なく無理だとも断言できる。そんなことができる者はせいぜい、失われた魔法<sup>ロストマジック</sup>と呼ばれる闇属性の魔法が使える者ぐらいだ。ただ、その闇属性の魔法の使い手というのは私の知る限り1人しか居ない。いや、居なかつた。そのお方は現在、といつても300年ぐらい前に聞いた話だが遠くの場所でそう簡単には移動できない状態にあるはずだ。我々の中では創造主、始祖、など敬意を込めて呼ばれ、人間達の間では魔神と呼ばれて畏怖されているそのお方であるはずがない。だから、数日前にそのような強大なチカラを持つ存在がここからそう遠くない水の大陸に出現したことが俄かには信じられない。

私が侵入者の人間と話しながら考へていると、突然目の前に少女が現れた。

銀色に輝く杖と絶大な魔力を携えて・・・

（――）

「ねえ。私にも聞かせて頂戴、その面白そうな話。」

俺が目の前の鬼族の男と話しているとどこからともなく黒いロープを纏つた少女が現れ、此方に話しかけてきた。声や口調こそその見

た通り少女のようだが……

「おこ、お嬢ちゃん……あなたは何者だ……いつ、どうひつじ  
ここに来た」

見た目にはそぐわないその少女から放たれる圧倒的なプレッシャー  
に俺はその場に倒れそうになりながら尋ねた。

「へえ。貴方は結構強いのね。私を目の前にして氣絶すらしないな  
んで」

少女は微笑んでそう言った。というのも俺以外のリクオやレビュア  
スの奴らは少女が現れたときに氣絶していたからだ。

「ああ……あんたがとんでもなく強い化け物っていうのは何とな  
く分かるぜ……あんたも鬼族なのか？」

「化け物とはひどいわね。でもそうね。貴方の言つていることは間  
違ひじゃないわ。私は鬼族といえば鬼族になるわね。」

と言いながら、その少女は被つていたフードを脱いだ。そこには、  
火の大陸の者特有の黒髪黒眼ではなく金色の髪に碧い眼をした異常  
に肌の白い小さな顔があった。しかもその額には鬼族のような角が  
生えていた。

すると先ほどまで話していた鬼族の男が、怯えながらそれでも納得  
がいかないようだ。

「バカなっ！私は500年この島に住んでいるし、仲間の存在も全  
て把握しているが貴女のような方は見たこともないぞっ！」

と言つた。どうこうことだ？」の少女は鬼族ではないのか？  
すると少女が、

「ふふふ。それはそうよね。坊やはまだ500歳程度ですもんね。  
私がこの島に居たのは少なくとも2000年以上は前なのよ。もつ  
とも正確には今の100歳程度の私じゃなくてかつての私という意  
味だけれど」

このお嬢ちゃんはいつたい何を言つてゐる・・・？

確かに鬼族というのは人間に比べて遙かに長寿らしいが、自分で今  
100歳程度と言つたぞ。それなのに2000年以上前にこの島に  
居た？意味が全くわからんぞ。

俺が頭を悩ませていると鬼族の男が、

「なつ！？もしや貴女は・・・いや、そんな筈は・・・だが・・・」

何かを言おうとして躊躇つていた。  
すると少女が、

「貴方が何を考えているかは大体分かるわ。まあ、この姿ですもの  
ね。金髪に碧眼それに幼い。確かにすぐ信じられないのも無理はな  
いわ。でも貴方が今考えている通り、私が貴方達鬼族の創造主よ」

！？

「そうね、私は少なくとも数万歳のお婆ちゃんの筈ですものね。信  
じられないというのはよく分かるわ。でもね、闇の魔法には色々と  
禁断の術があるの。」

「あ、貴女は本当に創造主様なのですか？」

「そうよ。でも、もつと正確に言うのなら以前の肉体が消滅して闇の大陸に居たこの子の身体に転生したのが私、鬼族の創造者、デュカ・リーナなの。」

「転生……」

「そう。転生。まあ、以前の身体が消滅したのは闇の大陸でちょっとした出来事があつたからなのだけれどね」

「伝説のデュカ・リーナさま……た、確かにその魔力を見ればそんな気もしますが……」

俺は、気になるところが多くあつたので

「までっ！といふことは、お嬢ちゃんは魔神の生まれ変わりなのか？それにこいつが魔力とやらなのか？この凄まじいブレッシャーがっ！？」

「成る程。ブレッシャーね。魔力を扱えないモノは意外と分かりやすい言葉に置き換えるものなのね。」

俺が言うとデュカ・リーナと名乗った少女が一人で納得していた。さらに、

「また魔神か。貴方達人間には何時の時代にもそう言われてきたわね。あとは鬼とかね。でもほんとうは……」

寂しそうにそう言い、続けた。

「それで、先ほどの話に戻るのだけれど、私は少ししか聴いていいの。だから坊や、よかつたら何を話してたのか教えてくれないかしら？もしかしたら力になれるかも知れないわよ」

鬼族の男に先ほどの話をせがんだ。何故氣にするのかは分からなが。

「ハイツ、分かりました。そ、それと坊やはやめていただけないでしちうかつ！」

「ああ、御免なさいね。鬼族は全て自分の子どもぐらいに思つてゐから・・・貴方、御名前は？」

「ハイツ。私は火喰い島4柱ちゆうが1人、ジン・ガトウと申しますつ

「4柱？つていうのはよく分からぬけれど・・・名前はジン・ガトウね、分かつたわ。じゃあ、貴方が現在の守護者になるのかしら？」

「いえ。そういうわけではありません。我等4柱はそれよりもっと大きな役割があります。主に島内の治安を護り、神獣を護る鬼族の最高幹部であり、この島全体を色々な面で治めております。守護者の役割のほうは精氣兵ブライナマンに任せておりますので侵入者程度ならあれ一体あれば十分でしょう」

「ふうん？それは今何処に置いてあるのかしらね？あれが持つているブラーाを探つて見たのだけれど見つからないわ・・・まあ、そのうち分かるでしょう。それよりも、」

「あ、はい。先ほどの話ですね。——」

この鬼族2人の話をぼーっと聞きながら俺は今からどうするかを考えていた。

何しろ他の奴はまだ皆氣絶しているので逃げることもできないし、この2人と戦つて勝つのは間違いなく無理だろう。かといって神獣を探しに島に侵入してきた俺達をこのまま見過すとも思えない。どうするか・・・

そして、先ほど俺が説明した話を男が少女に伝え終えたのか、

「成る程ね。それでこの島に大勢やつて来たというわけね。レビューアス国の人間か・・・ねえ、人間の貴方?」

少女が俺に話しかけてきた。

「・・・なんだ?」

「貴方はおそらく火の大陸の人間だからわかるでしょう? この島にレビューアスタンが存在しないことを。それをレビューアス国の人間達は知っているの?」

と言つので、俺は先ほど話してなかつた、俺達とレビューアスの奴等が手を組むに至つた経緯を説明してやつた。すると、

「へえ。人間にも変わつた術を使う者がいるのね。ちょっと見てみたいわ。

あ、でもそう言えば昔も結構変わつた術を使う人間も居たのよ。まあ、レビューアスの人間達は運が悪かつたわね。いや、良かつたのか

しらね？結果的に強力な仲間が増えたのだから

少女はそう言った。

俺は、

「いや、運は悪かつただろうさ。何せ俺が聞いたことのある伝承通りならほぼ間違いなく目的の神獣はこの島には居ないからな。結構無駄な時間を使わさせられるぞ。本人達は納得していたみたいだが・・・」

「ふうん。ということは貴方はこの島に居る神獣が何か知っているわけね？」

「ああ。お伽噺みたいなもんだが、聞いたことはある。神獣フェニックスだろう？不死の神獣フェニックス」

「そうね。それは正しいのだけれど、何故急に神獣が現れたと思う？」

「急に現れた？いや、それよりもその□ぶりは神獣フェニックスが本当にこの島に居ると言つて居るようなもんだぞ。何故それを俺に言つ？」

「ええ。言つておくけれどフェニックスは間違いなくこの島に居るわ。今はまだ幼獣だけれどね。そもそも私が約2000年ぶりにこの島に戻った目的がそれだもの。何故教えるか、というのはせめてものお詫びよ」

「そうか。一目見てその姿さえ確認出来れば俺達はすぐにでも立ち去るが・・・一つ気になつたがお詫びとはなんだ？」

「ああ。簡単なことよ。私のせいでレビューAスの人間、つまり水の大陸の人間に余計な心配をさせ無駄な時間を取らせてしまったから」

それを聞いてもよく意味が分からなかつた。が、この少女の言葉の意味をよく考えてみると・・・

!?

俺は一つの答えにたどり着き、そして、

「ま、まさかお前が・・・?」

「そつ。つまり私がウォルスを一晩で消滅させたモノの正体、といふわけ」

驚愕した。

「な、何故?」

「何故消滅させたか、ということ? そうね。一言で言えば邪魔だからよ。私の目的のために」

「も、目的だと? セっき言ってたフェニックスが目的というのは?」

「まあ、この島に戻つた目的もウォルスを消滅させた目的も同じではあるのだけれど・・・」

「同じ目的・・・」

「まあ、その目的自体は貴方たちには関係ないとと思うわよ。辿り着

けば別だけれど

「辿り着く？ どうこのことだ？」

「此方の話よ。まあ、それは特に気にしなくていいわ。本当に辿り着けるのなら必ずと分かることでしょうから。」

「必ずと分かる？ じつたい何を言つて居る・・・？」

「そうね。今はまだ私が何を言つて居るかは分からないでしょうね。でも・・・」

「なんだ？」

「・・・いえ、なんでもないわ。まあ兎に角、其処の寝ている人間達にも、この島に来ている貴方のお仲間の人間達にも神獣を手に入れるのは諦めるよう言つておいて頂戴。」

「ああ。それは構わない。そもそも俺達の目的はこの島に見えた光り輝くモノの調査だつただけだ。それに仮に神獣を持つて帰つてもどう扱えばいいのかも分からぬしな」

「そう。聞き分けがいいのね・・・」

少女は少し残念そうに言つて、

「・・・この人間は違うのかしら・・・？」

と、何やら一人ごとを言つて居る。

その時、遠くのほうからなにやら話しそうきものが聞こえた。

（）

俺達は銀色を倒したあと、奥に見えた森に入りしばらく進んでいた。さすがに岩山の道ほど険しくはなく、進みやすい道だつたが、この森がまたやたらと長かつた。それでも一時間も歩いただろうか、漸く森の切れ目みたいな場所に出た。

そして、

「見て下さいみなさんっ！あれは門じゃないでしょつかつ？」

アズトが興奮したようにそう言ったので前方を見ると巨大な門が見えた。だがさらに近づいてみると、俺は門とは別に気になるモノも見えていた。

「ねえ、あれって人が倒れてない？」

ネクも見つけたのだろう、100mぐらい先の門の辺りには人らしき倒れている奴が何人か見える。立っているやつも。

「あれは・・・レンジさんの班では？」

アズトが言う。確かに今立っている3人の人物のうち1人は長い槍を持つている。あれがレンジだろう。

だが、

「あの小柄な人と大きな人は誰なんでしょうか？」

ま、まさか鬼族つ！？

俺と同じ疑問をアズトが言った。喋りながら少し早足で俺達は門へ近づいており、あと十数mまで近づいたとき漸くその人物達の顔が視認できる距離となつた。

・・・やはりレンジの班の連中だつた。だがレンジ以外の4人は皆倒れている。俺達の話し声が聞こえたのか立つてゐる3人は皆此方を向いていた。

妙に顔色が悪いレンジに、おそらく鬼と呼ばれる所以だろう、額から一本の角が生えたやたら大きな男と、額から一本の角が生えた金色の髪の小柄な少女が其処にはいた。

と、誰かがその3人に向かつて物凄い勢いで駆け出した。ミシルだ。あの鎧来てあの早さとは凄いな、と見ていると、

「ウオオオオオーッ！」

ミシルが叫びながら背中から抜いた大剣にオーラを纏わせて、小柄な少女に斬りかかった。

第15話～少女～（後書き）

「」意見」「感想あればお願ひします。

## 第16話／理由

（）

ガルディアは現在眼前で繰り広げられている光景を見ながら数年前のことを思い出していた。

数年前ウォルス王国を訪問した際に鍊兵場で見せてもらつたような技を見れば、やはりあのミシルという男が持っていたのはウォルス王国の騎士が扱うバスターードソードだったと思える。ということはミシルという男は必然的にウォルス王国の騎士・・・だったと言うことができる。

というのも、あのミシルという男が今繰り出している剣技は剣の扱いに素人である自分から見てもバスターードソードという大剣を使うことを前提とした剣技だからだ。

ウォルス王国の騎士が使うつまりバスターードソードを使うことを前提とした剣技とは、剛剣技じきょうけんぎと言い主に対戦する相手の装備する武器や鎧を破壊する事を目的とし、（魔物じよつけと戦う場合はそのまま頭など急所を狙う）使い手には何より単純に臂力ひぢゆく、つまり力強さと併せて狙う場所の正確さが求められる。

今のミシルの動きはどう見ても少女の持つ武器らしき銀色の杖じょう？を破壊しようと剣技を繰り出しているようにしか見えない。

また、バスターードソードは別名ソードブレイカーとも呼ばれ、並みの剣、例えばレビュイアスの騎士が使う片手で扱える程度の刃が真っ直ぐな刃渡り60~70?ぐらいのブロードソード、よりも刃渡りは倍以上の長さがあり厚みや質量も数倍あって、かなり頑丈に作られている。

それを考へると、あのように武器を狙つた大剣による剛剣技の息も

吐かせぬ連續攻撃など常人や普通の武器なら数回受けるだけでも不可能に思える。

だが・・・

（）

ミシェール・オルolean（現在はミシル・タイナと名乗っている）は、忘れもしないその少女の顔を見た瞬間少女に斬りかかった。

それは、三ヶ月程前に少女が行つた所業に対する復讐心という感情も勿論あつたが、何より先手を取らなければ以前のようにまた手も足も出さずにやられる、訳も分からないままで得体の知れない妙な術を使われる、という考えが頭にあつたからだ。此方が戦いのイニシアチブを取るために頭の片隅ではそういう計算が働いていた。

目の前の少女にこの火の大陸に飛ばされてからこの三ヶ月・・・その間私はアズトの護衛をしたり仕事を手伝いつつ時間を見つけては自分の剣技に磨きをかけるべく王族護衛騎士の時よりも遙かに密度の濃い修練を重ねていた。

それにこの島に入つてからの道中、トウヤといふ少年に人の身体に流れる力、所謂オーラといふものの使い方の基礎的な手解きを受けた（私が急に喋つたからだろう、トウヤを始め皆一様に驚いていたが、トウヤは私が強さの秘密を教えてほしいと頼むと快く教えてくれた）そのおかげかオーラを使う適性が私にあつたのかオーラの基本的な利用方法、つまり身体的強化・装備武器防具強化の術を私は短時間で最低限身につけることができた。

そして、以前の時よりも、早さ・破壊力・頑丈さ、と戦いにおける様々な面で能力が上昇した私がまず狙つたのが厄介にも形を変える銀色の杖らしきものだった。のだが・・・

「くつ。このような細い杖が何故破壊できないっ！」

先ほどから私は少女の杖に何回、いや何十回と大剣を叩き込んでいたが、杖には傷一つついていない。息が切れ手を止めたところ、

「ふふつ。久しぶりの再会の挨拶がこれなんて・・・やはり貴方はいいわね。それと、この（嘆きの杖）は材質こそただの銀だけど、太古の昔にとある大魔道士が魔術と呪術を組み合わせて作ったものだから、多少以前よりその剣の破壊力が上がったところで破壊はできないわよ？何せ使い手の魔力を吸いとつて、強度を上げるから。まあ、人間には魔力の内包量は分かりづらいでしょうけど」

と言つて少女は銀色の杖を此方へ向けた。

「それにこの杖の特性はそれだけじゃなくてね。憶えているかしら？この杖を持つたまま魔法を唱えると・・・ファンゴ」

と、以前見たように杖が凄まじい勢いで長く伸びると同時に丸太のように太くなり此方へ向かってきた。だが、オーラを使えば動体視力なども上がるのか、私は何とかその杖の軌道を見切り直撃を免れた。

「へえ。破壊力だけじゃなくてこの前よりも総合的な能力が上がっているわね。前は為す術もなく当たつた（ファンゴ）を避けるなんてね。見逃した甲斐があるつてものだわ」

私が素早く攻撃を避けるのを見た少女が感心したようにそう言った。だが、

「見逃しただと・・・？」

ふざけるなっ！私は貴様だけは絶対に許さないと誓った・・・！失われた国のために！摘まれた尊い命のために！私自身の尊厳のためにつ！」

・・・と言つたものの、理屈はよく分からぬがあの杖を破壊するのはおそらく私の力では無理だろう。だが、得体の知れない妙な術、魔法とか言つたあれを使われる前に決着をつけねば・・・この少女は自分の手で倒さねば・・・

そう決心した私は、

「・・・行くぞ」

「どうぞ」

「セアアツ！」

少女へ必殺の連続突きを繰り出した。

「また、その技？そこは進歩がない、くつ」

呆れたように言つていたが私の突きが少女の右肩を捉えていた。以前三連突きをしたときは全ていなされたが、早さが上昇している今私の突きはあのときより遙かに早く強力で、さらにもう1突き軌道を変えた突きを加えた四連突きのため、何とか当てることができた。

「・・・油断をしたつもりはないのだけれど。貴方本当に強くなつ

たわね。もつ少し高みに昇れば、この子に匹敵するのではないから?」

少女は傍にいる同種族らしき男を見ながらそう言った。その男が、「デュカ・リーナさま、「冗談はお止めください……それにそろそろお戯れも止められたほうが。下手に調子に乗せても強さに隔たりがありすぎるため却つてその人間が傷付くかと……」

と、少女をたしなめつつ、此方を憐れみの目で見ながら言った。

「なんだと。貴様っ！」

私はその大男に剣を向けた。が、

「そうね。この人間の成長を見るのが楽しくてつい遊んでしまったわ、御免なさい」

「い、いえ。謝られることでは……貴女様の考えることですから我等のような若造が及びもつかないことは存じますが……」

「まあ、ね。でも、別に私を倒すために強くなつて欲しいわけではないから、あながち遊びとは言えないのだけれど。要は確認みたいなものなの」

「確認、ですか？」

「そう」

「勝手なことをつらつらと喋り出したので、

「黙れっ！貴様らの事情など知ったことかっ！」

私は怒鳴り大男に斬りかかるつとした。その時、

「まあ、待てよミシル」

今まで傍観していたトウヤがいつの間にか私の横に立ち話しかけてきた。

（――）

理由も分からぬままミシルが急に戦闘を始めたので邪魔をしないように俺はしばらく見ていたが、ミシルの殺気とは裏腹に鬼族の奴らには戦意がないように見えたのでそれが気になつた俺はついついミシルを止めていた。

「邪魔をするな、トウヤー私は今からこいつらを斬り捨てるッ！」

「うん、それなんだけどなミシル？こいつらに何か恨みもあるのか？いや確かに俺もさつき銀色を有無を言わさず斬り捨てたけど、あれはあいつがいきなり此方を攻撃してきたからだぞ」

「恨み・・・と言えば言葉で語りつくせないほどあるが・・・」

やつ言いながらミシルは憎悪の眼を特に少女のほうへ向けていた。

「へえ。とりあえず何があつたか聞かせてもらつてもいいか？」

「・・・・・・」

「おこ」

ミシルが急にそっぽを向き口を開いたので思わず突っ込んだ。  
と、そこへ

「推測だが、多分そいつの因縁はなんとなくわかる」

先ほどまでおれと同じく傍観していたガルディアが口を挟んできた。

「どうこうじだ、ガルディア？」

「その男、ミシルとか言つたな。おそらくはウォルス王国出身の騎士だ」

「ガルディアが言つていた1晩で消滅したって国か？」

「そうだ。その生き残りだね。どうこう手段で生き延び今この火の大陸に居るのかは知らんがその男の戦いを見る限りでは、間違いない」

「成程な。だとすればミシルがあそこまで激昂しているのはあの少女がウォルス消滅に何らかの形で関わっていたと考えるべきか・・・

」

俺が何となく理解したところ、

「・・・違う」

ミシルが呟いた。

「ん？違うって何が違うんだミシル？」

「関わっているどころの話ではない・・・やつが、やつこそがウオルスを消滅させた張本人だっ！」

と少女を指して言った。

「えつ？ そなのか？ でもあんな弱そうなやつがどうやって？」

ミシルの言葉に疑問を覚えた俺は少女を見ながら言った。すると、

「あらあら。弱そうだなんて。久しぶりに言われたわ」

言われた本人が楽しそうに言った。

「いや、鬼族だから何か俺には分からぬ強さがあるのかもしれないけどな。見た目でいえばあんたの横のかいの方方がよっぽど強そうだぞ。それにあの銀色の奴も」

「ええ、まあ見た目はね」

くすくす笑いながら少女はそう言った。そしてふと疑問に思ったのか、

「銀色？」

と聞いてきた。ので、俺は

「ああ。なんか青白い火のようなものを吐くやつだった。いきなり此方を攻撃してきたんで叩き斬ったが。魔物かとも思つたが、血も

でないし金属みたいな皮膚だったし、あれはなんだつたんだろうな。  
赤い石とか妙に綺麗だつたけどな」

未だにあれの正体がいまいち分からぬ俺は、この島のやつならぬにか知つてゐるだろうと思ひ軽い気持ちで聞いた。すると、

「な、なんだとつ！ブランマシン精氣兵を斬つただとつ！ばかな・・・あれの材質は鋼と銀の合金だぞ。いや、そんなことよりもイレイザーで消し炭になつていないと・・・？魔法も使えない脆弱な人間風情がいつたいどうやって・・・」

横の鬼族らしき大男が何か驚いてた。というか今さらつと馬鹿にしたよなこいつ？

その発言に軽くムカついた俺は、

「どうやつて？知りたいか？・・・」「うやつただけだつ！」

オーラを開放し大男と少女にプレッシャーをかけた。

「ぬぐつ！？なんだこれはっ？ブランナ？いや、違う・・・！」  
「へえ。魔力じゃないのにこの圧倒的なチカラ・・・彼も可能性があるわね。ううん、それどころか今の所最有力候補ね！」

大男は苦しげに顔を歪めていたが、少女は平然としむしろ楽しそうですらあつた。

「・・・あんた、何者なんだ？」

結構全力でプレッシャーをかけているのに少女があまりにも平然としているので思わず聞いた。

「？わたしのことかしら？何者・・・そうね、私の名前は『デュカ・リーナ、鬼族よ』

「デュカ・リーナ・・・何か聞いたことがあるような・・・」

俺は何となく聞き覚えがあるような名前を聞いて首を捻っていたが、そこへ

「小僧、俺が説明してやるよ」

レンジのおっさんが言つてきた。

おっさんは先ほどまで鬼族の大男や少女と色々話をしていたらしく、俺の疑問についての説明や分からぬ点がいくつかあつたが納得できる点もある話をした。

魔神とはな・・・どうりで聞き覚えがあるわけだ。俺はそう言った昔話とかモノガタリは嫌いじゃないのでよく本を読んだりしていたからな。ただ、鬼だの魔神てつきり空想の産物だとばかり思つていたが、俺の目の前に立つ少女を見ると、そんな考えは吹き飛んだ。少女が放つオーラでもない不可思議な空気は魔力といい、その魔力を使い様々な不思議な技を繰り出すことを魔法というらしい。

ただ、さつき見た感じではオーラの使い方と似たような部分もあつたが・・・発想が同じなのか？

「でも、また辿り着ける可能性がある人間に出会えたなんて、今日はとてもいい日だわ」

少女デュカ・リーナが上機嫌にそう言った。

「どういうことだ？また、とか辿り着ける、とか？」  
訳の分からぬことを言つないので聞いてみると、

「んー。そこの騎士もそつだし貴方もなのだけれど、要は可能性の

話ね

ミシルをちらりと見ながら言つが俺はますます分からず、

「可能性？」

「そつ。闇の大陸に行ける可能性。」

「闇の大陸？」

「そつ。人間がそこに行くためには最低でも、ある程度以上の強さ、もしくは誰かに対する尋常ならざる憎しみや恨み、それか新しいモノを産み出せる程の発想や閃き、等が必要なの。」

「あまり良く分からないんだが・・・」

「まあ、今は別に分からなくともいいわ。それに、仮にそれらを兼ね備えている人間だろうと辿り着けるとは限らないのだから」

「ふーん？」

分からぬながらも何となく納得したような気がした俺は一応相槌を打つた。

そこへ

「貴様らの事情など知らんと言つた・・・！」

俺達の話にしびれを切らしたのかミシルが再びデュカ・リーナへ剣を突き出した

「まあ、以前から考へると貴方は格段に強くなつたわ。それに何より私への憎しみが増加しているのが一番良いところね。楽しいから

「このまま貴方の相手をしていたいところね」

デュカ・リーナはミシルの剣を全て避けながらそんなことを言つて  
いる。

「でもね、私はまだまだ色々やらなくちゃいけないことがあるの。  
だから貴方にばかり構つてもいられないのよ」

「私の知つたことか？！貴様だけはつ！」

ミシルが先ほど見せた4連突きを再び放つたが、今度は全てかわさ  
れた。

「くっ！」

「それに自分でも分かつてゐるのでしょうか？今の貴方の剣では決し  
て私を倒すことなどできないと。先ほどより剣速が鈍つっているわよ。  
これもほら」

デュカ・リーナは先ほどミシルが与えた傷を見せながら言つた。そ  
して手で傷に触れた途端、深手に見えたその傷がみるみる癒えてい  
く。

「なつ！？」

「ねつ？まだまだ今の貴方程度じゃ私に傷を残すことすら無理ね。  
もっと戦いの経験を積まないと、闇の騎士ダークナイトには触れることが出来  
ないわよ」

「闇の騎士ダークナイト？」

「まあ、別に会うかどうかも分からなければね。じゃあ私はそろそろ行かないといけないから・・・ジンくん？」

ミシルの剣を避けつつデュカ・リーナは横の大男に話しかけた。

「ハッ！」

「この場はおまかせしても良いかしら？」

「勿論です。デュカ・リーナさまっ！貴女に言われるのなら人間どもを皆殺しにでもしてみせましょウツ！」

「うん、それは無理だと思つからしばらくの間足止めだけして頂戴」

「・・・はい。承知しました」

最初は意氣込んでいた大男がデュカに言われて落ち込んだように頑垂れていた。まあ、デュカはともかくあの大男ぐらいなら一閃できるだろう、俺なら。

「さすがに貴方だけじゃ分が悪すぎるだろから・・・召喚！牛鬼！」デュカが杖を地面に向けて叫んだ途端地面が妖しく光り、その光の中に大きな人影が見えた。

「じゃあ、あとはよろしく」

ヒュカは言うやいなや姿を消した。

と同時に光も薄れ中の人影もはつきり見えるようになつた。

・・・そこには鬼族の大男よりも一回りはさらに大きな身体をした

鬼族みたいな角の生えた牛が立っていた。

## 第17話／鬼族

（）

ロナン・サタクは火喰い島の中央部に建つ神殿の中にある「回復の間」にて先ほど受けた傷の治療をしていた。そこには、

「いやあ、ロナン殿がここまで手傷を負われるとは……昨今の人間の強さといづものは儂らが現役の頃よりも遙かに強くなつたりますのう」

と、年寄りじみた口調でロナンに話しかける者がいた。

「そりか……まあ、いくら複数居たとはいこの俺がここまで手こずるとは思わなかつたな。それにマト婆程の戦闘経験者がそう言つとはな……」

「まあ、儂は戦闘よりもむしろこいつちが専門ですがの。直接人間と戦つたことはほとんどないが、それでも現在の4柱の皆と戦えるほどの実力を持つた人間など儂の今までの経験でも一回ぐらいしか見たことはないですわ」

と、先ほどから俺の傷口に血の手を当て治癒魔法による治療を施している。

このマト婆とはマトフ・サトイと云い現在この島で最高齢とされており、現在は2500歳をいくつか越えたところである。

鬼族の寿命は人間の凡そ30～40倍程度で身体能力は基本的に数倍はあるが、マトフは俺が物心ついた頃見た目がすでに年寄りだった記憶がある。

「まあ、250年程前に訪れたあの一味は別じゃったがの」「そういえば俺はマト婆から強い人間がこの島に来た話を聞いたんだつけな。」

「スサノオだつたつけか？俺はまだガキだつたんで実際見ずに聞いただけだが・・・」

「そうじゃのう。ロナン殿は当時まだ戦闘もできないぐらい腕白坊主じゅつたから」

「まあ、な。ただ当時の4柱、つまりあんたやガトウに聞いた話いやそいつらも魔法を使つたらしいじゃねえか？今島に居る奴等も魔法みたいな技を使うが何か関係があるのか？」

俺が先ほどマト婆に説明したのは、魔法らしき術を使う人間の侵入者に手傷を負わされたという話だ。

「ふうむ。断定はできんが、もしかしたらそやつらは（鬪神）共の流れを汲む者かもしけんな。同じ国か、はたまたその血筋か・・・」

鬪神とは250年前にこの島にやつてきたスサノオという人間のことを示す。

何しろ身体能力で劣る筈の人間なのに4柱と互角の戦いをしたという話で、その戦い以降我等鬼族はそいつを畏怖を込めて鬪神と呼んでいる。

「だが、それはそれでおかしな話じゃねえか？」

「そうじやな・・・だから断定はできんのじゃ」

といふのも、そのスサノオ共と当時の4柱は結局引き分けに終わつた戦い以降、お互いの力を認めあい、また戦力の消耗を避けるため互いの領地への不可侵の契約を結んでいるはずだからだ。

「まあ、儂等にとつてはそうでもないが250年という歳月は人間にとつては色々あるのかもしれんしどう・・・代替わりなどがある契約も無いに等しい状態になつておるのかもしれん」

「ぬうう。何て身勝手な奴等なんだ、人間め！」

「までまで、ロナン殿。あくまでもそれは推測じゃ。別にそつと決まつたわけではないわい」

「だがよ・・・」

傷の治療も終わり俺がマト婆と話していると、（回復の間）に誰かが急ぎ足で入ってきた。そして、

「ロナンッ！ 貴様！ 単独行動を取つた挙げ句侵入者にやられ逃げ帰つただとつー！」

俺に向かつて怒鳴つた。

「はあ。つるせえな、フニース。そんなに怒鳴らなくとも聞こえてるよ。」

こいつはフェニス・カハラという小言の多い爺いだ。歳は2000何十歳ぐらいで見た目はじつにおっさんだが、一応4柱の長で取りまとめをやっている。得意な魔法は防御それに結界を張ることだ。戦闘では鉄壁を誇る。

「そんなことよりも、フェニス。侵入者の人間共の目的は神獣だぞ。あんたがしつかり見張つてないと駄目だろうが」

「そんなことよりもだと。貴様は本当に・・・いや待て！今何と言つた！？神獣だと！？」

俺はめんどくさいながらも答えてやつた。

「ああ、どうやって知つたかは知らんが確かにそう言つてたな。最もこの島の何処に居るかとかは知らなそうだったが」

「恐らくですが、神獣を嗅ぎ付けられた原因は不死鳥転生の際の輝きでしうね」

新たにもう一人（回復の間）に入つて来ながらそう言つた。

「ノルエル？どういうことだ？」

その人物はノルエル・ハザマと言い、鬼族には割合が少ない女性だ（この島の鬼族の総数は約500で男性は約400女性は約100）。また歳は4柱で最も若く150を数年前に過ぎたばかりだ。魔法は土属性を使い強さはそれなりだが、こいつには他の誰にもない能力、プラーナの流れを見る能够がある。

「あの時、つまり不死鳥転生の時に島全体が眩い光に包まれましたよね。この島から一番近い人間の国、火の大陸ですか、あそこからここは50?と離れてないですから人間でもその光は視認が可能だと思われます」

成る程。そういうことか。

「それに、関係ないかも知れませんが・・・」

「ん、まだ何かあるのか、ノルエル?」

「いえ。侵入者が来たと思われる時からじばらくして精氣兵の反応が途絶えたのですが・・・」

「なつ!お前まさか精氣兵<sup>ブランナマシン</sup>が侵入者にやられたとでも言つのか?・  
・!いや、そうか・・・」

「はい。私もまさかとは思つたのですが、口ナンさんまでその有り様だと・・・」

「確かにな・・・俺が相対したやつとは別のやつだろうが、あいつらと同じぐらいの実力のやつが居るならその可能性は高いな・・・」

精氣兵<sup>ブランナマシン</sup>は俺が全力で風の魔法を駆使してようやく倒せるほどの強さだから、俺が苦戦した奴等ぐらいの強さの連中と出会つていいたら仮にやられたとしても不思議ではない。フェニスが、

「くっ。口ナンが迂闊なだけかと思えば。そんな腕の立つ侵入者ならいよいよ不安になるな。こうなれば、ガトウと合流して此方から先に攻めるか・・・?」

ぶつぶつ呴いていた。

誰が迂闊だこの爺い。

だが、

「そうだな。それぐらい強い奴等だった。それかこの神殿に詰めて  
いる奴等を最低限神獣の警護に残して一気に此方から攻めるのはど  
うだ? 50は居るだろ?」

と提案してみるも、

「いえ、それでは此方が手薄になります。侵入者は何方向から  
何人来ているかどれがどれぐらいの強さなのか、今のところ不明で  
すのでそれは危険かと」

ノルエルに一蹴された。  
だが、どうするべきか。

恐らくまだ侵入者が此処に辿り着くまでは一日ぐらいの猶予はある  
だろうから、とりあえずガトウを探して相談すべきか・・・

と、その時部屋に生暖かな風が吹き、

「今の子達は頭が悪いのかしら・・・」

頭に手をやり呆れたような声を出す少女が部屋に立っていた。

／＼＼

どう見てもいきなり沸いて出たようにしか見えないその牛面がこの場にいる者を見回しながら唐突に喋りだした。

「まったく、あのお方は・・・何の説明もせずに・・・だが召喚されたということは、つまりいつもの如く視界に入る生物を全て殲滅すればよいだけ、ということか・・・まったく人使い、いや鬼使いの荒い御仁だ・・・」

というより何か愚痴を言つていた。

鬼族の大男が焦つたように、

「いや、待てっ！貴様は多分だがデュカ・リーナさまの仲間だらうつ？先ほどデュカさまが召喚魔法、見たことはないがおそらく召喚魔法で貴様を呼び出したのではないかっ！？それならば私はデュカ様の味方、むしろ家族とも言える存在だつ！此方を敵視するのはやめろつ！」

牛面に言つていた。  
牛面は、

「なんだ、貴様は・・・？我は確かにあのお方、デュカ・リーナ様と召喚契約を結んでいるが、基本的には契約を結んだ本人以外は殲滅することになつてているのだが・・・」

と、大男をなめまわすように見たあと、

「ふん。だが貴様があのお方に何となく似ているような気がするのも事実。そもそもおの方が召喚しつぱなしで何の説明もせずに消えたから、訳も分からず言ってみただけだ。まあ、貴様は一応殺さずにおいてやる」

「ぐぐつ。まるで納得はいかないが・・・まあいい。とりあえずこの場に居る私以外を倒せば間違いはないはずだ」

「わうか」

「どうでもいいが牛みたいな顔してよく喋るなこいつ。それに召喚魔法？召喚契約？何を言っているかわつぱりだ。ただ一つ分かっているのは、

「つまり俺たちを殺そうというわけだな、牛面。どうやるんだ？魔法つてやつか？それともそのバカでかい斧か？」

俺は牛面の持つ二つの斧を指しながら尋ねた。

「ああん？なんだこの小さいのは。まあ、死ぬ前にどう死ぬか教えてやっても特に差し支えはないが・・・」

牛面が言つたが、大男が

「貴様、油断するなつ！確かにそいつは小さいが恐ろしく強いはずだ・・・何せデュカさまが私より強いと判断したのだからな・・・」

自分で言つて落ち込んでいた。

それにしてもこいつら小さい小さいって……いや、確かに大男は2m以上はありそつだし牛面はそれよりまだでかいから間違つてはないが……

「それは貴様が弱いだけではないのか?」

「ぬぐつ!そ、そんなことはない」

「そうか?まあいい。そんなに言つなら本氣でやつてやるとしよう。  
この一丁板斧（ひょうばんふ）でなつ!」

と牛面が言いながら両手に持つていた斧を此方へ向けた。俺はそれを見ながら炎斬を抜いた。そして、

「ミシル。あの鬼族のほうは任せていいか?」

ミシルのほうを見て聞くと、

「あ、ああ。それは構わないが……奴は一体どこから?いや、あの女のことだ。また得体の知れない術を使つたのだろう?」

1人で納得していた。ので、俺は牛面に向き直つた。

「よし。行ぐぞつ、牛面!」

「牛面牛面と、この小さいのは……我が名はタウラ・ミノス!鉄島の霸者（じしまのばしゃ）、タウラ・ミノスだつ!」

「鉄島?またよく分からん場所だな……とにかく行ぐぞつ、ミシ

ル！」

「応ッ！」

俺はタウラく、ミシルは大男へと同時に斬りかかつた。

（――）

俺はその少女を見た瞬間、2つのことを思った。

1つは鬼族特有の角が生えているものの、見覚えのない顔に何か懐かしい感じがしたこと。

もう1つは自分より明らかに年若いその少女の見た目からは考えられないほど異常に禍々しい雰囲気が放たれていること。つまり、

「戦う気はしねえな・・・」

俺は呟いていた。他のやつからはよく好戦的だの戦闘狂だの言われる俺ですらそんな気分になつた。当然、

「ええ、そうですね・・・ロナンさんの言つ通りです・・・」

「ロナンですか、そつか・・・だが、知らない者ははずなのに妙に懐かしい感じがするな・・・」

ノルエルとフェースも俺と同じ印象を受けたらしくやや氣後れしながらそう言った。

「ふむ？ 僕もこの少女は見たことがないが・・・何か懐かしい感じが

するのう・・・

マト婆までもがそう言つたところ、

「ふう。まあ無理もないわね。この姿ですものね・・・？先ほどもこのやり取りをしなかつたかしら・・・」

少女が何か呟いていた。

「で、おやうくだけど貴方達が現在この島の4柱とやらねー守護者ではなく」

「！」

少女がそう言つたときの場に居る者が全員驚愕した。  
さらに少女は、

「ああ、そんなに驚かなくても。何故貴方達が分かったかと言つて、貴方達の魔力量と先ほどジンくんから聞いていた話から判断しただけよ」

「ジンくん？・・・ガトウのことか？」

俺は、率直に疑問をぶつけた。

「ええ、そうね。その子からこの島の現状を色々と聞いたので、今侵入者と戦っていると」

「こいつ、今ガトウが侵入者と戦っていると言つたのか？」

「お、おこあんたつ！今ガトウは侵入者と、」

「ええ、戦っていると思つわ。それにしても……はあ。まさか姿が違うだけでこの反応とはね・・・さすがに顔見知りにそんな態度を取られると少し落ち込むわね。まだ子供だった子はともかく、」

とフニースを見ながら言つて、

「まさか貴女までもがね、マトワ?」

マト婆を見ながら言つた。

「なつ、顔見知りじやど。儂はお主と会つたことなど……。  
!ま、まさかお主、い、いや貴女はっ!」

田頃マト婆が見せないとでも慌てた反応をしていた。そして、

「テュカ・リーナさま……?」

と、恐る恐る言つた。

「そう やつと分かつてくれたのね。久しぶり。フニースの坊やも  
久しぶりね

言われたフニースは口をあんぐりと開けて呆けていた。

「坊や?」

「・・・はつーあまりの驚愕に我を失っていた。本当にこの者がデ  
ュカ・リーナさまなのか、マトワよ?」

「ええ、セウジヤフニス殿。」この放つ雰囲気は他の者が持つ  
よつもない。まさしくかつての「テュカ・リーナさまと同じじや。じ  
やが・・・」

煮え切らない態度でマト婆が少女を見る。

「どうしてこんな姿かと言つ」とかしら、マトフ?」

「ああ。セウジヤ。テュカ・リーナさまがこの島を出る際は、今  
儂よりもまだ婆さんじやつたはずじや。雰囲気も同じじやが、そ  
の姿は・・・」

「そうね。あの頃の私の見た田はお婆ちゃんだった。貴女は・・・  
老けたわね。昔は若く美しく聰明だったのにね・・・」

少女がマト婆を軽く憐れみながらそう言つた。

「ぬぐつ・・・・・つだが、いつたい何があったのじや、テュカ・リ  
ーナさま?」

マト婆が少女に尋ねると少女は闇の大陸といつといふで起つた出来事、それに伴い少女の身体に転生して現在の姿になつたこと、田目的を果たすために神獣に会いに来たことなどをかいづまんと俺達へ説明した。

そして、

「それで、先ほどの貴方達の頭の悪い会話に戻るのだけれど

俺達の先ほどの会話を聞いていたのかそう言つた。

「いや、いや頭の悪いと言われましても。ロナンが苦戦するほどどの者

なら然るべき対処をするべきだと思い・・・

フェニスが言い訳じみた言い方をしていた。

「いや、だからね？そもそも前提がおかしいの。人間が此処まで侵入してきて神獣まで辿り着くとしましょう。でも、だからなに？」と少女デュカ・リーナが言い放った。

「？」

デュカ・リーナ以外の者は皆一様に首を傾げた。  
それを見て呆れたように、

「いや、だからね、神獣・・・フェニックスはどんな特性を持つて  
いるかつてこと。」

デュカ・リーナは言った。フェニックスの特性。そんなものはこの島の者なら誰でも知っている。

まず、決して死れない。1000年に一度ぐらいの割合で肉体が燃えつき滅ぶのだがその燃えつきの炎の中から肉体を再生させるためだ。ただし、その際に全魔力を使いきるのか、再生してから一年ぐらいは幼獣の姿で大した能力も魔力もない。そして、別名火喰い鳥ともいい、火を体内に取り込み無尽蔵に魔力へと変換するため、  
その身体は・・・

「そういうことかつ！」

俺はやつとデュカ・リーナの言わんとすることが分かつた。

「つまり、神獣に会つても現状連れ去る手段がないということだな  
つ！」

「そういうこと。成獣なら喋つたり体温を調整できたりするでしょ  
うけど。何せフェニックスの体温は最低でも400度はあるから、  
魔法を使えない人間は触ることもできないわよ。まだ、飛べないで  
しょうしね」

「そうだ。フェニースの奴が神獣を見張つたり世話をできるのは奴が防  
御の魔法を使つていいからだ。当たり前のことになりすぎてすっか  
り忘れていた。

「ただ、例外として水属性の魔法を使える人間がいた場合は分から  
ないけれど。魔力を探知した限りではそんな人間は居なかつたわ」  
「ということは、貴女も他者の魔力を測ることができるのであるのか？」

「ええ。それはともかく。今の神獣の世話役は誰かしら」

と俺に聞いたので、俺はフェニースを示した。  
それを見て少女はフェニースへ、

「じゃあ貴方、私を神獣のところへ案内して頂戴」

と、微笑んで言った。

俺は先手必勝とばかりに上背の遙かに勝る牛面に斬りかかった、が

（）

ギイン！

「力で効くなら速さ、とでも考えたか小さいの・・・だが、無駄だ  
つ！」

牛面の持つ巨大な一本の斧によつて阻まれた。

「牛面のくせに素早い動きをするもんだ。だがつ！  
俺はさうに高速で何ヵ所か素早く斬りつけた。  
その巨体に似合わずそれを全て斧で防ぐとその牛面は、  
「ふん。速さだけなら大したものだが、死ねつ！」

今度は俺に両手で一一本の斧を振り回してきた。

ブォン、ブォン、ブォン、ブォン、ブォン、ブォン

うおっ！意外と早いな。そ、それに頭を的確に狙つてくる。俺はそ  
の攻撃を全てかわしながら、

「当たらないな。そんな遅い攻撃じゃー！」

此方から斬りつけた。

ブシュツ！

牛面は攻撃に意識を割いていたのか今度は当たつたが、浅い・・・！

「チツ！生意氣な。思つたよりも早いか。だが、その程度の小さな力タナではかすり傷ぐらいしかつれんぞっ」

牛面は言い、俺がつけた傷を意にも解さず二丁の斧を再び振り回した。

威力が足りないのか？

そう思つた俺は防御と早さに割いていたオーラを炎斬にも集中させた。

とりあえずはあの斧をぶつた斬る！

「ハアツ！」

俺はオーラを纏つた炎斬で二丁の斧の切つ先の交差する場所を狙つた。

ガギイイン！

「なにつ！」

しかし、手応えはあつたものの斧を斬ることはできなかつた。牛面が、

「ほう・・・人間風情が大した威力だな。その力タナの力か？いや、我と拮抗している・・・だと」

「力タナ？力タナってなんだ？」

お互ひの武器がくつづいて拮抗している状態で、また俺の知らない言葉を話す牛面に俺は聞いた。

「？その細く小さな刃はカタナというのではないのか？ムンツー。」

ググッと二丁の斧を押し付けながら、

「いや、これは剣だが……つらひー。」

俺も炎斬を押しつける。

「そうか、まあどちらでもいい。どちらにせよこの二丁板斧にぢょうばんぶほどの業物ではないだろう。何せこれは鉄島てつしま一の鍛治師が鍛えたモノだからなつー！」

と、斧をさらに押しつけてくる。

「そ、その鉄島とはなんだつ？」

俺も押し返す、が

「・・・死に行く者が聞いても意味は無かるつ・・・そろそろ終わりにするぞつー！」

牛面がさらに力を込めて押してきた。

俺の炎斬が押しきられ右手のほうの斧が俺を斬つた。  
「グアアツー！」

俺は斬られ、倒れた。

否、倒れたと見せかけ牛面の右横に飛び、

「ウオオツ！」

ズバッ！

牛面の右脇腹あたりを斬った。

「グアアアアツ！」

今度は効いたのか、牛面は苦しそうに声を上げた。

「き、貴様我が斧を食らつて何故無傷なのだつ？」

そりや そうだ。

オーラで強化した俺の身体は鉄より固い。鉄島とやらでの大した業物かもしれないが、所詮は鉄の斧で俺には通じない・・・まあ、重たい衝撃は多少あつたが、あえて食らつて隙を突いたのは成功したな。

「まあ、単純な話だ。お前より俺のほうが強いつていつ

いちいちオーラだの説明がめんどくさいので適当に答えた。

「ぐつ！」人間風情があ！調子に乗るなあ！

と、牛面が怒鳴り

「我が本気を出す」とになるとま・・・貴様は殺す」  
「その様でか？」

「ふんっ！ ハアアア・・・！」

牛面が身体全体に力を込めるようにすると、みるみる身体の色が変わっていく。丁度斧の刃の部分のような色に・・・

「つーなんだつ？」

俺が驚いたようにそう叫びと、

「これが我が秘術つ！（鉄化の術）だつー。こりなれば貴様の力タナなど通さんぞ、人間つ！」

だから力タナつてなんだ？？と思いながら、俺は手近にあつた石を拾つて牛面の胸めがけて投げた。

キイン！

まるで金属のような音がした。

「フハハハ！ 分かったか人間！ 我が身体は鉄の硬度を誇る！（鉄牛鬼）の異名は伊達ではないのだつ！」

牛面が自慢げに何か言つていた。いや、お前の攻撃も俺には通じないんだが・・・

「はあ」

俺は嘆息し溜め息を吐いた。

「ぬつ？ どうした小さな人間、 我の秘術に絶望したかつ？」

フハハ、と何が嬉しいのかそんなことを言つていた。

「いや、な。さつきの女が相手ならまだ面白そうだったな、と思つただけだ」

牛面との戦いが思つたよりつまらないと感じた俺はそつ言ひながら、大気中のプラー納を炎斬に集中させ始めた。

「ぬつ、デュカ・リーナさまのことかっ！？フ、フハハハッ！貴様“”ときがあのお方の相手になるとでも？？？言いたくはないがあの方は我よりも遙かに強いぞ！」

プラー納を炎斬に取り入れた俺は、

「そつか、楽しみだな」と言い、

「楽しみだとつ？貴様は我に今から、『ズシャツ！』

高速で一気に間合いを詰め炎斬を横薙ぎに牛面の胸へ斬りかかった。

「あ・・・？」

胸から真つ二つになつた牛面が空を見上げた状態で驚いていた。

「今から、何だ？斬られる・・・か？」

「ガフツ！ば、バカなつ！鉄の・・・硬度を誇る我が・・・身体があつ！」

と、言いながら牛面の身体が光に包まれ、そして消えた・・・

「？鬼って死んだら消えるのか？そもそもあいつは何だつたんだ？」

鬼？牛？

考えてもよく分からなかつた。

それにしても、（カタナ）とは一体何だ？牛面が言つていたように炎斬は剣ではなくカタナなのか？

ミシルの剣と炎斬を見比べて見ると、確かに炎斬は細く短いし形もミシルのは両刃なのに対して、炎斬は片刃で反りがあるが・・・

と、ミシルは大丈夫か？と思いだして少し離れた場所で戦っているミシルを見ると、

鎧が所々破損しながらも何とか立つてゐるミシルと、いつの間に手にしたのか透明な槍らしき武器と盾を持つた無傷の鬼族の大男が向かい会つていた。

第17話／鬼族／（後書き）

何となく話のきりが良いっぽい箇所で切りました。

## 第18話「火ノ鳥」

（）

ミシル・タイナは傷ついた身体で考えていた。

復讐すべき相手によく巡り合えたと思いきやその存在が突然消え、別の者と相対することになり、どうにもやり場のない感情があつたことは認めるが、決して油断したわけではない。なのに鬼族の魔法というものがよもやここまで得体の知れないものだとは思つていなかつた。

「どうした、人間よ？ 来ないのか？ 先ほどデュカ・リーナ様に向かつた気迫はどうした？」

目の前の鬼族の大男、ジン・ガトウと名乗った者が全身傷だらけになつた私へ嘲笑を含ませて言つた。

何故私がここまで苦戦しているのか？

私が復讐すべき少女、デュカ・リーナというのだろう彼奴は確かに一見何の変哲もない少女に見えだが、実態はその恐るべき残虐性とこちらの想像もつかない手段で祖国を滅ぼしたほどの実力の持ち主だ。先ほども以前よりかなり腕を上げた筈の自分が軽くあしらわれたのだから・・・

だが、今私の前に居るジン・ガトウという鬼族の男はデュカ・リーナよりも明らかに格下に思える。そのような相手に私がここまで苦戦しているのは・・・

「アイスダガー  
氷刃！」

ジン・ガトウがそう叫ぶとどこからともなく無数の透明な小さな短剣がかなりの速さで此方へ飛んできた。

「くつ！ がつ！」

少なくとも数十本はあるその飛んできた短剣を剣で薙ぎ払い避けたがそれでも避けきれず一本ほどくらつてしまつた。先ほどから奴に突撃しようと近づくもこのように得体の知れない術を使つてくる。一度は奇襲で我が剣の間合いへ近づき斬りつけたが、

「ふん。まあ私の氷魔法の前には無駄か……それに私に近づけたとしても先ほどのようになの、氷盾アイギスは抜けられないがなあっ！」

奴が左手に持つ透明な盾に受け止められた。

「貴様だけにあまり時間はかけられんな。行けつ！ 氷槍アイスジャベリン！」

言つと同時に奴が右手持つていた透明な槍を此方へ投擲してきた。私はそれをなんとか弾いた、が

「終わりだ、人間！ 氷劍アイスフランク！」

いつの間にか、ジン・ガトウが私の懷に飛び込みどこから取り出しだのか透明な剣を私に向かつて振りおろしていた。

（）

「へえ。無邪気なものね」

横の少女が気持ち良さそうに眠る田の前の幼い鳥の姿の神獣を見て  
そう呟いた。

私は一週間前から防御魔法を使いつつこの幼獣の世話をしてきたが・

・

「熱くはないですか、デュカ・リーナさま？」

私は、防御魔法を使つていてるので数百度を超えているであろうこの中央の間でも別に平氣なのだが、

「ええ、大丈夫よ。ありがとうフェニス」

と言われた。まあ、このお方は今までにそれこそ何回もフェニックスの転生に立ち会つてきたのだから、要らぬ心配だったとは思つが・

・

「それにしても・・・」

「?なんでしょう?」

デュカ・リーナさまが此方を見て言うので尋ねると、

「貴方も年を取つたわね・・・昔は Baba、Babaと甘えてきて可愛かつたのだけれど・・・」

「ブツー! いつの話ですかつーからかわないでください! そんな大昔の話を持ち出されても・・・」

「恥ずかしい」とこの上ない。

「ああ、『めんなさい』。別に貴方がどういう言ひ方をされてもいいでね。何時の時代でもアレは変わらないなと思つただけで。別に他意はないわ」

と寝てゐる神獣を見ながらそつと言つた。

「はあ。私は幼獣の姿を見るのは初めてなのですが、そういうものですか？」

1000年前や2000年前、フュニックスはこの島ではない場所で転生したという話を聞いたし実際見てもいないので私はそつと言つた。

「そうね。もちろん成獣も何回か見たことはあるのだけれど、やはりあまり変わらないわね」

「成程。それで、そろそろフュニックスを求めた理由を知りたいのですが・・・」

私がそう切り出すと、

「そうね。貴方はアレを護る義務があるものね。いいわ教えてあげましょう」

と言ひながら眠つてゐる神獣へ近づいた。

「ちよつーお待ちくださいっ！」

私が慌てて追いかけると、デュカ・リーナ様は此方を振りむいて言った。

「要はね、私が犯した失敗を取り戻すためなの」

「失敗……ですか？」

「そう、私はこう見えて100歳を超えているのよ……この身体でね」

それを聞いて私は疑問に思つた。闇の魔法による転生の魔法というものがどういったものか詳しくは分からぬが、通常鬼族といつものは齢50を超えたあたりで成人の身体となる（知能、知識は個人差があるが）なので鬼族の身体ならば100歳を超えていると見た目は少なくとも大人でないとおかしい。

「まあ、緊急事態ではあつたの。肉体と同時に魂が消滅させられそうだったというね……」

「……デュカ・リーナ様ほどのお方に一体なにが……」

「それはともかく、そのせいで最も手近な肉体にしようがなく乗り移つたのよ……鬼族でもない人間の肉体にね……」

!?

「で、ですがその角は？」

「ああ、これ？おそらく人間の肉体に乗り移つた際に私の膨大な魔力に全て元の身体のままだと耐えられなかつたのでしうね。いきなり生えてきたわ。それに肉体も年を取らなくなつたしね。ただ・・・

・・

ロストマジック

「それ以上は仰らなくて結構です。人間の肉体、ということを聞いて貴女の目的が何となく分かりましたから……」

「多分、貴方の考へている通りよ。私の目的は不死の神獣フェニックスの血。人間達が太古の昔より追い求めてやまない火の鳥の……不死の秘薬と呼ばれるその血……」

そう言つとテュカ・リーナ様は寂しそうに笑つた。

（）（）

ガギインッ！

間一髪だった、か。

俺は今にもミシルの脳天に振り下ろされそうだった大男の透明な剣を何とか受けとめ、押し返した。

「・・・すまない、助かった・・・」

「貴様、何故！？」

ミシル、大男が俺に言つた。俺はミシルへ

「いひつて。それより変わらうか？こいつのほうが牛面よりは楽しめそうだ」

と大男を見ながら言つた。大男は、

「なつ…やつはつ？」

と、先ほどまで俺達が戦っていた場所を見たが、

「居ないと……？」

「ああ、胴斬りで真っ一についたら光って消えたぞ？お前ら鬼族は死ぬと消えるものなのか？」

「そんなわけがあるかっ！・・・おそらくは、召喚魔法の特徴か・・・やつめ、さんざん偉そうに言つてこの様か。いや、デュカ・リーナ様への文句になりうるのでそれは言つまじ・・・それよりも、この場をどうするかだ・・・私にこの人間を倒すことができるのか？先ほどの得体の知れないプレッシャーは何だったのだ・・・デュカ・リーナ様も私では足止め程度しかできないようなことを言つていたが・・・いや、いくらあの方とはいえ私の実力を完全に見切っているわけではあるまいが・・・」

大男が何かぶつぶつ言つていた。

独り言を言つてゐるつもりだろうが全部聞こえているぞ。といふか独り言多いなこいつ。

「で、どうする//シル？」

「いや、助けてもらつて何だがこいつは私にやらせてくれ

「要らない世話だつたか？まあ、多分その剣で防いでただろつたが一応、な。じゃあ、俺は離れて見とくよ」

実際俺が防いだときミシルは剣を構えていたからな。俺が何もしなくても死ぬとは思えなかつた。

ただ、それなりに強いと思つていたミシルが追い込まれていたんで少し焦つただけだ。

俺は邪魔をしないよう先ほど戦つていた場所あたりまで下がつた。と言つても10mぐらいしか離れてないが。と、ミシルが叫んだ。

「ここまで、ぶつぶつ喋つているつ！ 行くぞつ、ジン・ガトウ！」

「はつ！ 奴は何処だつ！」

ジン・ガトウと呼ばれた大男が我に返つたよつに言つた。  
俺を探しているのか？

「貴様の相手は私だつ！ 他の誰にも邪魔はさせん！」

それを聞いたジン・ガトウは、

「ほつ、 そつか。 ならば今度こそ、 貴様を殺してやろつ。 その後であいつだ」

俺のほうを一瞥して、 手にした透明な剣の切つ先をミシルに向けた。うん、 そういうことはとりあえずミシルを倒してから言え。

「御託はいいつ！ 今度は貴様を貫くつ！」

ミシルが言つと同時にその身体と剣が淡く光りだした。 オーラを剣と身体に集中させている。

俺がついさつき教えたオーラの闘法をもうあれだけ使いこなしているのは、 よほど鍛練を積んでいるからだらう。 ただ・・・

さっきまでは使っていなかつたのか？それとも、使う気がしないぐらい戦意がなかつたのか？

俺はミシルを見ながらそんなことを思つていて。そして、ミシルが剣と全身にオーラを集中させきつたのか、

「行くぞっ！」

と、ジン・ガトウと呼ばれた大男に斬りかかろうとした。その時、

島が、揺れた。

（）

最古にして最強の鬼族と謳われたデュカ・リーナ様が、何故神獣が転生したばかりのこのタイミングで火喰い島に戻つて来たのか、その理由がやつと分かつた。つまり、

「その人間の身体の寿命が近いのですね？」

私が言つと、デュカ様は

「その通りよ。まあ、もつ一つ理由があるのでござれどね・・・」

そのもう一つの理由を聞けばそれは・・・

私ごときではとても力にはなれそうにない話だつた・・・

「でも、安心して頂戴。神獣の血をもらつたらすぐに出でいくから、

貴方達に迷惑はかけないわ」

そういうと、デュカ様は何処からともなく短剣を取り出した。

「デュカ様、それは？」

「ああ、これ？黒焰竜の牙を加工したダガーよ。衝撃にはそこまで強くはないけど、かなりの熱に耐えるわ。大陸の鍛治師にもらったの・・・闇の大陸のね」と言って神獣に近づいたがそこで神獣が気配に気づいたのか目を覚ました。

「ピエツ！？」

目の前の少女の持つダガーに驚いたのか神獣が驚いたように鳴いた。

「いい子だからじつとしていて頂戴。大丈夫。傷つけた所はすぐに治るから」

デュカ様が神獣を手で捕まえてそう言った。熱くは・・・ないのだろうな・・・

シャツ！

と神獣の身体をデュカ様のダガーが一閃し、神獣の身体から血が流れた。

「ピエツ！？」

不死の身体とはいえ痛みはあるのだろう。神獣が大きな声で鳴き出

した。

「『』めんなさいね。でも、」

と、言いながらテコ力様が神獣の身体から流れる血を掬つて、

「貴方の血が私には必要なの」

と、その血を口に含んだ。

「あら？ 何ともな・・・ウ、ウアアアアアアアアッ！」

デュカ・リーナ様が何か言いかけ・・・苦しみました。  
そして大きな輝きと共に島が揺れた。

（）

なんだつたんだ今のは？すぐにおさまったが・・・  
聞いた話じやこの島の奥のほうには火山があるらしいが、今は活動  
していないアズトが言つてたが・・・  
火山の揺れじやないのか？

俺が今の揺れについて考えていると、

「な、この膨大な魔力は・・・そつか！」

ジン・ガトウがミシルとの戦いをそっちのけで門の向いの方を見  
ながら何かに気づいたように驚いていた。

「魔力・・・だと？ 貴様何を言つている？」

ミシルがそんなジン・ガトウの態度を訝しんで聞いた。

「貴様ら人間には分からぬだろうが、私が今感じている魔力は丁度神獣が居るあたりだ……」

と、何故か透明な剣を納めた、いや消した……？

「ほう・・・それで、何故貴様は剣を納める？」

と俺と同じ疑問を覚えたのかミシルは警戒を解かないままジン・ガトウに尋ねた。

「なに、ここで私が戦う意味が無くなつたというだけだ

と、ミシルから少し距離を取るように離れた。

「戦う意味だと？」

「ああ、危険を冒すのは私の望むところではないからな。貴様ぐらには殺してもよかつたが……」

と、ちらりと俺のほうを見て言った。

「忠告しておいてやるが、貴様らはもつ島から出たまうがいいぞ？　どつせこの島の神獣は目的のモノとはちがうのだろう？」

「そりはいかんつー私はあの女を倒すつー！」

ミシルが言った。

「身の程知らずが……自分でも分かっているのだろう? 貴様の剣では決してあの方に届かないということを」

「ぐつ! それでも……仇が居る場所が分かつていておめおめと引き下がれるか! 」

「ふう。そこまで言つなら止めはしない……どうせ無駄だらうしな。私は引かせてもらひ! 」

「待てつ! 貴様は逃がすか! 」

「ふつ、さりばだ。ブリーズ吹雪! 」

ジン・ガトウが叫ぶと、辺りが急に吹雪に覆われ前が見えなくなつた。

吹雪が晴れるとそこにジン・ガトウの姿はなかつた……

「くつ! あの女に続きましたしても……」

ミシルが悔しがつていた。  
俺は近づき、

「まあ落ち着けよ、ミシル。とりあえず撃退した、と思えばいいんじゃないかな? 」

「トウヤ……そう……だ……な」

俺が声をかけた途端ミシルが倒れた。

- ・・・ 多分オーラの使いすぎだろ。怪我も多いし、あれは加減が難しいからな。

さっきのオーラ量を考えれば捨て身でオーラを集中させていたのは分かつてた。あの剣が当たればジン・ガトウという大男程度ならおそらく倒せていた筈だが、奴が途中で逃げてよかつたのかもな・・・

・ 続けてたらミシルもおそらく無事ではすまなかつただろうから・・・

「それにしても、魔力・・・か」

さつきジン・ガトウが見ていた方向を見ながら俺は呟いた。

島が揺れたあと、ジン・ガトウがそう言ったとき俺もその方向を見てみたが、確かに何となく嫌な禍々しい雰囲気を感じた気がしたが、あれが魔力つてやつか？  
だとしたら・・・

「ミシルさんっ！トワヤさんっ！無事ですかー？」

敵が居なくなつたと判断したのだろう、俺たちの戦いに巻き込まれないために他の倒れている者やレンジのおっさんを連れて数百m後方の森あたりから様子を窺つていたアズトがこちらに駆け寄りながらそう言った。まあ、多少のとばっちりは傍にネクが居るから大丈夫だったとは思うが。

「ああ。いや、俺はともかくミシルはしばらく休憩が必要だろ。オーラを使い果たしているからな」

傷のほうも致命傷じゃなさそだから、少し寝たら回復するだろ。オーラによる身体強化は治癒力も活性化される。

「そ、そうですか。ではこの辺りで休憩しましょうか？」

「そうだな。それでミシルが回復したら……」

「ええ。先に進みまー

「他の奴らと合流して島を出る」

「しょう・・・ええつ！？」、――ここまで来て何故ですか？」

「いや、な。一つには目的がほぼ達成されたということだ。当初の目的であるこの島が光った原因ってのは、鬼族の奴の話から判断するにほぼ間違いない神獣のことだわ。なあおっさん？」

傍で聞かれて、ソジのおっさんた話を振ると、

「ああ。小僧の言う通りだ、俺はそう聞いた。神獣フェニックスが居るとな。だからアズト、お前の大元の依頼主にそれを報告し一度帰り、もし再度くるなら出直すべきだろ。神官を連れて、な」

「で、でも神獣はともかく鬼族が実在したといつ」とは特殊なモノなどもあるかもしませんが・・・」

「ここまで来たら諦めきれないのかアズトが粘つて言つ。

俺は、

「確かに何があるかもしないけどな。ただ、これ以上進むのは危険が大きすぎる。ここまで何とか来れたが、これから先はまだ強いやつが出てくるかもしれない。さつきいきなり消えた奴とかな・・・どちらにせよ俺たちは歓迎されてないから、間違いなく襲われるしな。もしこれ以上進むなら神官は別にしてもそれなりの戦力が居ると思うぞ?」

と説得を試みた。

「・・・確かにそうですね。ここまで進めたのもトウヤさんの力に因るところが大きいですしね・・・そのトウヤさんにそこまで言われたら・・・」

と、アズトが諦めたように言つた。

そして道具袋から出した狼煙を空に向けて上げた。

## 第18話「火ノ鳥」（後書き）

「意見」感想あればお待ちしております。

## 第19話 得たモノ

（）

最初に狼煙に気づいたのはレビュアスの男性の一人だった。

「リシナ殿。あれを」

と、アリナやユリナと談笑しながら歩いていた私に声をかけてきて上空を指差した。見ると、薄紅色の煙みたいなものが立ちのぼっている。

「？あれば、何でしょ？？」

何かこの島特有のものかと思い私は首を傾げた。

と、横に居たアリナが

「あのねえ、師匠・・・最初に班分けするときに決めたじゃない。何かあつたときは変わった色の狼煙を上げるって。誰の班かは分からぬけど、何かあつたからあそこに集合つてことじゃないの？」

と、呆れたように説明した。・・・だつて忘れてたのだからじょりがないじゃない。

「も、勿論憶えていたわよ。ホ、ホホホ」

誤魔化すように笑つたがアリナの私を見る目が妙に冷たい気がした。私の威厳のため、

「目測ですが、ここから凡そ2～3？ぐらいでしょうか？出発点は違つても意外に近づくものですね。

では、あの狼煙に向かって行きましょう！」

強引に話をまとめ皆を促した。

・・・何故私はこうも忘れっぽいのかしら・・・?

（）

「つまり、だ。ガトウが感じたと言うように、フェニックスの血を吸収したデュカ・リーナ様自身の魔力とフェニックスの血中の魔力が融合し、かつてない膨大な魔力が発生した。その結果、それに反応した火喰い山の地盤が一瞬揺れた、という推測ができる。火喰い山は元々魔力のエネルギーを吸収、放出するものだからな。ただ、現在は死火山だから爆発には至らなかつたのだろう」

回復の間に戻つた私は先ほど起こつた揺れについて皆に説明した。ガトウもかなり疲弊した様子で戻つて来ていた。侵入者と戦つていただけでそこまで・・・?と思ったが、それだけではないだろう。他者の魔力を見ることはできない私ですが、先ほど目の前で膨れ上がりしていく光の奔流を視認できたのだ。

今、境の門から得意の氷魔法を駆使して最高速で侵入者から逃げてきたガトウなら多少離れていても、先ほどのアレを感じたことどう。奴は他者の魔力量が分かるからな。戦いの疲労だけではなくアレにあてられたというわけだ。

「そ、うか……いや、そ、うだとは思つたから私もあれ以上勝敗の不確かな戦いをしたくなかったので、こいつして帰つてきたわけだが……」

「・

ガトウが気まずそうにさう言つた。やはりな。

ロナンが、

「まあ、俺もガトウにとやかく言える立場じやないしな……」

と、言いつらうに言つた。単純に戦闘のみならばこの島で1、2の実力のこの2人がさう言つとは……

「……それにしても。今回の侵入者はよほど腕が立つのだな」

私がさう言つと、

「ああ、4柱全員でも勝てるかどうかは……とは言えデュカ・リーナ様が居らつしやるので問題はないだらう……フェニース？ そういえばデュカ・リーナ様はどうぢらへ？ 先ほどこの辺りに感じた魔力を今は感じられないが……」

ガトウが私を見ながら言つた。期待に背くようだが、先ほどやりとりを伝えておくか……

「そのことだがな、ガトウ。デュカ・リーナ様はすでにこの島にはいらっしゃらないのだ……」

}{}

突然の目眩が眩むほど輝きが消え、神獣とデュカ・リーナ様が居た  
場所がようやく見えるようになつたが・・・

「ふう。何事も起こらないかと勘違いしそうになつたわ」

元気がなくぐつたりしている神獣と見た目は特に変わっていないよう見えたデュカ・リーナ様が立っていた。

「デユカ様、それは？」

「それ？・・・ああ、これね。おそらく魔力が増大したからでしょう。ようやく元の身体、それも全盛期並みの魔力を取り戻せたのね」

「といつ」とは、不死の身体にもなつたといつとでしょうか・・・・・?

「さあ？ それは分からぬわね・・・ そうだわ、フェニス。 私に全  
力で攻撃をして頂戴」

「わ、私がですか！？」

「そう。貴方の魔力は中々のものだから、防御や回復の魔法を使わ

「すに生身でそれを受けて身体が再生するか試してみたいの」

「それは構いませんが・・・もし取り返しのつかない」となった  
ら・・・」

「大丈夫。仮に瀕死にまで追い込まれたら、魔法を使うから、死にはしないわ。お願い、自分では試せないの」

「はあ。そこまで言われるのでしたら・・・・・・ハアアアア！」

私は魔力を集中させ、デュカ様へ向けて結界を張つた。これを圧縮して中の対象物を魔力もろとも破裂させるという私の攻撃魔法のうち最も強力なものだ。

「ヌウウウウ！」

「あら？思つたよりもかなり強力なのね。くつ」

結界がデュカ様に向かつて収束し、そして、

バンッ！

・・・結界が弾ける音がした。

「デュ、デュカ様！？」

結界を押し潰した跡を見ると、血塗れになつて倒れるデュカ様の無惨な姿が見えた。

やってしまったかと思つていると、何事も無かつたかのようにデュ

力様が立ち上がった。

「痛たたた。やはり痛みはあるわね。でも、」

と、見る見る内に傷が塞がつていぐ。

「治癒魔法を使わずにこの治りかたなら間違いないでしそう……ついに手にいれたわ、不死の身体を！」

凄まじいものだ。あれで魔法を使つていいとは……と思つたと同時に私では絶対にデュカ様には勝てないと悟つた……

「よ、良かつたですね。これで田畠とやらが達成できるのでは？」

「ええ、そうね。色々とありがとう、フニース。」

「いえ。それでもう行かれるのですか？私もガトウが少し心配なので……」

「ええ、早く手を打たないといけないところもあるから。でも、ジンくんのところはそんなに心配要らないと思うわよ。一応牛くんも置いてきたし、何よりあの子はそんなにリスクを冒さないでしじう？」

と、ジン・ガトウという男の性格を完全に読みきつたことを仰つた。確かに……あの男が自分に無益なことや確實に勝てるかどうか分からぬ状況で戦い続けることはまずないだろう。牛くんとか置いてきたとかとは良く分からぬが。

「・・・そうですね」

「じゃあ、私はもう行くわ。また会えるかどうか分からぬけど、みんな元気でね」

「はい。デュカさまもお氣をつけて・・・」

私が言うとデュカ様は微笑んだ。そして、  
生暖かい風が吹き、その姿が消えた。

（）

私は先ほどのやつとりを皆に説明した。すると、

「つむ・・・何と言つたらよいか・・・私はそんなに計算高そうに見えるのか・・・？」

ガトウが妙に気にしていた。

「そうだな。ただ、やられ心配をしてないと言ひ換えることもできるがな」

一応そつと聞いておいた。  
と、ロナンが

「問題はそこじゃないだろう！結局どうするんだ、侵入者どもはっ！？ガトウの話だと近い奴らはすでに境の門まで来ているのだろう？大丈夫か？」

と、指摘した。境の門を抜け数十分歩けば、途中にこの島の大半の者が住む村がある。そこからこの神殿までは歩いて、7、8時間程度といったところか・・・もし何も知らずに侵入者に手を出す者が居たら、やられる危険性は確かに高い。もっとも、侵入者を発見したら誰かしらは此処まで報告しに来るだろうが。

私は、

「・・・何もしない。というより下手につつかないほうがいいと思うのだが？所詮魔力を持たない奴らだろう。仮に神獣の元へ訪れたとしても何もできはしない。それに聞いた話だと、侵入者の人間は此方から手を出さない限り襲つてこないのだろう？やられたのは勝手にしかけた貴様の責任だ。何が暇潰しだっ」

と、ここぞとばかりに言った。が、

「ぐつ！だ、だがガトウも戦つたじゃねえか！？」

「・・・言いたくはないが、私はデュカ様のとばっちりを受けただけだ。あとは成り行きだな・・・」

ガトウが少し言いにくそうに言った。  
ロナンが、焦ったように

「そ、それなら村の奴はともかく神獣のほうだ！神獣は本当に大丈夫か？」

? 口ナンは何を言つてゐる。

「何が言いたい?」

「つまり、だ。俺が戦つた奴らの1人に得体の知れない術を使う奴が居たんだが・・・その術つていうのがフェニス、あなたの結界魔法みたいなものだつた。魔法じやないような感じではあつたがな。だから・・・」

!!

口ナンの言葉に驚愕した。

「き、貴様! そういう大事なことは早く言えつーましいな・・・だとすると話が変わつてくるぞ。どういう類のものかは知らんが結界めいたものを張れるということは神獣に近づける可能性があるではないか・・・」

やはり、侵入者を何とかするしかないのか・・・?  
と、私が対応を考えようとしたとき、

「ただ・・・」

ノルエルが何かを言いたそうにしていた。

「なんだ、ノルエル?」

「ええ。何と言いましょうか・・・境の門周辺に感じる20程度のこの大きなブラーーナや小さなブラーーナ・・・おそらく口ナンさんやジンさんが交戦した侵入者のものと思われますが、此方とは反対側

へ移動しておりますが・・・？

そのノルエルの言葉を聞いて、この場に居る者が皆首を傾げた。

／＼＼

狼煙を上げて一時間ぐらじ経つた頃、まずリシナの班が命流した。

話を聞いたアズトが、

「そちらも災難でしたねえ。ともあれ無事で良かったです」

と言った。

「いえいえ。この子達も居ましたし、何より頼りになる方々もいらっしゃいましたから」

リシナが双子の姉妹とレヴィアスの男二人を見ながらそう言った。

「そちらのほうが大変だったでしょうねえ。魔神ですか。それに・

ちらりと//シルを見た。

「いえ。何でもありません

と、口をつぐんだ。まあ、アズトがレンジのおっさんや俺から聞いた話を包み隠さず喋つたからな・・・//シルに関しては触れないほうがいいと判断したのだろう。

と、リシナが、

「それにしてもトウヤさん？貴方が倒したといつ牛の顔をした生き物というのは牛鬼おがじゃないかしら？」

俺に言つてきた。

「牛鬼？自分では・・・ええっと、鉄牛鬼と言つていたが。似たようなものなのかな？」

「そう。じゃあ、違うのかしら・・・？見た目の特徴なら伝承に聞く牛鬼かと思つたけれど。似たような種族なのかもしないわね」  
と、伝承にある牛鬼について語りだした。なんでも、牛の頭、鬼の身体を持ち、その性質は残虐非道にしてひどく好戦的らしい。その上突然どこからともなく現れるとか・・・まあ、大体合っているが身体が鉄のように固くなるのはどういうことなんだろう？奴が言つていた「鉄島」に関係があるのか？  
分からないが・・・

「うーん？分からないな。倒したら消えたしな。まあ、鬼族の奴は召喚がどうこう言つてたから、死んだかどうかもいまいち分からないが・・・召喚ということは帰つただけかもしないしな。あつ、銀色の奴はまだ死体がそのままあると思うぞ。帰りに寄つてみよう

「銀色の金属らしきものね。見てないので詳しくは分からぬけど、もしかしたら呪術とかその類の性質のものかもしれないわね・・・出来たら持ち帰つて詳しく見てみたいわ。ね、ユリナちゃん？」

リシナが横に居た双子の妹に聞くと、ユリナは頷いていた。

「へえ。お前そういうの」「詳しいのか？」

俺が聞くと、

「……うん。アリナよりは」

と、自分の姉を見てそう言った。その本人は、

「ま、まあね。あたしはそういう知識とかあまり興味ないから」

ハハハツと、焦つたように言った。

「ネクも詳しいよな？」

俺は昔馴染みの勤勉な姿を思い浮かべながら話を振った。

「まあ、あんたよりはね。でもあの銀色がどういう原理で動いてとかはよく分からなかつたけど……とにかく持つて帰りましょう」

「そうだな。それにしても、風の魔法？そっちも面白そうな相手だつたんだな？」

俺はリシナ達から先ほど聞いた話を振つてみた。  
アリナが、

「そうよー強かつたんだからーでも、あたしも…………」

そうやつて、お互ひの体験した話などを喋つてゐると、もう一つの班であるガルティアのところの副団長率いる奴らが合流した。

そいつらは道に迷つていたらしく、狼煙が上がつて助かつたと言いながらここへ来た。

ガルティアが、

「貴様らはまつたく・・・それでも我が探索団の一員かつ！？」副団長まで居ながらなんという体たらくなーそもそも方位磁石で照らし合わせれば入口から反対側へ・・・」

説教をし始めた。

副団長らしき男がそれを聞いて、

「お詫びですが、キャプテン。道に迷つたには理由があるのです」「理由だと？そんな言い訳をつ！」

「言い訳ではなく・・・その、何といいましょうか、我々が進んでいた森の途中の洞窟でこれの大きな鉱石を発見したのです」

と副団長が手に持つっていた小石をガルティアに見せた。

「これだと。見せてみろ・・・・これはつ！？」

ガルティアが副団長から小石を受け取り眺めていたら驚きの声を上げた。

なんだ？

「まさか、金鉱石だつ？」

「そうです。このぐらい大きな塊が洞窟内に無造作にありました。あまりに興奮した我々は、洞窟から出たとき自分の居場所を見失い道に迷つたというわけなのです」

副団長が手振りを交えながら説明した。両手を広げたぐらいの大き  
な金鉱石の塊だと?  
何万丸の価値があるんだ・・・

「ふむ・・・確か船に手押しの台車は積んでいたな?よし急いで船まで戻るぞっ!」

「待つて下さい!ガルティアさん」

興奮した様子のガルティアを引きとめたのは、やはりといつかなん  
といつか、アズトだった。

「・・・何か、アズト殿・・・」

しまつた、という顔をしたあとでガルティアが言った。

「当然、我々で山分けですよね?」

にこにこ顔をしながらアズトが聞いた。

「・・・・・・勿論だ」

俺達を見まわしながら、渋い顔でそう言った。

こいつ・・・依頼主からの依頼料だけでなく金鉱石まで手に入れる  
とは、相当儲かつたんじやないか?

金鉱石といつのは、言わざと知れた金の材料でその希少性からかなりの価値がある。火の大陸では主なところで最も価値のある通貨の10000丸<sup>がん</sup>や、宝剣、金持ちの家の装飾などに使われている。

その後、一旦車を取りに船に戻った俺たちは副団長の案内で金鉱石の塊がある場所へ行き、それから銀色の死骸<sup>?</sup>も回収して島を後にした。

／＼＼

／？？？／

生暖かい風が吹いた、と思つたら誰かがすぐ其処に立っていた。それに気づいた自分は隣に立つ相棒へ声をかけた。

「お、おい。誰だ。お前の知り合いかつ！？」

自分がそう言つと、その黒いローブを着た存在に今気づいたのか相棒は、

「ん？・・・なつ！？誰だつ、貴様！？」

と焦つた声を出した。

見てみると・・・ヒト・・・？

いや、ヒトの身でここに来れる筈がない・・・と思い直した。

「貴様、何用だ！？」これが我が主の居城と知つてきただのかつ！？」  
自分も尋ねてみた。  
すると、

「ええ、勿論。用事があつて來たの。預けていたモノを返してもら  
いにね・・・」

・・・やはりヒトトらしき少女の声でその来訪者はそつと云つた。  
だが、

「預けていたモノだと？貴様のようなヒト如きが我が主に何をお貸  
ししたというのだつ！？」

自分がそつと云つて、そのヒトトらしき少女は

「やうね・・・正確には物じやないかしら・・・」

自問していた。

「うーん。屈辱、敗北、・・・そして消滅。つていうところかしら  
ね、返すものは。まあ、それでも私に与えた割合としては4人の中  
で一番少ないほうだとは思うから、少しぐらいは手加減してあげま  
しょうか」

? 独りで何を言つている?

「どうこうことだつ！？」  
たまらず聞いてみると、

「あらあら、人狼の知能じや理解は難しかつたかしら・・・平たく  
ワーウルフ

言うとね、殺しに・・・滅しに来たの。貴方たちの主人、アルカードをね」

と、微笑みながら同時に尋常ではない殺氣を身に纏つて少女が言った。

「ぐつ、ぐつ・・・何故だ!? 貴様はヒトではないのかつ? それも年若い・・・我が主は少なくとも100年はこの城からお出になつてはいな」

と自分は我が主の居城ヴァニア城を見ながら言った。

「そうねのね・・・まあ、此処は闇の大陸から遠いしアルカード如きの実力じや覇権は狙えないか・・・私を倒したあとは引きこもつていたのね・・・」

と、我が主を侮辱した!

「き、貴様! 殺す!  
「ウオオオオオオ!」

相棒と同時にその少女へ襲いかかつた。

「まあ、手始めに全滅させましょうか。ネイルッ!」

少女がそう叫ぶと手に持っていた銀色の杖が巨大な刃に変化し、それを自分と相棒へ無造作に振った。

ズシャツ!

そして、相棒と自分の身体が真つ二つになつた。

自分が最期に見たものは・・・薄く笑う少女の顔の上部に生える灰色がかつた大きな角だつた・・・

「ふむ。やはり発動時間も段違いに早くなっているわね・・・人狼<sup>ワーウルフ</sup>」

と、少女デュカ・リーナは、にやりと口を歪めて城の入口へ向かつた。

第19話「得たモノ」（後書き）

「意見」「感想あればお待ちしております。

## 第20話 縁

スサノオ城城内

「なるほど。まさか神獣とは。何かしら対策を練るべきかの…」

シバ・ウチカネが手元の報告書を見ながら唸つていた。

その報告書とは、2週間ほど前に鬼ヶ島（住民である鬼族は火喰い島と呼んでいたらしい）辺りに発生した謎の光の調査で、鬼ヶ島から近いイグナで中々の敏腕と評判の良い行商人（アズト・ミタラと言つらしい）に依頼料上乗せで依頼したものだ。

大まかな内容は、島への滞在期間3日の間、実在した鬼族3人と出会いアズト・ミタラが雇つた者たちが交戦した結果、これを撃退し、その際の会話で、謎の光の正体は神獣だらうという結論が出た、といつものだ。……いや、何というか雑過ぎるでしょ！だろうつて、何？確認もしてないわけ？

……まあ、所見には鬼族が得体の知れない様々な技を使い、魔神と伝え聞く存在とも出会い、戦力が不足していた、ともあるけれど…

もつとも、完全に依頼達成というわけじゃないから依頼料は大幅に値引きしたけどね、私の権限で。それは仕方ないでしょ、戦利品と言えば実在した鬼族の存在と銀色の金属（動いて攻撃してきたって話だけど嘘臭いしね）だけだもの。

腑に落ちないのは、値切つてもアズト・ミタラが特に食い下がらな

かつたつてことね……報告を信じるならばそれなりに危険な任務だつたのに……（仮に報告内容が虚偽ならば再度警備兵とかに調べに行かせればすぐに判明するからさすがにそれはないでしょうが）何か隠している……？

「それにしても、ヒノカにトゴウか……」

「なんじゃ、姫？ 何か気になるのか？」

シバが、私の呴きに気づいたのか、聞いてきた。

「いえ、ね。そのアズト・ミタラの報告書の中に出でくる調査に参加した人物の名前、というか名字が気になつただけなの」

他のところは知らないが、火の大陸での名字には、それなりに意味を持つものがある場合がある。もちろんただ付けただけというものもあるが。

255年前に私の御先祖が大陸を平定するより前からこの大陸には象形文字つまり文字そのものの形が意味を為すという所謂、火語が共通の文字として使われているが、その文字はかなり昔には人名として使われていたそうだ。

例えば現代の名字を火語を当てはめてみると、シバのウチカネは（打鉄）ガロウのサイハは（碎刃）というふうになるだろうと思つ。（ちなみに初代スサノオというのは名字ではなく名前がそれのみだつたが平定を記念して、後の世代へ名前を繋げるという目的で名字扱いへ変更したと、我が家のみに伝わる伝記に書かれていた）だからヒノカというのは、火ノ牙？トゴウというのは、斗剛？と置き換えることができる。

何故この文字が不意に浮かんだのか？これも我が家のかみの伝記それも初

代霸王のスサノオの手によるものだが、その中の「大陸平定貢献の武人」のところの自らの最強の仲間、三大英雄という箇所に火語で、火ノ牙、斗剛、羅義、という文字があったからだ。

これを現代風に読むと、ヒノカ、トゴウ、ラギ、と読めないこともない。

まあ、確認のしようもないが。ただ、もしそうだとしたら私を入れてかつての最強の仲間同士だった者の子孫が3人も居るというのが集まれば何だか大きなことができるような気がする。全大陸統一とか・・・まあ、夢物語ね。

「それよりも儂が気になるのは、神獣をどうするかじやが・・・」

シバが真面目にそう言った。正直私は政務よりも直接その島に行つてみたいのだが・・・

「神官と警備兵の混合部隊を作つてみるとこいつのは?」

行きたい気持ちをおぐびにも出さず、とりあえず私も真面目に提案してみた。

「つむう。今はのう・・・」

「まあ、そうよね・・・」

言つてみただけなので却下されるのは勿論分かっていた。何しろ今は・・・

「神剣はまだ見つかる日処が立たないの?」

カグツチの神官は全て神剣探しに奔走しているからだ。火の大陸で

は神剣にしろ神獣にしろ神と名のつくものや聖剣や聖獣と聖と名のつくものは全て神官を通じて探したり取り扱ったりしている。だから魔物が強力になつてきている今、その要因が神剣にあるのでは?と先週の報告から推測した私たちは神官たちを全て大陸の南のほうへ調査させに遣つている。

「まだじゃな・・・」

「そうよね・・・じゃあ、水の大陸のレ、レビアス国?の神官、みたいな立場の人には頼するというの?」

「・・・姫。確かにカグツチとレビアス国は交流があるが、そもそもレビアス国に神官が居るかどうかも分からんのだぞ。それに神獣の力を別の大陸の者に奪われる可能性があるので、どちらにせよそれは無理じゃな・・・」

「そうか。そうよね・・・じゃあ、とりあえずこの件は保留ね。神剣が先だわ」

「そうじやな。まずは神剣じゃ」

と2人して頷いた。

（）

（）

「この魔力・・・!?

「この魔力・・・!?

城の一室。

そこでは1人の男が咳き、何かに驚いていた。

この男、名をアルカード・ブラッティ<sup>ウルフ</sup>と<sup>ワーウルフ</sup>言い、数千年の時を生き人狼族の長をしている。この男、元々人狼<sup>ワーウルフ</sup>ではあるが、生まれ持つた魔力と特殊能力、その野心、知能、から人型の姿のまま人狼一族を統一し、此処（血沸き島）に自らの領土、居城を築くにまで至った。だが、生まれ持つた強さも外界に上には上が居る、と悟った時よりそれを行使せずにもて余し、持っていた野心も薄れ居城に閉じこもつていた。

そう、100年ほど前に自らも参加した戦いの際に他者の強さを悟った時より・・・

ドンッ！！！

アルカードが何かに驚き咳いてから間もなく自らが居る部屋の扉が噴き飛んだ。

「なっ・・・！」

驚いて扉が元々あつた場所を見るとそこには、

「久しぶりね。いや、この姿では初めましてと言いましょうか、ワンちゃん？」

と、異常な魔力を身に纏つて立つ見覚えのない顔の人らしき少女がそう言つた。

以前よりもこの城の主の小心者ぶりに磨きがかかるたのか、城に正面から侵入しただけで数百体の人狼<sup>ワーウルフ</sup>が配置されていた。そして、おそらく亞人特有の勘なのか、こちらの姿を見るや害を為すものと思われ1体の例外もなく襲いかかってきたが（勿論全て返り討ちにした）。それとも、この城の小心者の主、アルカード・ブラッディから見知らぬ者は全て排除しろとか言い含められていたのかも知れない。かわいそうに。仕える主を間違つたのだろう、結局全滅したのだから。

それで、この城の最上階の方に以前感じたよりも多少強力になつた魔力を感じるが・・・おそらく田的の者はそこに居るのだろう。そして、その者が居ると思われる部屋の扉を無造作に噴き飛ばした。部屋の中の者が、

「なつ・・・!？」

と驚いていた。私は、

「久しぶりね。いや、この姿では初めましてと言いましょうか、ワンちゃん?」

と言つた。するとアルカードが、

「き、き、き貴様はだ、誰だつー? ニンゲンかつー? 何をしに此処に来たつー?」

と私に言つた?・・・ああ、成程。  
何故そんなことを言われたか考えた私は納得し、被つていたフードを脱いだ。

「き、鬼族だと！？」

私の額にある角を見て判断したのだろう、そう言った。

「……ま、まさか貴様は奴の手の者かつ！？それで私に復讐ふしゆをしにきたとでもつ！？」

「奴？誰のことを指しているのかしら。それに復讐ふしゆ？ワンちゃんは何か復讐されるようなことをしでかしたのかしら？」

「ワ、ワンちゃんだと……？今までそのようなふざけた呼び名でこの私を呼ぶものは皆殺しにしてきたが……貴様は、鬼婦神きふじんの縁ゆかりの者ではないのか？」

「うーん……人狼族ワーウルフの中では飛び抜けた知能を持つアルカード・ブラッディと言つても所詮はワンちゃんか。魔力の波動の種類とかは分からぬものなのね……それに鬼婦神きふじんか……その名前も随分久しぶりに聞いた気がするわね。まあ貴方の言つことはそれほど間違つてはいないと言えば言えるわね。鬼婦神の縁の者と言えば私ほどの縁の者は他に何処を探してもいないでしようからね……」

「どういづ、ことだ？」

「どういづもこういうも簡単な話よ。私がその鬼婦神、デュカ・リーナそのものだというだけ」

「……？そんなバ力な……奴はあの戦いで消滅したはずだ……」

「ええ、そうね。貴方が、貴方達がそう思つたのも無理はないと思うわ。実際私の以前の肉体は貴方達のおかげで消滅してしまったの

だから・・・でも、中身はまだこの世に留まっていた。それであの時近くにいたこの身体を持つ少女に乗り移つて転生したというわけ？分かつたかしら、ワンちゃん？」

「以前の肉体・・・転生・・・」

「それと、ワンちゃん？貴方はもう一つ正しい事を言つたわ

「な、なに？なんのことだつ」

「何をしに此処に来たか・・・貴方が先ほど言つたよつた・・・  
・復讐よ」

私は言い、最大限に魔力を集中させた。

「ちつ！グオオオオオオオオオオオオオオオオツ！――！」

アルカードが吠えながらその身体を人型から人狼型へと変貌させていく。  
そして、

「あらあら。小心者で仲間も居ない貴方の割には頑張るわね？いきなり切り札を使つてくるなんて」

その手には刃が赤く染まつた剣が握られていた。

「貴様を消すのに躊躇いなど不要つ！――！」

「そう。あの時も不意をつかれたとはいえその剣に吸われた分は結構大きかつたのよね・・・」

アルカードが持っている剣は、吸血剣<sup>ドレインブレード</sup>と言い、その特性は斬った対象物の血、血中に含まれる魔力を吸い取り、その魔力は使い手に柄から吸收される。100年程前に私は最初にこの剣で斬られ思つた以上に魔力が吸い取られた。アルカードが生まれつき持つていた牙を加工したもので、人狼型にならなくても使えるというメリットがあるため、自らの牙を折つて作った1点物だ（そもそもアルカードが人狼族の中でのし上がつたのには、知能などよりもこの牙の持つ特性に因るところが大きい、と思つてゐる）

「けど、今はこれがあるのよ。ネイルッ！」

嘆きの杖の剣形態で吸血剣<sup>ドレインブレード</sup>とアルカードを横薙ぎにした。だが、

ガギイイ！

両手持ちにした吸血剣に受け止められる。

「へえ。貴方強くなつた？前は魔力が弱つた私にすら噴き飛ばされてたのにね」

魔力が全盛期並みにある、私のネイルを受け止めたので素直に称賛した。

そつして剣の押し合いをしていると、

「・・・この100年このアルカードが何もしていなかつたと思つなよつ！」

「・・・でも、この城にずっと居たのでしょうか？」

「フンツ！確かにそうだが、同胞の生贊を糧に私は強くなつたつ！」

「

「・・・・・貴方、同じ種族を斬つたの・・・？」

「そうだつ！私とて、ずっとこのまま此処に留まつてはいるつもりなどないつ！もう一〇〇年、二〇〇年かけて魔力を高め、いざれば闘に打つて出るつもりだつ！」

「・・・・そう。一応野心は捨ててなかつたのね・・・」

「当たり前だつ！なに、もう少し魔力を高めればいづれは奴らにも匹敵するほどの強さになるはずだ・・・そうなれば」

「残念だけど、それは無理ね・・・」

「なんだとつ！貴様如きに何が分かるつ！」

「分かるわ。だつて、貴方は今日此処で死ぬのだから。ヘルバースト獄裂つ！」

バアアーンツ！！

私は杖の先に魔力を集中させ強大な魔力を破裂させた。

嘆きの杖は使い手の魔力を吸い取りより強力になる。その上吸い取つた魔力を増幅させ放出することもできる。ただ、魔力の消費量が大きいのでそれなりに強い相手ぐらいにしか使わないが・・・

「グハアツ！」「こんな・・・」

左半身が噴き飛んだアルカードが此方を見て怯えていた。

「あらあら、その様ではもう戦えないかしらね？ワンちゃん、かなり強くなつたはずなのにねえ」

「ま、待てっ！た、頼む助けてくれっ！」

「へえ。命じこ？・・・やうね、3べん回りにワシと鳴こたら考え  
てみよウかしらね・・・」

そう言つと、アルカードが激昂した。かに見えた、が

3回つて鳴いた。

「アーティストの才能を引き出すためには、アーティスト自身の才能を尊重する必要があります。」

お腹がよじれそうになつた。

に見えた。

「はあ、はあ、可笑しかつた」

「た、頼む。貴様、いや貴方の言う通り回って鳴いだら? ゆ、許してくれつ! そ、そうだ! 私を仲間にしてくれつ! 奴らと共に戦おうではないかつ! ?

再度、懇願してきた。だが私は、

「仲間ねえ・・・私が言うのも何だけどその身体で?」

「こんなもの、部下を何体か斬り魔力を吸えれば元通りに再生するつ  
！頼むっ！私を仲間にしてくれっ！」

「・・・ふう。分かつたわ」

「本當かつ！？」

「！？ち、違うだつ。そ、そ、それに何故魔力を高めて・・・？」

・・・自分のために同族を殺すような者はいつか必ず裏切るわ・  
・・・そんな者を仲間にするわけにはいかないといつことがわかつたの・

「ま、ま、まて、た、頼む・・・。」

その言葉を無視して私は手に魔力を集中させた。

「さよならね、  
獄炎つ！」  
ヘルブレイズ

「お、鬼いつ！ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

アルカードは断末魔の叫び声を上げた。

カラソツ

アルカードを塵になるまで焼きつくしたが、吸血剣は燃え尽きなかつた。よほど今までに血や魔力を吸い取ってきたのだろう……同族の……私はそれを拾い、

「ふう。まずは1体か……思ったよりも魔力を消費したわね。私一人で残り全員はきついかな……」

他の復讐すべき相手の顔を思い浮かべて嘆息した。

「やはり、駒は必要よね。あの人間とかはどうかしら……。  
・・それにしても、鬼つて……今更よね……」と、先日会った人間の顔を思い浮かべ咳きながらその場を後にした。

（）

あの島から戻つて1週間……俺はアズトがレビュニアスへ行く準備を整えるのを手伝つていた。いや、レビュニアス滞在中の生活費を全部負担するとか言われたら、ねえ……それにあの島の調査の報酬や金鉱石で余程儲けたのか尋常じやない量の仕入れをしているところを見ると、あの島での報酬みたいに手伝い費や用心棒代も上乗せしてくれるかも?という甘い期待もある。

ちなみにあの島の最低報酬は1人3000丸だつたが、実際もらつたのはその10倍近くあつた……29500丸も……何故か諸経費で500丸引かれていたが、そこは抜け目がないなと感心した。まあ、金鉱石を山分けしろと言い出させないため、ということもあるだろうが。それでもアズトはいくら儲けたんだ……推測だが数

百万丸ぐらいか・・・?まあ、別に俺はこれで数カ月何もしなくても暮らしていけるから良いが。

と、ほくほく顔で港に停泊するアズトの船（速度は大分落ちるが結局ガルディアの船で牽引して行くことになつたらしいのでこれに荷物を積んでいく。おそらくだがアズトが予想より遙かに仕入れ物の予算を増やしたので、また相当儲ける気で・・・）に荷物の積込をしていると、

「トウヤさん、ミシルさん、そろそろ休憩にしまジョーー」と、俺の雇い主のアズトが声をかけてきた。

「ああ、そうだな。腹も減つたし」

俺が言つと、

「了解した」

ミシルも手を止めた。

「あ、御飯はネクさんが戻つてからですよ」

何つ！ネクの奴まだ帰つてないだと…どうしてくれる！俺の腹…

あの島から無事に帰つたあと、俺、ネク、アズト、ミシルはイグナを拠点とし、ガルディアの国へ行くための準備をしている。レンジとリクオのおっさんは暫く休業し、ある程度休んだらまた仕事を再開するそうだ。リシナと双子の姉妹は帰つて修行をしたり過去の文献を探したり（鬼ヶ島にまつわる文献らしい）するらしいのでこれ

もまた暫く仕事は休業するとのこと（まあ、全員予想外に報酬があつたからな）

ガルディア率いる探索団はアズトがなるべく多くの種類の火の大陸の物を持つて行きたいので10日は準備期間をくれと頼んだところ承諾し律儀にイグナの町に滞在して待っているらしい。つまりあと2～3日で当分この大陸に帰つてこれなくなる・・・飯は何を食い溜めしておくか・・・持つていぐ食い物もそろそろ考えておいたほうがいいな・・・

と、空を見ながら物思いに耽つていると、

「はあ、はあ、はあ。た、だいま！」

「ああ、当たり前だつ！お前が帰つて来なかつたら俺の飯はどうなった。  
俺は、

「ネク、心配したぞ！」

「えつ？トウヤ・・・そんなにあたしのこと？」

「ああ、当たり前だつ！お前が帰つて来なかつたら俺の飯はどうなるつー！」

「・・・・・・・・・・」

何かすゞしい冷めた目で見られた。

「ま、まあネクさんも戻つて來たことですし、御飯を食べに行きま  
しょうつー」  
「おーーー！」

「了解した」

「……………」

何故かネクがまだ冷めた目で俺を見ていた。

（）

「ああ、あつたわ。そつそつこれですよ、この表紙ですよ」

私は、鬼ヶ島（本来は火喰い島と言つりしい）から家に帰つて来て約1週間、トゴウ家の書庫で昔見た憶えのある書物を探していた。もつとも見たのは子供の頃録に文字も読めずに絵が描かれていたのでぱらぱらと眺めただけだったと思うのだが。

双子の弟子に稽古をつけたり自らの修行の合間に時間を見つけてはその鬼ヶ島について書かれた物を探していたのだが、ついに見つけた。

「えつ？これは……」

その書物を作成した人に絵心があつたのか、見覚えのある表紙の書物を見つけて少し興奮していたが・・・

「島の絵・・・？」

その書物の表紙には、つい数日前に見た鬼ヶ島の入口辺りの特徴あ

る形の絵が描かれていた。

「といづことは、これを作成した人は鬼ヶ島に行つたことがあるのかしら……」

仮に行かなくても絵は描けるかもしれないが、おそらく実際に見ないとここまで細部を上手く描けないのでないか……と、思いながら頁を捲っていくと、

「・・・記録？」

そこには、約一ヶ月に及ぶ鬼ヶ島の滞在記録が書かれていた。半ばあたりまで読むと・・・大まかな内容は、作者が持つ自分の特殊な能力を見込まれ誘われてその誘った人物と共に未知の場所である鬼ヶ島へ行き、そこに住む鬼族と出会い戦つた、というものだつた。

「まあ、あの鬼族も言つていたものね。以前にも人間の侵入者が居た、と。こういう記録があつても不思議じやない・・・か」

だが、と疑問に思う。

あの鬼族と出会い戦つて無事に帰れたのか？と

確かに侵入者は全員倒したというようなことを言つていたような・・・

「まあ、創作の可能性も・・・」

だが、この作者が交戦した鬼族の名前にジン・ガトウという文字を見つけたときそれはない、と考え直した。の方達が戦つた鬼族がその名前を名乗っていた、と聞いたからだ・・・

さらに読み進めると、

「戦つて引き分けた結果、互いの領土へは不可侵の約束・・・もし、これを破つた場合は武力行使・・・そんな話は初耳だわ・・・」

これは何の話でしょう？本当にあの島で起こったことなの？一体いつ頃書かれた書物なの？

と、作成日時の頁を見てみると、

「歴元年・・・？」

つまり、スサノオが大陸を平定した年？254年前に書かれた物？

さらに最後のほうにはこう書かれていた。

「・・・・我々はその島に住む最高齢の鬼族と話した時に驚くべき話を聞いた。なんでもこの島に住まう住民の祖先を辿れば我らの大陸と源流を同じくす、と。つまりこの島の鬼族の最古の者は火の大陸の人間だったのではないかと。もっともかなりの年月、それこそ数万年前まで系譜を遡つて調べなければ立証は不可能だが。ただ、そう考えれば我々人間と亞人と呼ばれる異形の者たちがいつの日か手を取り合える時が来るのかもしねない」

！？

鬼族の祖先が元は人間！？

そして、その書物は最後にこう締め括られていた。

「私は大陸平定に貢献した、と自負している。その私の人と異なる力を後の世に残すため、大陸の王となつた我が友のため、愛しい妻、そしてまだ見ぬ我が子のため、我が妖術の体得方法運用方法を巻物に別に記した。妻よ。身重のお前に我が儘ばかりですまないがその巻物を私の父に届けて欲しい。私はおそらく帰つて来れないだろうから・・・だが、私は行かねばならない。闇に墮ちた我が友を救うために。

最後に・・・幼い頃からこの力により迫害されてきた私に人として生きる悦びをくれてありがとう・・・最愛の妻へ・・・愛を込めて

斗剛  
一弥

と・・・

## 第20話～縁～（後書き）

「意見」感想あればお待ちしております。

## 第21話 三強

／＼＼

／？？？＼

とある大陸。

1人の漆黒の大鎧を身につけた男が崖の上、その端に建つたモノを眺めていた。

「早いものだな・・・・・・250年とは・・・」

その男はそう呟き、建つたモノ・・・石の墓碑を眺めながら過去に想いを馳せていた・・・

と、そこへ

「お館さまっ！」

その男に後ろから声をかける者が居た。  
男は振り向くと、

「どうした。何があつた？」

と、自分を呼んだ者へ声をかける。  
よほどのことがない限り、この1日1回行つかつての友との対話を邪魔するな、と言つてあるからだ。

「はつ！大切な時間を邪魔してしまい申し訳ありませんが火急の事態ですっ！」

と、これも漆黒の鎧を身につけた自分の部下がそう言つたのでその男は僅かに首を傾げた。

「火急の事態だと？魔導王の輩か……？それとも闘武のほうか……？」

同盟は一応組んでいるが今も自分と大陸の霸権を争っている2者の顔を思い浮かべそう言つた。が、

「いいえ、ちがいます！（血）のほうですっ！」

血とは、男がかつて一度共闘し同盟を組んでいる者が住む場所の略称で、本来は（血沸き島）といつ。

「ほつ・・・・ブラッディが攻めてきたとでも言つのか・・・？」

もしそうなら腑に落ちない、と男は思った。

何故今になつて、ということとあの程度の強さで、という疑問のためだ。

「いえ、違いますっ！あの島に放つていた偵察からの報告によりますと、数日程前アルカード・ブラッディ卿とその居城ヴァニア城内の人狼族が何者かに襲撃され殺されたそうですっ！」

「殺された・・・・ブラッディがか？」

「はい。その偵察の者が言つたのは、どうもヴァニア城付近が閑散と

しているので気になつて入つて見たところ、中に居る人狼の者は全滅し、王の間には戦つたような跡があるとのことでした。プラッティ卿の亡骸らしき者は見当たらないとは言つてましたが……

・・・いくら死体がないとはいへ、奴が逃げられたとも思えない。城内の部下まで皆殺し、という程の手練れの襲撃者の軍勢とは、その襲撃者に文字通り消されたか・・・?

「分かつた。戻ろう。それと、魔導王と闇武の所へ使いを出しておいてくれ。奴らがそのような浅はかなことをするとも思えんが、念のために・・・な」

「はっ!了解しました!」

と部下は走り去つていった。

「それにしても、襲撃者は何が目的だ・・・?あの入狼を消したところで何か利益があるとも思えんが・・・」

男はそう呟き、再び墓碑を眺めた。

「どうやらこせよお前の望んだ平和、といつものはまだまだ訪れそうにないな・・・」

と、墓碑に向かつて話しかけ、踵を返して歩き出した。

・・・墓碑には、

「斗剛一弥 此處に眠る」と刻まれていた・・・

／＼＼

「神官が本屋に？」

飯を食いながら話していると先ほどまで様々な書物を仕入れに行っていたネクがそんなことを言った。

「ええ、神官の正装だつたんで間違いないわよ。何かイグナにまつわる書物を探してたんじやない？」

「ふーん、珍しいな。こんな時期に居るなんて・・・イグナでは今 の時期に何かあるのか、アズト？」

と、日頃主にイグナで活動しているアズトに聞いてみる。

「いいえ。特に祭事はないですが・・・？」

と、言った。

火の大陸の神官は神剣とか神獣などが関わらないときは、基本的に首都カグツチに殆ど住んでいて、大陸内の各集落の祭事に招かれそこでお祈りや厄祓い等をすることもあるが、

「だよなあ。この時期だもんな」

大抵は年の始まりの月、つまり1月に喰ぶはずだ。カリュウ村はその遠さのせいか、1月の終わり頃か2月の始めぐらいに毎年來ていたが、それでも今は5月だ。

「もしかしたら旅行の途中でイグナに寄つただけかもな」

俺が言つと、

「そんなわけないでしょ？いや、旅行はあるかもしれないけど祭事でもないのにわざわざあんな格好はしないでしょ」

と、ネクが俺を呆れたように見て言つた。

「旅行は冗談としても、何処か大陸の南側の祭事とかに行く途中とかじやないのか？」

「うーん。確かにあたしも他の村とか町の祭事の開催時期を知つてるわけじゃないけど・・・」

「でも、此処より南と言えばそれこそお一人のカリュウ村ぐらいしかないですよね？」

アズトが俺とネクを見て言つが、まあその通りだ。そもそもカリュウ村が火の大陸最南端にあるからな。  
ネクが、

「もしかしたら、アズトさんの調査結果から政府が神獣を生け捕りにしようと思つて、神官を此処まで派遣したのじやない？」

言つが、言われたアズトが

「いえ、それはないと思いますよ。イグナの政府の担当の方に結果報告する際に、もし再度島に行くなら道案内などの問題があるので

必ず私に「」連絡下さいと頼んでますが、まだその連絡もありません  
し。それに・・・

「なんだ？」

「いえね。その担当の方は「」言つてたんですよ。

（お主の報告通り島に神獣が居たとしても、今はそちらにてぐく体の  
空いた者が居ない）と

「体の空いた者が居ない？つまり手が空いている神官が居ない」と  
「う」とか？

「やうだと思ひます。自分で言つのもなんですが私もそれなりに信  
用される商売をやつてきてますので、神獣が島に居る、といふ報告  
を疑われているとは思いませんが・・・（まあ、今回の場合は自分  
の田で神獣の実在を確認してないので、もしも神獣が居なかつたと  
きのために政府に大分値切られてもあえて逆らわなかつたのですが  
ね。結局は金で荒稼ぎできたし）」

アズトが言いながら妙に悪びい顔をしたが氣のせいだと思つ」と  
した。ネクが、

「神官の仕事内容はそこまで知らないけど、そんなことがあるの？」

「さあ。俺は分からないけど。何しろ年に1、2回ぐらいしか見た  
ことはないから、ほぼ首都に居るもんだと思ってたが？」

やはり此の店の料理は皿にな。

「やうね・・・全員で20人ぐらい居たつけ?今その全員が首都に

居ないということは、何人イグナに来てるか分からないけど、神獣より優先してあたることって、何か別の神関係・・・例えば神剣を探しているとか？」

「いや、ネク？ 神剣なんてそれこそ大昔から探してて未だに何処にあるのか分からないつてやつだろ。何で今さらそれだよ？」

「う、うるさいわね！ 何となくよ、何となく」

「ふう。夢見がちなのは相変わらずだな。現実的な俺を見習えよ」

ふう、眞かつた

「あ、あんたのどこが現実的ですって！？ ていうかいつの間にそんなに食べたの！」

氣付いたら皿の前に10枚ぐらい大皿が積まれていた。

「い、いや、俺は現実的に食いだめをだな・・・」

「いえ、それは別に現実的とは言わないでしょう・・・」

急にアズトに突っ込まれた。

「そうよね、アズトさん。ちなみにこの支払いは、もちろん？」

ネクが妙に微笑みながらアズトに言うが、おい待てよ！

「ええ、割り勘です」

アズト！

ぐつ、バカなつ！

奢りだと思って1皿100丸するこの店の最高級地鶏とやらを食えるだけ、食ったのに・・・！

「あ、あのートウヤさん、ネクさん、もう少し静かにしていただけないでしょうか？」

この店の給仕のマーミが見かねたのか俺達にやつした。

「ああ、『めんねマー!!』。このバカが悪いのよ

実は怒つてないかお前・・・？

「いや、別に俺は悪くないだろ・・・」

と、若干へこんで頃垂れでいる俺と同じく食っていたミシルも頃垂れていた。

分かるぞ、その気持ち・・・

（）

「神官長、ありました。この書物でしょ、うっ。」

神官の1人がそう言つたので見てみると、

「ふむ。どれどれ、見せてみい」

儂は年若い神官からその書物を受けとった。このナシラ・カンダリ、70年の人生で、また神官長の座に就いて早10余年になるが、初めてここまで神剣というものを眞面目に探した気がするのう・・・。もつとも儂はお伽噺と思つとつたわけじゃが、

「ほつ、成る程のう。隣村だけあつて内容が細かいのう」

「ナシラ殿？ 何か判明しましたか？」

と、儂が書物を見て感嘆の声を上げると、護衛兼お目付け役の若造、ガロウ・サイハが聞いてきた。

「いやいや、サイハ殿。判明というか、確認じやよ

「確認、ですか？」

「そうじや。昔よりこの大陸の南にはある言い伝えがあつての。ここイグナより更に南、カリュウ村と言つたか。そこよりさらに奥に秘境があるといふ、な

「秘境？」

「そうじや。嘘か真かは知らんがその秘境には大昔には竜が棲んでおつたそうな・・・火を吹く竜がの」

「竜ですか？」

「ああ、そうじや。まあ仮に今居るとしたら大騒ぎじゃらうが・・・ともあれその竜が棲んでいたとされる山がこの大陸の最南端にある。神剣がある可能性が高いのはその場所じやな・・・ほれこの箇所を

見てみい」

と、ガロウ・サイハにその書物を見せてみると、

「…………これは？お伽噺では……？」

「つむ。 わう思つのも無理はなかりつて。 儂もそう思つておつたから。 じゃが、この勾玉にここまで反応があるのは大分神剣に近づいたといつ証明でもあるのじや。 今までこの勾玉に反応したのは王家の宝刀クニツナぐらいじゃつたからのハ・・・・」

この神器勾玉は本来透明だが今は薄赤く変色している。

「勾玉・・・成る程。 ではこの書物もまざり作り話といつわけでもなさそりですね？」

「わうじゅのう。 」うなるとその書物にも信憑性があるのう。 なに、ここからならあと二～三日じゅ。 確認のためにもそろそろ行こうかの？」

「はい、了解です。 おい！出発だ！準備しろー！」

と、ガロウが自分直属の部下に声をかけた。

「それにしても、火炎をも斬り裂く刀とは。 よほどの業物・・・いや呪術、妖術の類いが利用されていると考えたほうが魔物活性化に関係あるかもしけんのう・・・」

儂は伝説とそれでいる神剣

はえんざん 破焰斬がどう作られたかを考えながら

呴いた。

（～）

「ハハハツ！ そうか、 そつかつ！ あの犬つころがなあ！」

俺は闇騎士ダークナイトの使者からの知らせを聞いて笑い転げた。

あの弱つちい狼は気が弱い割りに妙に野心的なところを持っているからな。俺はやつは嫌いだつた。鬼の婆さんをぶち殺すとき、少しは役に立つたとはいえ、あの程度の獣が俺と肩を並べるなどと・・・と、黒い鎧を着た闇騎士の使者が、

「ランザー様・・・」

と、此方を見ていた。

「おお、 悪いな。あまりにも愉快だつたんで。それで、闇騎士殿・・・・・シンド・ラギ殿はアルカードを襲撃した者についてはどうな見解を？」

「はい、 それが・・・ 我が主としましてはあのアルカード卿のみならず護衛の人狼すら数時間で悉く倒すほどの強さを単体で持つものは限られる、と」

この使者の話に因れば、闇騎士がアルカードの居た血沸き島に置いていた偵察が城から田を離していたのはほんの数時間のことらし

く、もし大軍勢の襲撃なら間違いなくその進軍に気づいた筈なので、おそらく単体もしくは数人の襲撃者で城に近づくのを見逃した、と結論づけた、らしい。

?ということは?

「つまり、だ。この俺を疑つていると。この闇の武を極めし、ランザー・レオパルドを?」

使者は俺に少し気圧されたのか

「い、いえ、そういう訳ではありません。我が主も申しておりますが、闇の三強程の方が同盟を破棄してまでアルカード卿を倒すメリットはないでしょう・・・」

闇の三強、つまり俺と闇騎士シンド・ラギと魔導王ゲン・マドゥのことだ。100年前から各自の持っている領土で地固めに労力を割くためお互に攻め入ることのないよう同盟を結んでいる。もし、誰かがそれを破つて攻撃を仕掛けられたらほんは別の1人と手を組み仕掛けた奴は不利になる、所謂三竦みの形を取っている。闇の大陸は人はあまり多くなく魔物の巣窟だから、領土を広げるにも中々骨が折れるが、まだまだ誰のものでもない場所はたくさんあるしな・・・まあ、俺も魔物だが。

ああ、あとついでにアルカードも同盟を結んでいたな。特にメリットはないが・・・

「そうだな。俺も同じ意見だ。どのような辺鄙な場所は使い勝手が悪いしな・・・といつことはゲンか?いや、それこそないか。あの計算高い爺が」

「我が主は魔導王様の所にも使いを出しております」

「そうか。一度集まり話す必要があるかもしかんな……場所は何処でもいいが、できれば早いうちに。その旨伝えておいてくれ」

「了解しました。それでは失礼致します」

そう言うと闇騎士の使者は一礼し、踵を返した。

流石に人間、といったところか。変に礼儀正しい。と人獅子の俺は感心して見ていた。その百獸の王の象徴たる蠶をかき上げながら。

（）

「わざわざ！」足労じやつたの、騎士殿

私は、闇騎士の使いからの報告を聞きそう言った。  
それにしても、

「い、いえ我が主の命ですから」

何故かその騎士は怯えたよつてやつと言つた。

「まあ、我がそのような何の意味もない無駄な真似をするわけもないが」

領土を拡大したり新魔法を開発したり兵を増やしたりと忙しいしの。

「ふむ。だとすれば……？」

アルカード程度なら多少強力な魔物、例えば黒竜や超獣などが襲えば余裕で倒せるじゃろうが、さすがに偵察とやらが気づくか……

だとすれば、

「やはり我が一番疑わしいの、アリフ。」

と、使いの騎士に言ひてみる。

「な、何故でしょ、アリフ？」やはり怯えている。人間に合はせ一寧に蝶つているのじやが。

「いや、その偵察の者は襲撃者の姿も何も見なかつたのじやろ、アリフ。なら転送魔法を使え一瞬で移動でき、しかもアルカードより強い我を疑うのは自然なことではないか、アリフ。」

と、私は傍に控えさせている不死兵に尋ねた。<sup>アンデッド</sup>特に何も答えない。もしや、使いの騎士はこれに怯えているのか？見た目は人間の白骨じゃしな。

「い、いえ。我が主が言つには同盟を結んでいる闇の三強の方がアルカード卿を倒すとしたら、そのメリットよりもむしろテメリットのほうが大きいのではないだらう、と申してありました」

ふむ。さすがに同種族を捨てて、自らの野望のため闇の力を取り入れ、我に匹敵する強さを持つだけのことはあるの、シンド・ラギは考え方が冷静じや。

「だとすると、襲撃者は我にも見当が……ああ、可能性は低いが当てがないこともないが」

「魔導王殿、その当てとは？」

「いや、過去に存在した者じゃが今は居りん、はずじや。ただその者の流れを汲む者や同じ種族なら特殊な魔法、転送魔法を使えてもおかしくはない、という程度の推測じゃが……」

「や、その者といつのは?..」

「鬼婦神じやよ。やうか・・・もしそうならアルカードを襲つた理由も分かるの?..」

「それは、何でしょ?..」「なに、簡単なことじやよ。アルカードを含む我等4体への復讐じや。何せ鬼婦神に直接手を下したから。何かの拍子でそれを知つた鬼婦神の同族が怨みを晴らさんとアルカードを襲つたのも納得できるもんじやて・・・その者が仮に転送魔法を使えるとしたら早めに対応すべきじやの。一度集まつて皆で対応策を練るべきか・・・そなた、主殿へ」

「り、了解しました。今お聞きしたことを伝え、改めて伺います」

と、使いの騎士は言い最後まで怯えた様子で早足で部屋から出ていった。

「じゃが・・・」

転送魔法を使えるほどの者・・・自分で言つたことだが妙に納得がいかない。

鬼婦神デュカ・リーナがあれを使えたのも、真魔の祖から賜つた魔石を身体に埋め込んだからではないのか・・・? そなたの使い手が居るとも思えんが・・・それに、以前此

方に接觸してきた人間は何故何も言つてこなくなつた・・・?と、遠い思い出となつた故郷や、とある大陸の人間のことを考えつつ首を傾げた。

（）

私は息を弾ませてイグナの港まで来ていた。辺りを見回して、

「ああ、良かつた。まだ、いらっしゃつたわ」

目的の船と人物達を見つけ安堵の声を洩らすと、

「アズトセーンツー・トウヤセーンツー・ネクセーンツー・ミシルセーンツー！」

大声で目的の人物達へ向かつて叫んだ。

「リシナさんツー!?

「リシナツー!?

「リシナ姐さんツー!?

「・・・!」

私を見て少し驚いたようだつた。眞さんに近づき、

「お久しぶりです。1週間ぶりぐらいですかみなさん?兎に角、まだ出航されてなくて良かつたです」

挨拶した。

と、アズトさんが

「あの、リシナさん？何かあったのでしょうか？」

聞いてきたので、

「ええ、家にある書物を調べてましたらある発見をしたんです。それをお話ししたい、ということもあるのですが・・・ちなみにアズトさん、出発はいつの予定ですか？」

「出発ですか？そうですね・・・荷物の積込も殆ど終わりましたし、明日一日休んで明後日の朝ぐらこに予定します」

「ところはまだ、出発まで時間がありますねっ？」

私は勢い込んで聞いた。

「はあ。あると言えばありますが・・・」

「では、重量」

と、そこまで言つたところへ、

「しじゅーーーーーー」

遠くから叫ぶ声が聞こえた。振り返るとそこには、アリナとコリナが居た。

アリナが、

「どうしたの、師匠？ 急に飛び出しちゃって。焦つて追いかけちゃつたよ・・・」

聞いてきたので、

「いえね、アズトさんにお願ひがあつたものですから。出発がいつか聞いてなかつたので・・・」

と、アズトさんが

「お願い、ですか？」

「ええ。それで先ほど聞きそびれましたが船の重量に余裕はありますか？」

「重量ですか？それは重たくない物や高級な物を厳選して仕入れましたから、まだまだ数百？は大丈夫でしょうが・・・」

「そうですか？ それではお願ひなのですが・・・私も乗せて頂けないでしようか？」

「はいっ！？えっと、つまりリシナさんもレヴィアスに行きたいといつことじょうか？」

「ええ。いえ正確には水の大陸に

と、

「やつぱり他の大陸の文化とか食い物は気になるよな  
トウヤさんが口を挟んできたので、

「い、いえそういうわけではないのですが。これを・・・」

と、持っていた（火喰い島滞在記録）を見せた。

とりあえずそれをざつと見たアズトさんが、

「？」これがどうかされましたか？確かに古い貴重そうな記録ですが。  
・・昔、鬼ヶ島に行つて生還された方の手に因るものですか？」

「そうなのです・・・実は・・・・・・」

私は内容を大まかに説明した。

アズトさんが、

「・・・リシナさんのご先祖様もあの島に行つていたとは・・・」

「ええ。ただ私が言いたいのはそこではなく、そのご先祖様の行先、  
そして友と呼ばれる人物、その方々が何処に行かれたか、その消息  
を知りたい、ということなのです・・・」

「はあ、成る程。つまり一番近い水の大陸に、何処か火の大陸以外  
に旅立つて行方知らずになつたりシナさんのご先祖様の何かしら手  
掛けりみたいなものがあるかも知れない、だから私に同行したい、  
というわけですね・・・・・分かりました！どうぞ、お乗り下さ

い！」

「よろしいのですか？！」

「はい！このアズト・ミタラ責任を持つて水の大陸までお送り致します！勿論滞在費全て面倒みさせて頂きますよ！」

「ありがとうございます…よろしくお願ひします！」

と、

「師匠」、勿論私達も

「…一緒に？」

上目遣いで言つてくる姉妹の言葉に、思わずアズトさんの顔を見た。

「も、勿論ですともーお三方ご一緒に…」

若干顔がひきつっていた。

「それにしても、そのご先祖さんと友達の手がかりか…。そう上手く見つかるもんなのか？」

またしてもトウヤさんが口を挟んできたので、私は、「大丈夫ですよ。私もトウヤさんと出会えましたし」「?どうこうことだ、リシナ？」

「つまりですね。スサノオとその仲間の三大英雄…つまりスサノオと私のご先祖様である斗剛一弥、羅義神人、そして火ノ牙天雄、かつての仲間の子孫がこうして2人会つという縁に恵まれましたからね。きっと、もう1人の仲間の子孫の方にも会えるような気がします」

「いや、それは楽観的すぎるだろっ！？縁つてあんた・・・・・・でも、知らなかつたな。俺のご先祖さんがスサノオと共に戦つてたなんて・・・」

トウヤさんが感慨に耽つていた。

だが・・・書物に書かれていた間に墮ちた友、とはどういふことだろうか・・・それはともかく。

同行の許可を頂いた私は姉妹を連れて帰り急いで旅の準備をした。

第21話～三強～（後書き）

「」意見「」感想あればよろしくお願ひいたします。

## 第22話／昔々、あるとひじり・・・

大陸の奥深くに棲息する邪悪な竜・・・私は子供のとき父や母、近所のおじさんやおばさんにだから決して村の南の峡谷には近づくなと忠告されていた。

ただ子供というものは禁止されるとそれをやりたくなるという業の深い生き物で、結局は仲の良い近い年の子供と示し会わせて峡谷に行つた、というのはむしろ必然とも言えるだろう。

そして・・・

現在は知らないがその時は確かにソレは其処に居た。緑色の皮膚、鱗、巨大な体、ソレは寝ているように見えた。

そして、それを見て興奮した私達は騒いだ。また、見るだけでは飽き足らず近づいて触つた。いや、臆病な私以外が触ろうとしたときだつた・・・その化物が自らの回りで騒ぐ小さな生き物に気づいたのか、徐に目を覚まし、そして無造作にその小さな生き物達を、呑み込んだ・・・そして、口を開け空気が震え、また寝た。

一瞬何が起こったのか分からずに惚けた。

だが、我に返り目の前で起こったことを小さな頭ながらに認識した私は恐怖に駆られ一目散にその場を後にした・・・

どうやつて家に帰ったかも憶えていなかつたが、気付くと自分の布団に居た。あれは夢だったのでは?とも思ったが親しかつた子供達の親が子供の行方を探していたので夢ではなかつたと思い直した。同時に忘れることにした。

やがて、年月を経て私は大人になつた。

生まれ育つた村を出、より大きな村に働きに出た。

そして、家庭を持ち子供をもうけた。

子供が歩ける年になると、私はふと幼い頃のことを思い出した。何故か幼い頃私がされた忠告を自分の子供にもした。私の体験も交えて・・・

そんな折、夫となつた男性が仕事にあぶれた。私達は私の故郷に帰ることにした。そして何年か経つたある日の朝、子供が居なかつた・・・

最初は何が起つたのか分からなかつた。だが我に返ると喉が千切れるほどさけんだ。探した。探して探して探しまわつた。尋ねた。泣いた。懇願した。祈つた・・・しかし子供はいつまで経つても見つからなかつた・・・

そんなんある日・・・

私は再びソレに出会つた。ソレは幼い頃見た姿の記憶と寸分違わず、其処に居た・・・

「私の子供を返してっ！」

私はソレに向かつて叫んでいた。恐怖に駆られながら。

『汝・・・』

大きなソレは小さな私を見つめて、喋りかけた。

「あなたでしょうっ！？私の子供を・・・」

私は口ごもつた。

『矮小な生き物が我に・・・恐ろしくはないのか?』

「恐怖よりも何よりも私はあの子に会いたいのつーお願い。お願いします、あの子を返してつー!」

『汝、何を言つてゐる・・・?』

「私の子を返してつー!」

私は無我夢中で叫んだ。

『いや・・・愚かなる生き物と意思を通わせようとした我の過ちか・・・』

何故私の言つことを聞いてくれないのか。何故私の子供に会わしてくれないのか。何故困ったような瞳で此方を見てくるのか・・・  
埒があかないと思つた私は、

「ちやーんつーお母さんよーつー向廻こいつのー出てこひつし  
やーいつー。」

大方精神に異常をきたしていたのだろう、なりふりかまわず叫んだ。

『やはり愚かなものだな・・・ヒトといつのせ・・・』

「出てきて頂戴・・・!」

叫んでいるうちに涙が溢れてきた。

『だがこれがヒトか・・・哀しみ、慈しみ、愛し、憎み、泣き、叫

び・・・絶望する・・・』

と、私が絶望にうちひしがれていのその時だった。  
突然、あたりに生暖かい風が吹いた。

『・・・!』

その時、大きなソレがとても驚いていた。よう見えた。

「なに・・・?」

何が起こったのか理解できなかつた私は泣くのを忘れそう呟いていた。

『我より強大な魔力だと・・・!?』

大きなソレが驚いた口調でそう言つた。  
そしてその視線の先には・・・

『やあやあ 初めまして。僕を呼んだかい!?』

そう喋る1人の青年が立っていた。

『貴方はだれ・・・?』

『おやおやー僕を見ても驚かないの?君は変わつた二ングンだねえ

!』

？一ソングン、という発音の処に違和感を覚えた・・・

「貴方も人間でしょ？」

『ふふつ。面白いなあ、君は？確かに姿だけはこの世界で一番多い知恵ある生物に似てるけどね でも、』

と、青年が大きなソレのほうを向いて、

『君は僕が何者か分かるよね、火竜くん？』

と、言った。

火竜と呼ばれた大きなソレは、

『汝は・・・魔界の・・・』

『そ 悪魔だよー』

悪魔・・・？

『やはり・・・汝のその魔力、この世のものではない・・・』

『へえ、さすがだね、龍神界の落とし子は  
でもね、自慢じゃないけど僕はただの悪魔じゃないんだよ』

『・・・？』

『そりやそうだね。何を言つているか分からぬよ  
僕はね・・・魔界の統括者なんだ』

• • • ! ! ?

『まあ、信じられない？もしくは何言つてんだこいつ？みたいな感じだらうけどね でもね事実なんだ』

『・・・魔界の統括者と言えば、その姿巨躯にして、無限の魔力を誇り、無数の魔法を扱う全ての魔法を作りし者・・・という伝承を龍神界にて聞いたことはあるが・・・』

「へー！僕つてもしかして有名なの？」

「・・・汝が真に魔界の統括者なら、な・・・尋常ならざる魔力ではあるが・・・』

『本当だつてば！全く疑り深いな、火竜君は！』

『…………だが、それが真だとすれば汝は如何してこの世界へ…………』

うん、そこだね！重要なのは！

۷

青年がもつたいぶつて、

『暇潰しなんだ！』

?意味の分からないことを言った?

『・・・・・』

『驚いた？でも本当のことだよ。何しろ魔界つていうところを制覇してからじつち、本当にやることがなくなつたんでね。それでこの世界まで暇潰しに出張つてきたつてわけだ』

『・・・仮に汝が魔界の統括者と云ふことが眞としよう。そして魔界を統括した故に退屈しのぎにこの世界へ顕現したことも眞としよう・・・しかし、では何故汝はこの場所へ現れた・・・？我の前へ・・・？』

『ほうほつ！興味深いことを聞いてくるねつ？まだ疑つているふつなのが気になるけどね

実はね・・・』

『・・・・・』

『適当なんだ』

『・・・汝』

『とこつのは嘘でね。本当はこの子に用があるんだ』

と、青年が私のほうを見て、

『君はいいね 憎しみ、哀しみ、絶望。そういう負の感情が桁外れに大きいよ！その点、魔界の奴等なんてのはもうダメだね！自分こそが最強だと、魔界最高！とか妙に楽しそうなやつばっかりだもん。だから君のその歪んだ心と桁外れに大きい負の感情は珍しいし素晴らしいよ！』

そう言った。

「あなたは何を言つて・・・？」

『フフフフフ。まあ理解できないだろうねっ！でもね、僕は嬉しかったんだ！・・・いい暇潰しが出来そうだつ！』

「・・・？あなたは一体・・・」

『そうだね・・・君達の世界の認識で分かりやすく言つと、神様みたいなものかなつ？

まあそれはいいとして。君は自分の子供に会いたい？』

「・・・？」

『ああ、そんなに驚かなくていいよ！今言つたように僕は神様みたいなものだからね！君の身に何が起こつたか、というのもお見通しなのさつ！・・・でもね・・・残念だけど君の子供はもうこの世に居ないんだ』

「！？うそつ！うそよつそんなことつーー！」

『いいね！いいね！その哀しみの感情！・・・でもね、嘘は言つていないんだ。君の子供はもうこの世に居ない。何故なら・・・この火竜くんが殺したからつー』

「！？」

『！？・・・汝は何を言つて』

と、火竜が言いかけたが

『闇檻』  
ダーグラブラン

青年が火竜に手を翳してそう呟えた途端火竜のまわりを黒いモノが覆つた。

『うん、今良いところなんで君は、黙つていてくれるかな』でだ。全てを見通す僕が言うことと言えどもさうすぐには信じられない、いや信じたくないよね？もう自分の子供に会えないなんてさ』

「うそよね？うそ何でしょ」

『フフフ。口ではそう言いつつも本当は君ももつ諦めてるんじゃない？だって、哀しみや絶望の感情がどんどん強くなっているよ』  
「そんな、そんなことないっ！私は、私は……」

『でも、安心して 一つだけ君の子供に会える方法があるんだっ！』

『ほ、ほんとうっ！あ、会わせて！あの子に会わせて！……』

『ただね、今すぐってわけにはいかない』

「何故！？何故なのっ！？」

『それはね……いや。それよりも君は本当に自分の子供に会いたい？・・・例えそれがいつの日か分からなくとも、そしてどんな形になつたとしても？』

「・・・会いたい。抱きしめ足りない分を抱きしめたい。愛し足りない分を愛したい。同じ時を過ごしたい・・・」

話すうち、また涙が止まらなくなつた。

『そつか、じゃあ、これあげるよ』

青年はそつと聞いて何処からともなく黒い石を取り出した。

「……これは？」

『君の願いを叶える石さー。』

「ほ、ほんとうー。」

そう聞いて私はその黒い石を受け取つた。

『ああ、そつやー。ただしそう簡単なことじやないけどね・・・・・。そうだね、一つ教えといてあげようー。・・・握りの例外を除いて、この世の生きとし生けるものは全て、一度その生命を失えば一度と取り戻すことはできない。でもその生命を失つたとき輪廻転生の環に組み込まれ時を経、その魂は再びこの世界に生まれ出ることがで

きる』

『どうこう・・・?』

『つまりだ！君の子供は今はこの世に居ないけど、いづれは、一年先か百年先か万年先か分からぬけど、生まれ変わってまたこの世に現れるつことなんだ！』

「で、でもそれでは私が」

そんなに氣の長い話では生きていらない・・・

『そのためのものだー。』

そう言つて青年は私が受け取った石を指した。

「・・・これが？」

『そう！君がそれを皿らの魂に取り込むことによつて君の生命、寿命は大幅に増幅される。そりやつて長い間待てばいざれは君の子供の生まれ変わりがこの世に再誕し君と再会できる、といふわけやー。』

「ほ、ほんとうこー？で、でも、私の子供の生まれ変わりはびひつやつて見つければ・・・？」

『それも分かるようになるよー。君がそれを受け入れればね』

青年は再び私が受け取った石を指した。

『さあ、どうする？子供に会えるかどうかは君次第だよー。』

本当にそんな話があるのだろうか・・・。そう思つた私だつたが、色々な感情や理性、考える力が麻痺していたのだろう。青年の言葉を信じた。信じて、しまつた・・・。その意図も知らずに

「分かつたわ・・・。あなたの言つとおりにしてみる・・・。どうすれば良いの？」

『あはつ 簡単さー。願えば良いんだ、その魔石ー！

(長生きしたい。長生きして息子に会いたい) ってね

何も知らない私は素直にその言葉に従つた・・・

「色々とありがとう。では、そりやってみるわ・・・」

『おつとーじゅあ、僕は邪魔をしちゃ悪いんでもう行くねーいつの日か君の子供に会えるといいね』

と、その顔をぐにゅりと歪めた。笑ったのだろうか・・・？

「待つて！結局貴方は何者・・・魔界？神様？・・・ううん、いいわ。聞いても分からなかつたから・・・」

『アハハ！そうだね！それに別に僕のことは気にしなくてもいいんじゃない？』

「でも、いつの日か私が子供に会えたなら心の中でお礼を言つ相手が誰だか分からないと困るもの・・・せめて、名前だけでも・・・」

『『アハハ！やはり面白いね君は！まあ、いいや。僕の名前は――――』

言いながら生暖かい風と共に青年の姿が消えた。

『デュカ――――

名前の後半が聞き取れない言葉だった。

1人になつた私が辺りを見渡すと先ほどまで火竜が居た場所が火竜共々何もなくなっていることに気づいた。

が、特に何も思わなかつた・・・・・・

それよりも私は青年が魔石と呼んでいたものに願いを込めた。

そして・・・

私は人ではなくなつた・・・

人から人ではないモノに変貌した私が村に戻ったとき、皆の私を見る目が変わつた。夫でさえも・・・

何故なら私の姿は異形のモノとなつていたから・・・鬼と呼ばれ悪魔と蔑まれた。石を投げつけられ、恐れて逃げ出されたりもした。子供を失つたものと違う種類の絶望を感じた私はそんな自分の状況に取り乱した。取り乱して泣いた。喚いた。叫んだ。

そして、気づけば・・・

生まれ故郷の村は無かつた・・・

その時私は己のしでかしたこと悟つた・・・

私がやつたのだ、と

自分の手で消滅させたのだと・・・

だが、感情さえもヒトではなくなつてしまつたのか、一頃り哀しみにうちひしがれた私は僅かな時間で立ち直り、生まれ故郷のあつた場所を後にした。

己の存在の確認、得た能力の試用、焦燥感をなくすため。  
何かしら目的らしきものが自分の中についたのだろう。

私は新しく得た自らの能力、魔導を様々な場所で行使した。  
異形のチカラを私に与えた与えてしまった者への憎しみを忘れない  
よう、子供との再会のため人の心を何処かに置き忘れないよう、魔  
石を渡した者とかつてヒトだった頃の名前を合わせ、私はデュカ・  
リーナと名乗った。

生まれ故郷の村があつた大陸、別の大陸・・・

幾年月・・・数万年・・・その間、徐々に年老いていく自らの肉体  
に子供との再会までに自らの寿命がいつまで持つのか、という焦り  
から魔導を駆使し人を拐い子供めいたものも創つた。結果、その子  
らが人に仇なすものとなつても、子供や第2の故郷ができれば構わ  
なかつた。

鬼族は私の子供の代替品となつた。

そして、永すぎた偽りの生命にある程度満足し、身体や魔力の衰え  
を顕著に感じ、無理やり延ばされた寿命にも終幕の足音が聞こえて  
きた。

そんなある日のことだつた・・・

待ち望んだ子供の生まれ変わりの存在を感じたのは・・・

だがその存在は私と同じく、ヒトではなくなつていた・・・

転送の魔法で辺りが闇に覆われていたその存在の元へ訪れた私はし  
かし、懐かしさをあまり覚えなかつた・・・そう、その感情はどう

らかと言えば・・・

「貴様は・・・？もしや火喰い島の者か？」

闇夜の中、その漆黒の大鎧を身に付けた青年は私を見て、そう言った。

「貴方・・・魔の力を・・・」

姿は人に見えるその青年の人在らざる魔力を感じたとき、私はどうしようもない哀しみに襲われた。

「魔の力、だと？」

「何故。何故なの・・・？何故魔の力を・・・？」

「どうか。貴様はどういうわけか知らんが私があの方から頂いたこの力の存在に気づいたというわけか・・・」

「あの方・・・？」

「そうだ・・・偉大なる魔界の統括者、真魔の祖と呼ばれるデュカストテレス様だ・・・！」

「デュカス・・・！あ、貴方・・・まさか魔石に願いを・・・」

「

「・・・！鬼族の老婆よ。貴様は何をどこまで知っている・・・！」

何故私は、生まれ変わった我が子に憎しみの目で見られているのか・

「・・・知っているわ。あが自分の寿命を延ばしたり力をくれたり願いを叶えてくれるだけの都合の良いもの、じゃないということはね・・・」

「なに・・・？」

「・・・あれば、文字どおり悪魔の力よ・・・手に入れれば願いの代償に余程強い想い以外はヒトとしての心を失うわ。そしてヒトだつた頃の繋がり・・・かつての知り合い、特に親しかった大切な家族、友人などを一番に目の前から消したくなる・・・違うかしら?」

「・・・その話ぶりだと貴様も魔石でチカラを得たように聞こえるな・・・何者だ貴様!」

数万年このときを待ち望んだ筈なのに、このために今まで大切なものを失つても生き永らえてきた筈なのに・・・

神人・・・貴方は何故そんな目で、そんな恐怖と憎悪の入り交じつた瞳で私を見つめるの・・・?

「そうね。順を追つて説明しましょうか・・・私の名前はテュカ・リーナ・・・先ほど貴方が言つた通り火喰い島、鬼族の者よ

「・・・やはりそうか。だが、あの島の者は生まれつき魔力が高く魔石に頼らずともチカラを持っている筈だ・・・それにかつて私は

あの島へ行ったことがあるが、貴様のような奴は見てもいない……！」

「……そうね。それは長くなるんだけど、私の生い立ちを

その時だった。

ズシャツ！

と音がし、背中に凄まじい痛みを感じた……

「かはつ！」

私は背後から斬られ、突っ伏した。

「ハツハー！ やつたぞ！ 魔力が高そうなやつだと思ったらやつぱりだ！」これは凄いっ！ 魔力が大幅に上がった！

声のしたほうを見ると、狼の顔をした化物が剣を持って立っていた。それを見た、私は、

「くつ！ 邪魔を！ 疾風！」

最速の風の魔法で狼を吹き飛ばした。

「わやあああつー！」

その狼が飛んでいくのを見ながら我が子に向き直りつとしたら、

「それは油断といつものじゃねえか？」

ドンッ！

声がしたと思つたら私は地面に組み伏された。

「ぐつ！邪魔をしないで・・・頂戴つ！」

魔力を全身に込めて、身体を強化し今度は自身を組み伏させていた獅子の化物を押しのけた。

「うおっ！婆のくせにすげえ力だな。  
これも魔力か！？」

獅子の化物が驚いて僅かに下がつた。  
？吹き飛んでいない？どうもあまり力が入らない・・・私の魔力が  
減少している・・・？

と、私が違和感を覚えていると、

ドシュッ！

私の脇腹に漆黒の剣が突き刺さった・・・

私の子の持っていた漆黒の剣が・・・

「ガハアッ！！あ、あ、貴方。し、しん」

「・・・貴様が何者かなどはどうでもいい・・・・！色々知りすぎている危険な貴様は此処で討つ・・・！」

我が子、神人の生まれ変わりが私に剣を刺しながら囁くように言った。

と、その時、

「よくやつた、皆の者。そやつは悪名高き鬼婦神『デュカ・リーナ！』かつて様々な国や魔物を滅ぼしてきた、魔羅のような存在じゃ！」

少し離れたところからそんな声がした。

力を振り絞って見てみるとそこには、魔羅が居た・・・・・いや、正確にはかつて見たあの青年に匹敵する程の魔力を纏つた化物が居た。

そして、禍々しい魔力で魔方陣を描きながら、

「シンド殿っ！そのまま離すでないぞっ！」

と、我が子の生まれ変わりに叫んでいた。

嗚呼、現世の名前も神人なのね・・・と、今にも死にそうな頭の片隅で、そんなことを思った。

「ルナティックレイ  
月光！」

魔力を纏つた化物がそう叫び、闇夜の月が瞬いた、と思った瞬間肉体が消滅し、何も考えられなくなつた。

だが、最期に我が子に憎しみを持たれたまま消えるのはいやだ・・・！

・ そう思つた途端、身体の奥深く、魂に火が灯つた・・・気がした・・

（）

遠く離れたとある場所、1人の青年・・・の姿をしたモノが田を暝りその一部始終を見ていた。そして、

『やあ、中々面白い見世物だつたね

最後は狙い通り でもないか・・・待ち望んだ最愛の我が子に貫かれて殺されるつていうシーンを期待してたんだけどね・・・・・惜しかつた。せっかく親子揃つて力を上げたのにな。まあ、概ね満足した!』

そう、独り言を言つていた。

『それにしても・・・本当に消滅したのかな?』

自分の力を取り入れたモノがあつさりとやられることに微妙に納得できずその青年は首を傾げた。

（）

気づくと人間の男と女が此方を心配そうに見ていた。特に額を・・・

「 、それは？」

「 ちゃん、一体どうしたの？」

此方を見てそう言つ人間が鬱陶しくなり、無意識にその2人に手を翳していた。

人間が消えたところを見ると、魔力もそれなりに戻つてゐるようだ。姿見があつたので見ると、どうやら私は命を拾つたらしいが・・・見た目は人間の少女になつていた。

何故か角は生えていたが・・・

すぐにも、あの者たち・・・狼、獅子、悪魔に復讐し、我が子の生まれ変わりに会いに行きたいところだが・・・今はよそう。この身体でどの程度戦えるかも分からぬし・・・それに我が子の生まれ変わりが魔の力を取り入れたということは、考えようによつては焦らずともそう易々とは死なないということだ・・・時間を起き力を蓄え時期を待とう。

私はそう考へると人間の家を出た。

まずはこの大陸を離れて・・・そう考へると私は闇の大陸を後についた。

／＼＼

私はビビり寝ていたようだ。えらく懐かしい夢を見ていた気がしたが・・・

神獣のおかげで思つた以上にチカラが回復したので試しにと、とりあえず狼を倒したが・・・それで気が抜けたのかもしない・・・誰にも入られないように此の場所には魔導結界を張つてはいるが。

「でも、油断はできないわね・・・」

そう独り言ひて、出発の準備をした。

そして、

「これは、大丈夫かしら・・・?」

自らの魂に埋め込まれた魔石を参考に造つたあるモノを見ながらデュカ・リーナはそう呟いた・・・

第22話～昔々、おねむけひなた・・・（後編）

なるべく読みやすいように書いた、つもりです。

第23話～声～

（）

やれやれ、漸くカリュウ村に着いたのう。

年寄りはもうちょっと労つて欲しいもんじゅ・・・

と、田頃は首都カグツチで主に活動している神面、ナシラ・カンダリは心中でぼやいた。

「それにしても何年ぶりになるかのう・・・あまり代わり映えはせんのう」

と、村の風景を見て言つてみると、

「ナシラ殿は以前もこの村へ？」

ガロウ・サイハが聞いてきた。

「まあの。神面と言えども新米の時は色々な村に派遣されたりするもんじゅ。儂も良く飛ばされたもんじゅ・・・」

「ほつ・・・それは大変な任務ですね」

「まあ・・・その分、変わった経験も積めるがの」

「ただ、今日は任務でしたが私は以前から此處には来たいと考えておりました」

「カリュウ村にか？」

「はい。というのも此の村は、今年の格闘大会優勝者のあのニルナ・カナワの出身地だからです」

「ニルナ？…………おお、あの別嬪さんか！……ガロウ殿も男よのう……」

この堅物そうな男前にしては、面白いことを言つもんだのう……儂はそう思いついからかうような口調になつたが……

「ち、違いますっ！ナシラ殿が何を考えたかは何となく分かりますが、そういう意味ではありませんっ！私は本人よりもむしろニルナ・カナワが使つていたヒノカ流剣術のほうが気になつっていたのです！」

「なんじゃ、つまらん……」

「と、兎に角！今夜はこの村の宿に泊まり明朝からあの山に入ります！」

と、ガロウががカリュウ村の後方に聳え立つ山を指しながらそう言った。

「了解じや。警備部総隊長殿。では集合は明朝この村の門の前でよいな？」

「ええ、それで結構です。…………よし、解散！」

ガロウが総勢24名にそう声をかけた。

警備隊1班12名、神官も儂を入れて12名、計24名の神剣探索隊とは。

シバ殿・・・いやシエル姫かの？よほど神剣を見つけようと焦つておるのじやろう。通常は、3人～5人程度なんじやが・・・まあ、年寄りは早々に休ませてもらうとするかの・・・儂はそう考え、若い神官を引き連れて宿に向かつた。

（）

自分は幼い頃から強い者に憧れてきた・・・親が政府内に務める武官ということもあり文武に渡つて物心ついた時分より様々な教育を施されてきた。

その結果、自分は武人としての才のほつに秀でていることが分かつた。それが嬉しくて更なる研鑽を積み重ね、やがて武官としての誉れである警備部しかもその総隊長にまで登り詰めた・・・自他共に認める大陸最強の武人となつた・・・筈だった。

年一回首都カグツチで行われる格闘大会を見るまでは・・・

衝撃だつた・・・！

あの女性、ニルナ・カナワの戦い方は。

そもそも格闘大会というのは基本的に武器道具の使用は禁止されている。なのでその出場者は無手の格闘術を使う者に限られる。

だが、あの女性は違つた、ヒノ力流剣術と名乗りをあげていた。剣術と聞いたが当初は剣を失つた時に無刀で対処するための術を駆使し、戦うものだと私は思つていた。

だが、あの女性は剣を使つていた。否、剣の代わりとなるモノを使

つていた・・・すなわちその自らの髪の毛を。

最初それを見た時は大会前の身体検査が甘く、武器の所持を見落としていたのかと思い失格にしようとしましたが、調べると正真正銘その女性の髪の毛だった、ので別に大会規定に違反していないため特に止めなかつた。何故あの長く黒い滑らかな絹のような髪が屈強な男性の対戦相手に傷をつけたりできたのか？何故あのような耐久力や破壊力、速度を身につけることができたのか？

大会終了後優勝したその女性に理由を聞いてみたところ、何でも自身の肉体、そして髪の毛にオーラを通わせ肉体の強化、髪の毛の硬度を強化した、とのことだつた。

詳しい説明を求めたが、自分は教えるのに向いてないのでもし詳しく知りたければカリュウ村に住むヒノカという剣術道場を訪ねてみてはいかが、と勧められた。

それを聞いた私はすぐにでもカリュウ村に行きたかつたが、近頃の魔物の活性化に伴い自分の業務が忙しくなつたので長い休暇も取れずそれも叶わなかつた。

しかし、だ。偶々というか運が良いと言うか私は任務でカリュウ村に来ることができた！

漸くオーラについて詳しい話が聞ける。

カリュウ村の中を探してヒノカ流剣術道場を見つけたとき私はそんなことを考えていた。

「此処か・・・ついに来た」

私はヒノカ流剣術道場と書かれた看板を見ていた。

「ウチに何か用か？」

と、その時両手に買い物帰りであるうつ荷物を抱えた四十がらみの背の高い男が看板を見上げていた私に後ろから声をかけてきた。

「ええー、こちらの」「当主にお田にかかり訊ねたいことがありますか？ もしや貴方がこちらの」「当主でいらっしゃいますか？」

「せうだが。もしかして入門希望？」

「いえ。入門というわけでもないのですが・・・」

「ふうん。まあ上がれよ」

そして、私はタチオ・ヒノカと名乗ったその男性にヒノカ流剣術道場の中へ招き入れられた。

中に入り出されたお茶を飲みながら私は、ニルナ・カナワが使っていたオーラやその戦い方、ヒノカ流剣術について、などの質問をした。

すると、タチオ・ヒノカが、

「二ルちゃんが優勝ねえ。たいしたもんだな・・・」

何か感慨深そうだった。

「それでタチオ殿、あのオーラといふものは誰にでも扱えるものなのでしょうか？」

「ああ。個人差はあるがな。そもそもオーラとは人が誰しも持つ内在的なチカラのことなんだ。・・・ええと・・・ガロウ君とか言ったつけ?見たところ君もかなりのオーラを持つてるぞ?何か武術をやっているのか?」

「本当ですか!私にもオーラが・・・ええ。私は一応武芸を一通り修めています」

「へえ!そりゃたいしたものだな・・・仕事は何を?」

「実は・・・」

と私は、自分の身分、現在この村に居る目的などをかいづまんで説明した。

「成程な・・・さつき、なんで神官が今の時期に此の村に居たのか謎だつたがそういうことか・・・神剣とは・・・」

「ええ。まあ、明日には発ちますが。それで、タチオ殿!門人でもないのにこんなことを聞くのは心苦しいのですが、オーラを扱うにはどうすれば?」

「ああ、それは別に気にしなくても。近所の子供とかにも適当に教えたりしてるとかなら・・・オーラとは・・・」

そうして私は1時間ばかりオーラの使い方、仕組みを教えて頂いた。

そして、

「これが、オーラ・・・！」

「そうだ。まあ、ガロウ君は元々オーラの量も多いし武術の下地ができるたから、飲み込みも早かつたんだね！」

私が視認できるほどの強大なオーラを現わせて見せると、タチオ殿はそう言つた。

「ありがとうございます！これで私は大陸最強になります！」

と、オーラの闘法を身につけた私は気が大きくなりそんな大口を叩いた。

が、タチオ殿が、

「大陸最強ねえ・・・まあ、5本の指にはに入るかも知れんが・・・」

「？それはどういづ・・・？いや、確かに貴方やニルナ・カナワもオーラを使いこなすので自分でも言いすぎたかもしませんが・・・」

」

「うん。まあガロウ君のオーラ量は俺はともかく二郎ちゃんよりはかなり多いからな。戦い方次第ではいい勝負ができるんじゃないかな」

私のほうがオーラの量が多いのに精々いい勝負ができる程度・・・？」

「タチオ殿、それはどういう意味でしょうか？」

「・・・そうだな。オーラを使った戦いでは、もちろんその量が多いほうが有利ではあるがそれをどう上手く利用するかに勝敗の鍵がある。その点で言えば、ガロウ君よりも俺が何年かかけて教えた二

ルちゃんのほうが圧倒的に上手い」「

「・・・成程。それはそうかも知れませんが、それなら私も使い方を覚えればニルナ・カナワよりも強くなれるのでは・・・?」

「ああ、それは間違つてはいない。あとは練習して己の限界を見極めたり、できる技を増やしてオーラを使った戦いに慣れていくことか。ただ、俺が言いたいのはそうじゃなくてだな・・・」

「?・?・?どういふことでしょうが?」

「オーラの戦いの真髄・?・?・?それは人の持つオーラのみならず<sup>ブランナ</sup>精氣を感じることができるかどうかも重要、だということだ」

「<sup>ブランナ</sup>精氣ですか?」

「そう。<sup>ブランナ</sup>精氣とは大気に満ちるチカラ・?・?それに自らのオーラを混合させ取り込むことにより、単純にオーラのみを使うよりは遙かに強大な能力を發揮できるんだ」

「そ、そんなものが・・・?」

「そうだ。だが、その取り扱いにはまず己のオーラを使いこなし、自身のみの力でどれだけのことができるのかを把握しておかなければならぬ・・・単純に力のみを追い求めて下手に<sup>ブランナ</sup>精氣を取り込むと・・・」

「?・?・?何か問題が?・?・?」

「?・?・?肉体が崩壊し、自我が自然の中に取り込まれる?・?・?」

「……？」

「とは言つても通常はそここの段階まで行き着く」ではないがな それこそ何十年もの研鑽を積まないと」

「そ、そうですか……」

「ああ。だから今よりガロウ君が強くなりたいと言つなら、先ずは自らのオーラを完璧に使いこなす修練のみをすればいい」と思つぞ。それだけでも充分だ。プランナに關しては一応そういうものがあるということだけでも覚えておいてくれ」

「はい！分かりましたタチオ殿！ いえ、師匠！」

「今までで最短の弟子だな……」ここまで飲み込みが早いのも、教えた時間も」

そう言つてタチオ殿、いや師匠は朗らかに笑つた。

そして、私は感謝の言葉を述べヒノカ流剣術道場を辞した。

（）

政府警備部の総隊長といつ青年が突然訪ねてきたが、その青年は何とも才能に溢れていた。

あれならば、自分が鍛え上げた近所の娘すら何れ追い抜くのでは、息子には及ばないか、と満足げな表情をしていたが……

「神剣か・・・まさか、あれのことじやないだらうな・・・」

と、若干顔を曇らせた。

あれというのは・・・

つい先月、息子の元服の祝いにと渡した、数百年我がヒノカ家に伝わる由緒正しき刀（炎斬）のことである。

その由来は・・・俺が親から受け取ったときに聞いた話では、なんでも十何代か前のヒノカ家の当主が近くの山のとある場所に突き刺さっていたその刀を引き抜いてきたとかなんとか・・・それを今は旅立つたトウヤが持つている筈だが。

どうも青年達はあの山を目標しているふうなのが気になるが・・・まあいいか！

と、小難しく考えていたタチオ・ヒノカは悩むのをやめ、夕食の支度に取りかかり始めた。

（）

今朝イグナを出発してそろそろ半日は経つ・・・

俺はそろそろ眠くなつていった。ガルディアの船に引っ張られて進んできたこのアズトの船は人が30人は乗れるぐらいには大きいし雨が降つた時のためか中に船室がある。辺りが暗くなつてきた二時間ぐらい前から前方が見えず危険なためガルディアの船もアズトの船も航行を停止し飯も食つたので明るくなる明朝までガルディアの船の見張り以外は寝るような雰囲気になつていた。

そんな時だ・・・此方の船に移つて一緒に居たガルディアがソレを出したのは・・・俺は今までそんな液体を見たことが無かつた・・・しかしがルディアやアズト、リシナそしてミシルまでもがその血の色のような液体をあまりにも量そうに呑んでいたので、俺はついソレに手を出した。

ソレを呑んでみた俺は、いやそんなに大して旨くもないな、と思つた程度だつたが・・・奴は違つた。

そう、俺と同じくその液体を見たことがなかつた奴は珍しさのためか、あるいはとかその液体を一気に飲み干してしまつた・・・葡萄を原料とするその酒を・・・

「あのー、ネクさん? もうそのぐらいで止めておいたほうがいいんじゃない?」

リシナがほんのり赤く染めた顔を向けてネクにそう言つた・・・

「へつ? 何いつてんるリシナしゃん。あらしさまだまだぜんぜん平氣だすよ? ていうかそうやってこんなにおいしこおさけをひとりじめする氣じやういろ? あげらいんらから」

そう言つてネクは硝子の瓶に入つた葡萄酒を更に飲み干した。こいつが何を言つているかわからない。

「ねつやーあんらものめー」

「いや、ネク。俺は飲んだぞ! もういいんぢやないかな?」

正直めんどくさい。

「わつやつて誰だよ。

「なーに? あらしのさけがのめなーって! ? ? ? おかしいなあ、」  
「さりにおこしこれに・・・」

いや、呂律がまわってないし。しかももう一本いくだと・・・?

「いや、もう遅いしな・・・ほら、みんなも眠いだろ?」

俺はそいつを回りを見渡した。みんなが一斉に頷いている。

「わ、そうですねー明日も早くから出ますし、皆さんそろそろ寝ま  
しょうか!」

アズトが俺に田配せしながらひと言つた。

「つむ、わうだな。明日の航行に差し障りがあるとこけないので私はこれで失礼をせじまうつ

そう言つてガルティアがそれをと席を立ち自分の船に戻つた。  
いや、待て。

「わうですね。では私も・・・」

「・・・・・・・」

リシナとハシルも凄い早さで席を立ち各自の船室に引っ込んでいつた・・・

「で、ではトウヤさん後はよろしくお願ひします」

アズトが言いながら田の前から居なくなつた。

お前り・・・

そういうや、双子は飯を食つてすぐに自分の船室に引つ込んでいたな  
?といふことは・・・

「あれ? みんな、ピリこつたろ? まあいいやー、わいや、あんまりもろ  
め! キヤハハハ」

今、この場には俺とこの酔つ払いしか居ない、といふとか・・・?

「ああ、そうだな・・・」  
俺は酔つ払いが差し出した瓶を受けたと溜め息を吐いた・・・

ひつじて、出発した日の夜が更けていった。

ちなみに次の日、ネクは頭が痛いと寝込んでいた・・・・・・

／＼＼

「伝承に因ればあの上の筈じやが

儂はよつやく辿り着いた山の頂上にあるうそはあらつかといつ大きな岩の天辺を指差した。

「あの上ですか・・・ナシラ殿、勾玉の反応のほうは如何でしよう

か？」

ガロウが儂に聞いてきた。

「ふむ・・・やはりこの近辺かも知れんの・・・」

儂は真っ赤になつた勾玉を取り出してガロウに見せた。

「一真つ赤ですね・・・」

「そうじやな。それで誰があそこへ登るかの？」

「勿論私が行きます！」

「ガロウ殿が？じやが、その甲冑・・・」

儂はガロウが身につけている見るからに重そつた甲冑を見てそつ言った。

「心配御無用です！ハアアア・・・！」

見るとガロウの身体が淡く光りだした。

タンツ

音がしたと思つたらガロウの姿が無かつた。いや、岩の天辺に飛んでいた。

「なんと・・・」

呆然としてガロウを見ていると、

「ナシラ殿一つ！此処には剣はありませんぞー！」

岩の天辺からガロウが叫んだ。

「なんじゃとつ！？まさかそんな筈は・・・」

儂は手に持つてゐる真つ赤な勾玉を見た。

（）

3日目の午後、俺達が海上を進んでいた時だった。

航路で言えば俺達は火の大陸から北西に位置する水の大陸を進んでいたわけだが・・・

「ギョギョギョー！」

「ギョツギョギョギョー？」 「ギョーギョギョーギョー」

海上にあつた島とは言わないまでも巨大な岩の上で何かそんな音で凄く煩かつたので船を近づけて見ると、何か数体居た・・・魔物と思い当然警戒した俺達は、身構えた。

「おーつー！いつぞやの二ングンッー！」

が、そんな声がしたのでよく見るとその岩の上にこの前会つた魚民ぎょみん

が居た。

「ああ。誰かと思えば久しぶりだな、魚民つー。」

俺は大声で返した。

「一ソングンツーお前何処かに行くのかつ？」

「おおつーちよつと隣の大陸までなつーそこがお前の巣かつー!？」

魚民に見た目が似た周りの奴らがギョギョギョギョギョ煩いので俺は大声で喋り続けていた。

「あのー、トウヤさん? 知り合いでですか?」

アズトがそう言つてきたので、

「まあ、知り合いだな。魔物じゃなく、魚民つて言つんだあいつ。  
なあ、ネク?」

「知り合いつていうか一回話しただけなんだけどね」  
ネクが言つと、アズトが、

「そりですか・・・其処まで急ぐ旅でもないし、もしよかつたら少し話していかれてはどうですか?」

「いいのか?」

「ええ。ガルティアモーンつー止まつてくださいー。」

アズトが前方のガルディアに声をかけ船が止まった。

俺はその岩に降りて、

「お前、結構巣が遠かつたんだな・・・」

と、魚民に話しかけた。

「遠い？ああ、そう言えば二ングエンに会つたのはあの大陸だったな。だが俺達魚民はお前らの乗り物よりもかなり速く泳ぐことができるのでそんなに遠くはないぞ」

「そうなのか？それにしても殺風景な巣だな・・・」

俺は魚民達が居る岩を見渡して言つた。

「いや、違うぞ。俺達の巣はこの下、海中にあるんだ」

「そうなのか？じゃあお前らは此処で何をしてたんだ？」

「・・・俺達はたまにこいつして日の光を浴びたくなるんだ。太陽は生命の源だからな！」

「や、そつか。魚とはやはり違つんだな」

「当然だ。俺達は魚から進化した種族だからな！」

「ふうん。それにしてもお前以外はギョギョシとしか言つていなが・・・」

「前に言つただろ！俺は天才だつて。まあ、俺は二ングエンの言葉も仲間の言葉も理解できるがな！」

魚民は胸を張つて言った。

「ところで、ニンゲンは何処に行こうとしているんだ？」

「何処？ああさつきも叫んだ、言つたが俺が居た大陸の隣の大陸、水の大陸だ。そのレビュニアスっていう国にな」

「水の大陸。海神様の故郷か。何をしに行くんだ？」

「そりやあ、色々見に行く・・・っていうか海神様ってなんだ？」

聞き慣れない言葉を聞いたので思わず尋ねた。

「？海神様は海神様だろ。知らないか、海神レビュイアタン様を？」

魚民が首を傾げてそう言った。

（）

おかしい。

ナシラ殿が言つには此処には確実に何かあるらしいが・・・・・・私は隈無く泰山の上を探したが何も見つからなかつた。

「神剣とは、やはり伝説だけのものなのか・・・・？」  
私が諦めて頭を降りようとしたとき、下から、

「ガロウ殿ーー！何が見つかったかーー！？」

そつ叫ぶナシラ殿の声が聞こえた。

いいえ、何も

私が再度そつ叫ぶとしたとき、

『我の眠りを妨げるのは汝か・・・?』

私の耳にそんな声が聞こえた。

第23話～声～（後書き）

場面が結構移り変わっています。

第24話「神剣」

（）

（とある島）

カンツ！カンツ！

そこでは1人の女が作業をしていた。  
そして、

「・・・こんなものか」

今まで打っていた斧の刃の部分を見てそう呟いた。

「・・・にしても、この私が精魂込めて打つたものが刃こぼれする  
とは・・・あの牛め、どんな使い方をしやがった？手入れも録にさ  
れてないし・・・」

女はぶつぶつ文句を言っていた。  
そこへ、

「ミスミツー治つたのかつ！」

と、女に声をかける者があつた。

女、ミスミ・デンタはその者に振り向く、

「タウラッ！てめえどんな使い方をしやがつたッ！なんでこの私の最高傑作がボロボロになつてたんだっ！」

と、声をかけてきた者、タウラ・ミノスへ怒鳴り散らした。

「う、うむ。それがな・・・我はデュカ・リーナ様に召喚されいつもの如く目の前の生物を殲滅をしようとしたのだが・・・」

「デュカ・リーナ？・・・ああ、鬼ヶ島の。それで？お前は召喚されて鬼ヶ島の鬼の魔法でも受けとめたのか、これで？」

ミスミと呼ばれた女が先ほどまで鍛えていた2つのバトルアックス、  
二丁板斧にぢょうばんぶを指し示した。

「否・・・我が戦つた相手は人間だ。斧に傷をつけたのはその人間の力タナだつた・・・」

「はあつ！？人間の刀だとつ！寝ぼけたこと言つてんじゃねえぞつ！私の鍛えたこれがたかだか人間の刀如きに負けるわけないだろうがつ！」

「・・・事実だ。我的切り札すらも破られた・・・しかし、言い訳じみているが彼奴はただの人間ではなかつたような・・・」

「切り札あ？といふ」とはお前の鉄の身体もその人間とやらの刀で斬られたのか？」

「・・・そうだ。胴斬りに真つ二つにされたので再生するのに時間  
を要したのだ・・・」

「・・・まあ、刀ならば業物なら鉄をも断つ、斬鉄と呼ばれる術が  
あるらしいが・・・ただタウラ程度の硬度はともかくこの鉄島の砂  
鉄を使つた私の傑作に傷をつけるなどと・・・」

「我程度の硬度とは、聞き捨てならぬが・・・斬られたのは事実・・  
・だが、1撃は確かにその人間に入れた筈なのだがな・・・」

「なに？・・・それでも斃せなかつた？・・・ということは、その  
人間は人間が作りし魔導の使い手、妖術師？とやらかもな・・・だ  
が、だとすれば・・・」

「なんだ？」

「その人間は、ただお前よりも強かつたというだけだろうが・・  
私の斧に傷をつけるほどの刀・・・もしかすると人間の妖術師が扱  
うとされる神々の武具の一つかも知れんな・・・」

「ぐつ・・・しかし神々の武具とは？」

「ああ。それは、かつて神や神獣が創つたもしくは神や神獣が武具  
に姿を変えたモノ、とされている伝説上のモノだがな・・・しかし、  
もし本当にそれなら使い手はともかく私の二丁板斧に傷がついたの  
も納得できるな・・・」

「貴様！この島の覇者の我に向かつての数々の暴言・・・・・・  
貴様が優秀な鍛冶師でなければとうくんそのそつ首を刎ねていると

「うだぞつー」

「・・・まあ、落ち着けよタウラ？赤いものでも見たわけじゃあるまいし・・・・・だが、面白い！タウラ、お前はいざれその人間とまた戦つつもりなんだろ？」

「当然だー今度会ったときこそ彼奴をぶち殺してくれわっー！」

「よし、分かつた！これを返すのはもづくよつと待つてくれ。試してみたいことがあるんだ」

「な、なに？修復は終わつたのではないか？」

「それは終わつたさ。でもお前の話を聞いてもつゞし強力なモノにしてやれうと思つたのさ」

「・・・そりか。我も強力になるのなら文句はないが・・・だが、なるべく急いでくれよ。デュカ・リーナ様にいつ召喚されるか分からぬからな・・・」

「まかせとけつてー・・・・・いや、三田はくれよ」

「・・・・・・」

その黒い髪の小柄な女、ミスミ・デンタは再び二丁板斧への作業を再開した。

（）

なんだ、この声は・・・?

私は何処からともなく聞こえてきた声に驚き辺りを見回してみたが・

・

「何も居ない・・・?」

『・・・汝、何処を見ておる・・・我は汝の下に居る・・・』

下?そんな声がして下を見るも皆しか見えない。

『・・・汝、貴様は人間じやな・・・?』

声はすれども姿の見えないそれはそんなことを聞いてきた。

「何者かは知らんが。そうだ!私の名はガロウ・サイハ!火の大蘆の首都カグツチ政府の警備部総隊長ガロウ・サイハだ!」

『・・・カグツチ?その名は知らんが・・・だが人間よ、何故我の眠りを妨げる・・・?』

「だから、何処だつ!何処に居るつ!-?」

『・・・汝の下じやと云つておるつた・・・まあ良い・・・我は火の竜、数万年の昔、悪しき者に此の場へ封印された、火の竜じや・・・』

・

「!-!-?なんだとつ!-?」

まさか、ナシラ殿の勾玉はこの存在に反応したのか・・・

『……岩の姿になつてはおるが……しかしあの悪しき者は強大すぎた……我は気づけば此の場から動けなくなつておつた……して、汝は何故我の眠りを妨げた……？』

「眠りを妨げた？確かに私は岩の上に登つたが……」

『……汝からは強大な力を感じる……魔力……？ではないが、それに近しい強大な力を……それを感じ目が覚めた……』

私に強大な力だと？…………もしや。

「火の竜よ。お前が言う強大な力とは……これかっ！」

私はオーラを全開にし火の竜に尋ねた。

『……そうか……汝はあの⼈間と何か繋がりがあるのか……』

「……あの人間？何だ？誰のことを言つてゐるつ？」

『……そうだな……もう数百年にもなるか……あの⼈間が我の魔力と想いを込めたアレを抜き去つてから……』

「な、なにつ！？そ、それは、もしや……」

『……我の魔力と想いが込められたソレは汝のもつ物に形を似せていた……いずれ自力で封印を解くためにその武器のような形を……』

・』

「……抜いた人間もそんなことを言つていたな……」

「ということはかつて神剣は此処に在つたが、今は無い、ということか……？」

私は思わぬところから神剣の存在を知つた。が、

『……250年程前になるか……汝と似た力の持ち主が来てから……人間の寿命とは精々100年程度であろう……？』

「……長生きすればそのぐらいだな。何故そんなことを聞く？」

『……その人間はこう言つた、（自分の子にこれを受け継がず。絶えることなき魔物に対抗するために）と……だからあの人間の子孫なり何なりが我のあれを持つてゐるのではないか……？』

！？

私は聞いていて気づいた。

火の竜が言うようにとある人間が250年程前に火の神剣（と伝承ではされている）を抜いたとされているのに、その誰かが言うように昔から存在する魔物が何故最近になって活性化してきているのか、と。

そして神剣は最近の魔物の活性化に関係がないのか、と。

だとすれば他に何か原因があるのだろうか……

（）

神獣レビアタン・・・水を司る獣。水の大陸の守護神。多分でかい。

ガルディアから聞いた話をまとめれば俺の認識はこんなところだった。

そして、魚民がレビアタンを海神と言つたので何故、海の神と崇めるのか魚民にその理由を聞いたところ、魚民が現在のように知恵ある生物の種族になつたのは、なんでもここ最近・・・数百年のことらしい。

自称天才の魚民が種族のお偉いさんから聞いた話では、当初こいつらの種族は現在も普通に海を泳いでいる他の魚と大差なかつたらし

い。

ところが、数百年前のある日こいつらの種族の先祖の1人（匹？）が突然頭の中に神託のようなものを受け、それから思考を音声として表すことができるようになり、生命力も寿命がかなり増え、身体の形も両生類のように水でも陸でも生活できるほどに変化していったらしい。そいつの子孫（卵）たちは生まれた時点ですでにその能力を身につけていたとか。

そして、その1番最初のやつが神託の際に聞いた声が名乗つていたのがレビアタン、だつたというわけだ。それ以降、そいつとその子孫達は自分たちを大幅に進化させてくれた存在、レビアタンを海の神として崇めるよになつたんだとか。

その海のほうでのレビアタン話をガルディアに聞かせてやると、「やはり、レビアタンは実在したのだな・・・伝承通りに・・・」

と、感激した様子だつた。

「でもな、ガルディア？確かに実在はしてたかもしれないが、結局魚民に聞いても何処にいるかは分からず仕舞いだつたぞ」

俺は魚民と別れて再び航行を開始したガルディアの船に乗り、そんなことを言った。

「だが、トウヤ。居る場所は分からぬがその魚民とやらの話から判断するには、広くとも水の大陸の領土内とは推測できる。これを踏まえて再度祈祷師に占わせれば・・・」

「今レビアンタンが何処にいるか分かる、といつことか

「そうだ」

「それなら、どちらにしてもまずレビアスに帰るのが先決だな」

「そうだな・・・」の速度で進めばあと1週間からないとは思うが

「まあ、可能性が見えただけでも今回ガルディア達が来た甲斐があつたつてもんだな」

「そうだな。最初にトウヤに今居る場所が火の大陸と聞いたときは祈祷師も当てにならんと思ったが・・・・？」（祈祷師は正確には何と言つたんだつたか？確か・・・『その場所に行けば神獣の力を持つモノに会える』だつたか。妙に回りくどい言い方だつたな。はつきりと神獣と言つたので疑いもせずに我らはそこへ向かつたが・  
・・）

ガルディアが何かを考えるよう黙つたので、俺はかなり後方となつた魚民が居た岩を振り返つたが、魚民の姿はもう見えなかつた。  
・・鳥に狙われるなよ。

（）

私は火の竜に疑問をぶつけてみた。神剣の在処すなわち250年程前に神剣を抜いた人間が誰かを・・・しかし、神剣を抜いたというその人間については、おそらくオーラを取り扱つていた、というぐらいしか特徴がなかつたらしい。というよりその人間はただ、何かしらのチカラを感じたその剣を抜いただけだから誰かは分かる筈もない・・・

タチオ殿が言つていたが、オーラを扱いしかも戦いに使用する者というのは、武器や文明が発達した現在でこそ少ないがかつてはこの大陸の戦闘方法の主流らしく、扱える者の数も相当数居たらしい。

史実に因れば、初代スサノオが大陸を平定した際には人間同士の争いはほぼ無くなり戦う術よりも様々な文化や技術を発展させるほうにスサノオが創設した政府は力を入れたとのことだが・・・・・魔物は現在ほどではないにしろ古来より存在していたのに何故戦う術はそこまで重要視されなくなつたのか・・・?

勿論、時の妖術師とやらが大陸中の人々が暮らす場所を護るために結界を張り下手な場所に行かなければ安全は保証されていた、という理由もあるのだろうが・・・最近になつて魔物の活性化に伴い身体的能力に頼らずとも魔物に抵抗できる、大砲などの技術は確立されてはきているものの・・・腑に落ちない。

私が何故悠長にそんな思考に耽つていたかと言えば、

「それにしても、どうしたもんかのうガロウ殿？」

そうナシラ殿が言つように魔物の活性化に対処するにはどうしたら良いかを、カリュウ村の宿まで戻つて膝を突き合わし皆で会議をしていたからだ。

私が火の竜と話したあとで皆に合流すると、私以外の者は私が岩の上ですっと独り言を言つて居る様子に見えたらしい。

皆には火の竜の声が聞こえていなかつたのか？と疑問に思いつつ、私は岩の上で火の竜の声を聞いたことやかつては神剣がありそれを誰かが抜いたこと、それを聞いた自分の見解として神剣は近頃の魔物の活性化に関係ない、という説明をした。

勾玉の反応については憶測だがその火の竜の存在だろう、といつことも付け加えて。

「そうですね・・・もし神剣が見つかればどうするか、ということもそこまで詰めてはいませんでしたが、見つかれば何か分かるかもしない魔物も何とかなるかもしね、という樂観的な意見がかつたもので・・・」

私は唸りながらそう言った。

「そうじゃのう。じゃが、オーラじやつたか？儂もそのような戦う術があるのは初耳じゃの。格闘大会の時も女だてらにやたら強いとは思つておつたが・・・そのニルナ・カナワの師、タチオ・ヒノ力殿とか言つたか？その御仁に色々と聞いてみるかの・・・神剣を引き抜いた者もオーラを使い、その御仁も現在この大陸でのオーラの

扱いにかけては第一人者じやろつからな・・・」

「ええ、私もそうしようとは思つてました。あの山から一一番近い集落であるこの村の方といふこともありますからね」

「まあ、ガロウ殿の考え方通り神剣が魔物活性化に関係ないとしたら、現実的な対処方法としては警備の強化や各町村への武器の配布などかの・・・魔物の元を絶てる可能性があつたための上の方の今回の力の入れようを考えれば、そんな意見も言いにくいとは思うが・・・」

「・・・まあ、直接シバ殿や姫様に訴えるのは私ですので・・・」

私はそう言い、そつと溜め息を吐いた。

／＼＼

イグナを出て4日目。

俺は初めて海の魔物を見た。

最初は前方に何かでかい物が浮いているな、ぐらいにしか思つてなかつたが、

ドンツー！ドンツー！

ガルディアが大砲をぶつ放していた。

「撃てつ！奴を沈めろつ！」

俺がガルディアの船に飛び乗つたらガルディアがそんな指示を出していた。

「なあ、ガルディア？あれは魔物なのか？」

俺が聞いてみると、

「ああ。奴はオクトリーチ・・・船喰いと呼ばれる大蛸だ」

「ふうん。強いのか？」

「もう2～3発お見舞いしろつー奴を近づけるなっ！・・・・・・あ？ああ。見ての通りだ。動きこそ遅いが異常な耐久力を持つている」

ガルディアがさらに指示を出したあと、そう言ひて10mぐらい先に居るばかでかい蛸みたいな奴を指した。

「耐久力か・・・見た目はフニャッとしてるのにな。食えるのかな？」

「ぐ、食うつ？食つて大丈夫かどうかは分からんな・・・以前奴と遭遇したときは十発程でようやく沈んだからな。触手を切り取つたりする余裕もなかつた」

「そなのが。でも、何だかんだ言つても蛸の一種だろ？食えそうだけどな・・・」

「まあ、食えるかも知れんが・・・次弾装填急げっ！」

「なあ、俺があいつをやつていいか？」

「何をやつている……急げ！……トウヤ、今何と？」

「いや、だから俺があいつをやつていいか？大砲だとそのまま海に沈むだろ？」

「……だが、どうやってやる？」

「そりゃあ、これだ」

俺は炎斬を抜き、見せた。

「トウヤ……私は確かにお前の強さを知っているが、船に飛び乗つたときのように足場はないんだぞ？」

「大丈夫だ、此処からやるから！まあ見てろよ……」

俺はそう言い、炎斬にのみオーラを始めた。

そして、

「ヒノ力流 九天奥義つ！牙つ！」

俺がそう叫ぶと、炎斬はその姿を大きく太くし、オクトリーチへ真っ直ぐ伸びていった。

ザシユツ！

「手応えあり、だな」

オクトリーチの頭あたりに炎斬が刺さったのを確認した俺はそのまま下に炎斬を振り下ろした。

ズバッ！

「・・・・・・・・・・・・

縦に真っ二つになつたオクトリーチが驚きに満ちた目でこちらを見ていた。気がしたが・・・さらに炎斬をそのまま縦に横に振つて身体を切り刻み拾えそうな大きさにした。

「よし・・・・！これで確実に死んだだろ。あとは拾えそつな身を捨うか」

俺はそう言い、炎斬を引っ込め元の形に戻した。

・・・・・・・・？

静かだな？

と思って周りを見てみると

「・・・トウヤ」

ガルディアを始め、ガルディアの船に乗つてゐる奴等が驚いたように俺を見ていた。

「何だ、ガルディア？早く拾わないと蛸の身が海に沈むぞ？」

「あ、ああ・・・いや、そんなことよつもートウヤのその剣はいつたい・・・?」

「これが?いや、俺もよくわからんが何でもつかひのヒノカ家に代々伝わるモノらしいぞ。剣技と一緒ににな」

「ヒノカ家の家宝みたいなもの、といふことか・・・しかし、いくらオーラという特殊な力があるとはこえ剣が形をえるとは・・・」

「うん。俺も仕組みはよく分からん。でも、形をえることを前提にして九天の奥義・・・つまり剣技も受け継がれてるからな。最初からそういうものだつたんだろ」

「・・・まさか、神々の武具ではないのか・・・?」

「いやあ、それはどうだらうな?そんなに大したモノじゃないと思つれ。」

親父から聞いた話だと何百年か前からある由緒正しい剣らしいけど、神々の武具ならそれこそ何万年も前に創られたものじゃないか?」

「・・・そうか。だが、それでも珍しい・・・」

「まあ、これのことよりも今は蛸だる。綱なんか貸してくれ」

俺は今にも沈みそうな蛸の身の破片を掬おうと急いだ。

「・・・久方ぶりに訪れた人間・・・かつて訪れた人間・・・人間が持つうる最も強大な力・・・オーラ、とかいつたか・・・魔界の者や龍神界の者が持つ魔力とは似て非なるモノ・・・我の魔力と想いが込められたアレを扱うには必要なもの・・・何故、人間は・・・」

『

火の竜が岩の姿で思考に耽つているそのとき、山に生暖かい風が吹いた・・・

そして、

「始まりの場所・・・此処から私の偽りの生が始まったのね・・・」

そう呟く1人の少女が其処に居た・・・

第24話～神剣～（後書き）

「」意見「」感想あればお願ひします。

## 第25話「求めたモノ」

（）

（歴？？年）

闇の大陸のある場所・・・

「何故だ！何故お前は家族を殺したつ！？家族だけではないつ、同じ村の者達もつ！」

1人の白い着物を着た男が目の前の大鎧を身に付けた男にそう叫んでいた。

「・・・貴様には関係のないことだ・・・そんなことよりも貴様にはやることがあるのだろう・・・何故此処まで来た・・・！」

「お前を止めるためだ！もう、これ以上の殺戮はやめろ！神人つ！」

「斗剛・・・」

大鎧を身に付けた男、羅義神人は僅かに考える素振りをした。が、

「私の前に立つな・・・！貴様が、貴様等がつ！・・・でなければ、私は・・・！」

「神人？」

「斗剛……悪いことは言わん……帰れ、火の大陸へ……家族の、下へ……」

「そうはいかん！俺はお前を連れ戻す！連れ戻し、お前の父親や母親、村の者達の墓の前で謝らせるつ！」

斗剛一弥は怒りを込めて必死に叫んだ。

「……私はもう戻れない……火の大陸にも、ヒトにも……」

「……神人……何があつた？何がお前をそう、させた……？」

「……帰れ。そして、私のことは忘れる……貴様には貴様のすべきことがあるはずだ……」

「そろはいかん！……それに俺は……幼い頃からこの力のせいで化物扱いされてきた……お前にも話した筈だ！何故、何故お前はわざわざ人の道を外れたつ！あれほど強く気高かつたお前がつ！」

「……貴様には分からんだろう……いや、あいつらにも私の想いは分からんだろう……」

「あいつら……？須佐之男や天雄のことかっ！？」

「……強さに、才能に溢れた奴等には決して分からんだろう……」

「神人……お前は一体何を……？」

「斗剛・・・これが最後の忠告だ・・・帰れ・・・でなければ・・・」

・

「俺はお前を連れて帰ると言つた・・・！例え人を殺めようが、例えヒトでなくなろうが、友であるお前を・・・！」

「斗剛・・・お前の知る羅義神人は・・・もつ・・・居な・・・い・・・」

そして、羅義神人は喋ることをやめた・・・

（）

（歴255年）

私はいつぞやのことを思い出していた。  
かつて我が友が訪れたときのことを。

「シンド殿？聞いてあるのか？」

目の前の席についた悪魔、同盟を組んでいるゲン・マドウが私に話しかけていた。悪魔、というのはゲン・マドウが自分でそう言つていたからだが、確かに奴の外見は何処かの大陸の伝承に出てくる悪魔に似通っている。大きな身体に闇色の皮膚や角に尻尾・・・デモノとも言つらしいが。

「・・・ああ、聞いている。マドウよ、その貴様が張つた結界ならば転送魔法とやらを防げるのだな・・・？」

私が言ひとマドウが、

「まあの。それに関しては抜かりはないわい。だが、我らに比べれば強さが劣るとはいへ、あのアルカードを単騎で倒せるほどの者の正体は未だに分からんがの・・・」

「だが、あの犬つころ如きなら倒せる奴はござりじろ居るんじやねえか、此の大陸なら？」

と、闇の三強のもう一角、ランザー・レオパルドがあつさりした口調で言った。

この男・・・いや雄は魔力こそ大して扱えないがその身体能力と体術のみで私やゲン・マドウに匹敵する強さを誇る獣人だ。人獅子といつたか・・・獅子というのは猫の一種らしいが、猫にしてはこの雄、余りにも獰猛な顔つきをしている。そして人、いやいつぞや見たような鬼族のごとき手足を持つ。獸にしては頭が回る油断のできない輩だ・・・

「我もそれは考えた・・・が、そこで問題になつてくるのがその大きさじゃや」

「大きさ？ああ、闇騎士の配下の目か・・・そう考へるとでかい魔物なら確かに目立つな」

「そうじゃ。だから大きさとしては単騎なら精々我程度の大きさか。それでも転送魔法ならそれなりに大軍勢で移動できるがの」

「……やはり可能性が高いのは魔導の使い手、それも現在はマドウのみが使える失われた魔法、のようなものを使い手ということになるか……」

「そうじゃの。魔導の使い手と言えば我は鬼族を思い浮かべたが。かつてのデュカ・リーナのような……」

「デュカ・リーナ？ ああ、あの婆か。あの時は4人がかりだつたが、それなりに強かつたやつだな」

「デュカ・リーナ……百年程前に私に会いに来た……と思われる鬼族の老婆か。何の話があつたかは知らんが……気のせいかそれ以前に会つたことがあるような……？」

「……鬼族か。だが、マドウよ。私はかつて鬼族の住み処に行つたことはあるが、貴様ほどの魔力を持つ者は居なかつた……失われた魔法、というのは莫大な魔力が必要なのではないか……？」

「まあの。ふむ……アルカードはいつたい何者に襲われたのじゃ……？ 考えれば考へるほど分からんわい」

「意外と神や竜とかが姿を変えてそれに襲われた、とかじやねえのか？」

「実力だけで考えれば、それはありそつじゃが……何のために……？」

・?

「いや、それは分からんが」

「ふう。まあ見てもいない者の正体をあれこれ考へても詮なき」と  
じや。それよりも、具体的な対策を――――――

結局襲撃者が判明しないまま、襲撃者が現れた場合は皆で協力する、などの複数の意見をまとめてその会合は終了した。

結論から言つとオクトリーチ、大蛸は食えた。  
そのまま食つたり、焼いたり干したりもしたが量がかなりあるので  
未だに無くなつていない。  
いい魔物だ。

「・・・それにしても、以前遭遇した時は最新鋭の大砲ですらかな  
り苦戦したものだが・・・」

ガルティアがそう言った。

「ああ、そういうやつてたな？でも、地上とかで使う場合、相手が魔物じゃなかつたらあの大砲つてどのぐらいの威力なんだ？」

俺はそう言った。

以前村に来た行商人に火の大陸の大砲の威力を聞いたら、射程は約20m程で太い檻の木ぐらいなら平氣でへし折る、という大まかな仕様ぐらいは聞いたことがあるが・・・

「そうだな・・・大凡だが砲弾1発で石の家1軒を粉々にできるかどうか、といつところか・・・」

「へえ！大した威力だな・・・ん？ならなんであんなふにやふにやな蛸にはそんなに弾が必要だつたんだ。10発つて」

「・・・わからん。だが、最初に何発か撃つたときオクトリーチに大砲が当たつている筈なのにやつの身体に傷すらついてないようになえたような・・・」

「ああ見えて、身体が凄く硬いってことか？」

「私もそう思つていた。しかしyeその肉を食つてみると・・・」

「旨かつたな！違つか・・・そつだな。柔らかかったな、あいつの身。

・・・といつ」とはもしかして、」

「鬼族の言つていた魔力のようなものを纏つっていたのかもしけん」

「魔力か……それはあるかもしれないな。凶暴だったしな」

「それも、ここ最近のような気がするが。大分前に聞いた話では滅多に人は襲わない生き物だという話だったのだ」

「ふうん。腹が減つて機嫌が悪かつたとかかな？」

「まさかな……それにこの前遭遇したものよりも一回り大きく見えたような……気のせいかも知れんが」

「食いではあるよな」

俺がそう言つとガルディアは何故か疲れたような表情をしていた。

（）

「あの日、この場所で、あの青年に会わなければ私はどうなつっていたかしら……」

私はもう思い出すらおぼろげな数万年前のことを考え一人呟いていた。

「息子を失つた悲しみにうちひしがれて生きる気力すら失つていたかしら……その後人間としての寿命を全うして……でも、今は会いに行けないけれど私の息子はの大陸に確かに存在している……！そう考えれば、今は幸せ……と言えなくもないかしら……」

未だにあの青年の言つ通りにしてよかつたかどうか自問するときがある。

100年程前に消滅しかけたときも生への渴望を感じ、何とかこうして生き延びたにも関わらず……

「……でも、前の私の身体のときよりもそういう感情が強いのよね……後悔という感情が……やはり私に身体を乗っ取られたこの子の身体のせいかしら……？心配そうな瞳で見ていたものね……」

私が消滅を免れて目覚めたときにこの身体の持ち主の家族らしき者の表情を思い出していた。

私もかつて人間だったころはあのような表情をしていたのでしょうかね……

『……汝……』

私が思い出に浸つていると、何処からともなくそんな声が聞こえた。

「……？誰？……何処に居るの……？」

声はすれども姿の見えないその存在に私は話しかけた。

『……汝のその想い……大切な何かを失いしその黒き感情……我は感じたことが……ある……？』

その存在はこちちらに話しかけてもあり、独り言を言つているふうでもあった。

「・・・？貴方は誰・・・？」

『・・・我是火の竜・・・汝、人間・・・否、魔の者よ・・・汝はかつて我に会ったことがあるのか・・・？』

火の竜・・・？それに何故、言い直したのかしら・・・？私は人間には見えないでしょうに・・・この声の存在は魔力だけを感じ取ることができるということ・・・？

「会つたこと・・・？わからぬけれど」

『・・・我の記憶違いか・・・しかし・・・』

「貴方はずっと此處に・・・？」

私は辺りを見回しながらそう言った。

『・・・もう三万年にもなるか・・・我が強大な魔の者に封じ込められて・・・』

！？

・・・この場所、火の山の奥に三万年も居る・・・？そう言えば！あの時・・・あの青年に出会ったとき、幼い頃に見た竜が居たような記憶があるけど、いつの間にかその姿が無かつたような・・・？

「見えないけど・・・貴方の姿はもしかして、竜なの・・・？」

『・・・そうだ。先ほども言つたが、我是火の竜・・・今は・・・魔力を、身体を封じ込められ・・・姿は岩と化して・・・あるがな・

・  
』

そう言われて近くにある大きな岩を見てみた・・・・・すると、その岩から微かだが魔力を感じた・・・

「成る程・・・三万年前、そしてこの場所、強大な魔力の持ち主・・・貴方はおそらくデュカストテレスに封じ込められたのね・・・魔法で・・・」

『・・・デュカストテレス・・・?それが我をこの場所に封じ込めた、魔界の統括者の名か・・・』

「・・・そうね。でも、だとすれば私は貴方に会つてるとも言えるし、会つていないとも言えるわね・・・」

『・・・?汝の言つことは不明だが・・・』

「つまりね――――――

私は以前に別の肉体で此処に來ていたこと、その時に願いを叶えるためヒトとしての生を捨てたこと、さらに現在は別の人間の肉体に転生していること、などを説明した。

『・・・真魔の祖・・・人間を闇に墮とす存在・・・我を封じ込めた・・・悪しき・・・』

「そり、それが・・・」

『・・・デュカストテレス・・・奴を滅ぼさねば・・・何れこの人間界にも・・・龍神界にも・・・混沌を・・・だが、この状態になり我は僅かな魔力しか扱えなくなり・・・永年蓄えた魔力で創つたものも、人間に持つていかれ・・・どうしようも・・・』

「そうね・・・それに、仮に貴方が力を取り戻したとしても、あのデュカストテレスには・・・」

『・・・無論、我的力のみではあの膨大な魔力の主に遠く及ばぬだろう・・・だが・・・』

「なに？何かあるのかしら？」

『・・・我が眷族の力を併せれば或いは・・・』

「眷族？」

『・・・この世界の各大陸に一体ずつ顕現しておる・・・龍神界の者だ・・・』

「各大陸に一体ずつ？・・・もしかしてこの大陸に伝わる七神剣物語というのは、その存在に何か関係があるのかしら・・・？」

『・・・七神剣物語・・・？・・・』

「まあ、貴方が元の力を取り戻せばそのあたりも分かるかもしだいわね・・・」

『・・・汝は・・・何を・・・』

「いいわ。貴方に力を取り戻させてあげましょ、う」

『・・・・・？・・・汝にそれができるのか・・・？』

「多分だけれど・・・でも、もしそれができるたら貴方は私に力を貸してくれるのかしら？」

『・・・・真に我に力が戻るならば・・・約束しよう・・・汝へ我が力を貸す・・・と』

「決まりね・・・その岩に貴方は姿を変えられているのよね・・・」

私は大きな岩を見ながら『ユカストテレスが施したという、おそらく失われし魔法・・・封印魔法を解除するため、自らの魔力を高めた。

そして、

「魔封印滅！」  
シーラーキャンセル

と、呴えた。

すると岩が崩れ、

『礼を言ひ・・・魔の者よ』

いつか見た、巨大な竜が田の前に現れた・・・

（）

「・・・貴方なら何かご存じではないですかの？」

『えーー何のことかな?』

「何か知つておりそうなお顔ですね・・・」

『まあね!知つてるわー!ただそれを言つたら面白くも何ともないでしょ?』

「・・・いや、面白いとかではなく・・・」

『まあまあー別に狼君を殺したのが誰だらうといこの世界で君に敵う者なんてそういういないんだから!』

それに、ざつちみぢやることは一緒によね!』

「・・・たしかに。それに話した感じではあの者達ではないのは間違いないね!さうですしの・・・」

『わうだねーあれは違うよーと、だけ言つておひつ それに一応同盟も組んでるんでしょ?』

「まあ、そうですが。我是鬼婦神の関係が一番可能性が高いと思つておるのでですが・・・」

『ふふーん、それはどうかな！まあ、いつか会うときのためのお楽しみつてことで！

・・・おっと、じゃあ僕はもう行くね！色々見たいものがあるんで！またね、ゲン君！』

そう言つと、青年は消えた。

「・・・まったくあの方は、全てを分かつておきながら・・・」

と、悪魔のような姿をしたその者、ゲン・マヂウは溜め息を吐いた。

／＼＼

大鎧を外し姿見で「」の姿を見ると、そこには人ならざる者の姿が映つて見えた・・・

「・・・ふん。300年近く生きてきて若い姿のまとは、奇妙なものだな・・・」

人であることをやめた20半ばの時のままの姿の「」の姿に皮肉めいた言葉を呟いた。

「・・・矢張り兜を外せば立つものだな・・・」

人であつたときとの見た目の唯一の相違点・・・額の角を見ながらつぶやいた。

「・・・斗剛・・・貴様は何故私を放つておなかつた・・・貴様には己の技を後世へ伝えるという使命があつたのではないのか・・・

「

己の手で殺めたかつての友の不可解な行動に対し、やりきれない想いがあつた・・・何故、人であることを捨てた私に己の使命を投げうつ今まで会いにきたのか・・・

255年前・・・あの方に魔の力を頂いたとき、己を見失つた・・・鬼ヶ島から自分の村に帰つたとき・・・育ての親、同じ村に住む者、目に入る者全てを悉く殺した・・・殺さずには、いられなかつた・・・それでも、人間としての感情というものは1握り程度は残つていたのだろう・・・殺したあとの僅かばかりの後悔・・・かつての戦友への敬意や嫉妬・・・それらを思い、これ以上誰にも会いたくない、という感情から私は旅立つたのだから・・・此の闇の大陸へ・・・

だが、私が闇の大陸で魔物を滅ぼし、己の領土を拡大しているとき・・・奴はやつてきた・・・かつての友、斗剛一弥は・・・討ち漏らした誰かに聞いたのだろう・・・私の犯した所業を・・・奴は怒つていた。私のために・・・友である私のために・・・貴様はかつて言つていた・・・生まれつき持つ異形の力のせいで幼いころより迫害されてきた・・・と。

だが、それでも貴様は幸せだつた・・・他人とは違う力・・・他人よりも優れた力・・・貴様だけではない・・・須佐之男も火ノ牙天雄も・・・形こそ違えど他者を遙かに凌駕する力を持つていた・・・私は違う・・・並の武芸者よりも僅かばかりただ優れていただけだ・・・持つ武具が・・・

そんな私を同列に扱つた3人・・・嬉しかつた・・・誇りだつた・・・そして、憎かつた・・・

斗剛よ・・・貴様には話したが、物心ついた時私は育ての親から私を山の中で拾つた、と聞かされた・・・それは子供心に衝撃ではあつたが、私は子供の居なかつた育ての親に並々ならぬ愛情を注がれた記憶がある・・・武芸も学問もやりたいことをさせてもらえ、裕福な育ての親の家庭に私は何一つ不自由を感じることなく育つた・・・だが、私には3歳以前の記憶がない・・・いや1つだけ憶えていることは・・・とても大きく黒い何か・・・壁のようなものが私を閉じ込め・・・

それからの記憶、今でも覚えている記憶は・・・育ての親の顔・・・共に戦つた3人・・・討ち滅ぼしてきた敵・・・1人の老婆・・・他は全て闇の大陸での記憶しかない・・・私は完全に魔に染まつたようだ・・・あの魔石に願つた日から・・・友を手にかけた日から・・・

「お館さまっ。失礼します！」

己が姿を見ながら深い思考に沈んでいると、自分を呼ぶ声で思考が中断された。

「・・・何だ」

人を捨てて闇の大陸に来た自分に残されたものは力と戦しかない、と思いシンド・ラギは自分の部屋にやつってきた配下から新たな戦の話を聞き始めた。

「フンッ！フンッ！」

数百kgはありそうな岩を抱えたり降ろしたりと一人の男、いや雄が筋力増強に勤しんでいた。

「それにしても、闇騎士の野郎もゲンの爺もやる氣があるのかねえ。フンッ！フンッ！」

先日、闇の3強と呼ばれる3者が集まって話し合つた際に見た他の2者の態度を見てランザー・レオパルドはそう呟いた。

「大体、あの爺は何か知つてそうな素振りをしたり何か隠したり見えた目どおり腹黒すぎるし、闇騎士はあまり喋らずに殆どなんか考えてやがつたし・・・重てえな、フンッ！」

自分は眞面目に会議に参加したような口ぶりでそう愚痴を言つていた。

「転送魔法の使い手の可能性か・・・そんな奴より身体一つで凄まじい速さで犬っころの城に侵入した、とかそういう意見は出ないもんかあ？これだから、魔導にばっかり頼つてるやつらは・・・」

自身は生まれつき持つている膨大な魔力を殆ど全て身体能力の強化につき込んでいるため魔法を使えないための揶揄が口に出た。

「まあ、俺みたいにいつ攻められても準備万端となれば犬っころを殺したのがどんな奴でも関係ねえ！」

ハツ！」

ドガーンッ！

と今まで抱えていた岩を拳で粉碎した。

「ああーー！修行も飽きたなあ！そろそろ魔物でも狩りに行くか！」

そう言つて、半人半獣のその雄は闇の大陸の奥へ旅立つた・・・

（）（）

「おおー、ようやく見えて来たなー！」

俺は前方の海の先にある大きな大陸を見て感嘆の声を上げた。

「9日ですか。牽引しても速いもんですね。技術の発達した水の大  
陸製の船は！」

アズトも嬉しそうにそう言つた。

「ねえ、どのぐらい滞在する気なの？」

ネクの質問にアズトが、

「そうですねえ・・・商いの都合などもありますから・・・少なくとも2週間は居ますよ」

「そ、そつか！温泉巡り、買い物、色々できれいねー・つひひら」

ネクがアホ面で気持ち悪い笑い方をしていた。

「何か手掛けがあればいいのですが・・・」

リシナは何処かのアホ面とは違い深刻な表情をしていた。

「師匠ー探すの手伝ひー。」

「・・・手伝ひ」

双子が健気にそう言つた。

「わ、わたしも勿論手伝ひわよー・ただその合間にこみけっと・・・ってだけなんだから！」

「俺は別に何も言つてないが。言い訳じみてるぞネク・・・

「まあ、俺も色々な所を回るんだだから何か情報があつたら聞いことくよ」

「ありがとウザります、みなさん！私の我儘なのにすいません」

「いや、俺もそんなに無関係じゃないしな。それにあくまでもついでだ、ついで」

俺はリシナが頭を上げて言つたので慌ててそう言つた。

アズトが、

「ふむ。では、宿とか集合場所は着いてから決めるとして……それ以外は皆さんじ自由に行動されるといつことで！よろしいですね！」

嬉しそうに言った。おそらく商売の邪魔をされたくないのだらう。

「アズト……すまないが私は別行動を取らせてもらう」

それまで黙っていたミシルが口を開いた。

「え、ええ。今回はガルティアさん達に手伝って頂くのでそれは構いませんが。」

何処か行く当てがあるのですか？」

アズトが尋ねると、

「ああ。レビィアスからウォルス……があつた場所まで馬なら3日で行ける。ウォルス……があつた場所の中で、一つ確認したい所があるので……」

「確認したい所……ですか？」

「そうだ。私が国に居た当時は気にもしていなかつた場所だがな。レビィアスの探索団の話を聞いて真偽を確認したくなつた……」

「探索団の話？……ことは、レビィアタンに関する何か、ということがありますか？」

「そうだ。行つたことはないが。ウォルス王家に伝わる聖なる場所  
(水龍の祠)  
これがレビアタンと何か関係があるのかもしれん・・・

ミシルはそう言つて水の大陸に目を向けた。

## 第25話～求めたモノ～（後書き）

「意見」感想あればお願ひします。

## 第26話「世界を繋ぐ・・・」

（）

「世界は繋がっている」

私はかつて世界の7つの海を股にかけた。

その冒険の旅路にて胸躍る様々な体験をしてきた。

各大陸の人種、動物、人間以外の種族、それらに共通して必要なもの、それは太陽の光。正確に言えば太陽の光によって生み出される目に見えない物質。

（中略）

ある大陸に行つたとき聞いた面白い話では、行き方は分からぬがこの広い世界以外の何処か遠くに入外の者ばかりが住まう場所があるらしい。私はそれを聞いたとき、持ち前の好奇心と冒険家としての矜持から是非ともその場所に行つてみたいと思つたが、私にその話をしてくれた人外の者は私の力では無理だ、と言つた。そう言われるとひねくれ者の私は是が非でも行きくなる性分のため、手を尽くし何とかその場所へ行く手立てがないかを調べた。その結果・・・

いや、それはこの冒険記に書くものではない。何故ならこの冒険記は私が今までに行つた場所、体験を記すものだからだ。

人外の者のみが住まう場所・・・其処に私は未だに行つていないのでそれを書くのはこの冒険記の趣旨に反するし、私は自分で見聞きしていないものはどれだけ信用がおける者から話を聞いたとしても信じないことにしている。

・・・内容が逸れたが。

私はこの世界の様々な場所を踏破した証として、この冒険記を残したいだけである。

（中略）

古くから伝わる話の中で私が興味を持ったのは、世界にある7つの大陸には、伝承方法や内容は違えど必ずある一つの言い伝えがあることである。

それは時には、武器であつたり竜であつたり魔物であつたりだとか、様々な違いはあるが、共通するのは大きく別けて二つある。  
その存在が神の名を冠するということとその大陸を守護するものだということだ。ちなみに光の出身の私の守護神は、剣として伝承されていた。

この共通点を発見した私は各大陸に行つたとき、まずその伝承の内容を調べた。各大陸唯一無一のものだから同じ大陸内でも地域によつては細かい内容が違う場合も多々あつた。偽の情報を1つずつ検証して潰していく、最終的に残つた情報を突き詰めていくと、どの大陸にも必ず1つとある場所がある。

それは大陸によつては竜の住み処、神剣の刺さつた山、魔物の巣、と言葉や表現は違うが各大陸に必ず1つその場所がある。

一度私はその場所で不思議な体験をした。  
もし、これを読んでいる人が居たら一度自分で試してみてはどうだろうか。

ここで詳細は語らないが1つのヒントをあげよう。

それは、世界は繋がつている、ということだ。そういう気づきの通りこの冒険記の題名だ。

ここまでこの文を読んでくれた懸命な読者なら私が何を言わんとするかお分かりになるとと思つ。

（中略）

最後になるが、

私がこの冒険記を遺すのは様々なる多くの人達にこの世界の素晴らしい  
さをもつと知つてもらいこの世界をもつと好きになつてもらいたい、  
といふこと对他ならない。

私はようやく知りえた人外の住み処「魔界」へ冒険の旅に出ようと  
思つ。

危険な場所だということだが、なに私も一端の冒険家、様々な知識  
や生きる術があるのでそうそう行き倒れることもないだろう。  
上手く見聞でき無事に帰つてこれたらその体験をもとに新たな冒険  
記を書くのでその時はまた、よろしく。以上で私の30年に亘る世  
界冒険記を終わる。最後まで付き合つてくれた親愛なる読者へ感謝  
を込めて

著者

冒険家 ドレム・オロラ

（）

アズト・ミタラから連れの元ウォルスの王宮護衛騎士ミシル・タイ  
ナという男が別行動を取り、かつてウォルスがあつた土地しかもレ  
ヴィアタンにまつわる何かがある可能性の高い（水龍の祠）という  
場所を目指す、と聞いたとき私はレビュイアタン探索団団長としても  
個人的にも是非この目でその場所を確認したいと思つた。

と、同時に幼い頃に見た、ある冒険家の冒険記の内容を思い出した。

ただ、私がミシル・タイナについて元ウォルスがあつたその場所へ  
行くのはすぐには不可能である。というのも、レビュイアス国から支

援を受けている探索団の性質上、探索団団長といえど私には目的地を決定する権限が無いからだ・・・今回火の大陸へ行つたことも、元は祈祷師が場所を探りその結果を王に伝え王から私に命令された、という方式を取つたからである。

であるので、まずは今回の探索の結果を王に報告し、その後にウォルス跡への探索が可能かどうかを王に打診しなければならない。だから、私は探索団副団長とアズト・ミタラを連れて今、こうして王の下へ向かつてゐる。

しかし・・・隣国<sup>だつた</sup>のウォルスにレビューアタンにまつわる何かがあつたなどと。

燭台の周りは最も暗い、という格言をふと思い出し、探索団の行動の指針を効率的に決めるには祈祷師に頼るよりも隣国や他の大陸との国交を深め情報を密にするほうが良いのではないか?とガルディア・ソーアは口に出せないことを思つた・・・

／＼＼

町で歩く人を見るにミシルやガルディア達のように見た目が金色の髪に白い肌の人達が多く目立つた。

俺達・・・俺とネクとリシナとアリナとユリナの5人も歩いているところ、じろじろと見られたが、そんなに珍しいのか?そんなに頻繁じやないにしろ火の大陸と水の大陸は交流があるから、この町の人達は火の大陸の奴なんて見慣れてる筈なんだが。(ちなみに貨幣である丸は使えないため、みんなガルディアに両替してもらつた。水の

大陸の共通の貨幣は「テラ」というらしい。

一「テラ」の価値は約五丸と

(緒)

ともあれ、昼過ぎにレビュー・アスに着き宿に荷を置いた俺達は、今日のところはとりあえず近くを散策しようということで町をぶらりと歩いていた。アズトはガルディアに付き合つてレビュー・アスの王に会いこの国での商売の許可を貰いに行くとか。

探索団の連中は王に会いに行くガルディアと副団長以外は船の整備やら仕事やらで何処かに行つた。

ミシルは船が大陸に着いてすぐに馬を借りて自分が元居た国へ旅立つた。リシナも今日は近くを色々と見たいという双子に付き合つて調べものは明日からするらしい。

そんな感じでレビュー・アスに着いた俺達は5人連れだって港がある町を歩いていた。

「あれはもしかして？」

辺りを見渡しながら歩いていた俺は何かを売つている露店に気づいた。

焼き魚！

「十個くれ！」

俺は露店に近づき声をひと言ついた。

「また無駄遣いして・・・」

後ろでそんな声が聞こえたが。

「兄ちゃん、大したもんだな！」

焼き魚の露店のおつさんがそんなことを言つたので、「？何が？」

「いや、何がつて兄ちゃん？あんな別嬪さん4人も連れて…まだ、若いのに大したものんじゃねえか。愛人全員連れて旅行か？」  
「いや、待てよおつさん！何でそうなる？」

びっくりした。このおつさんは何を言つているんだ？

「えつ？だつて、兄ちゃんが4人全員を食わしてるんだろ？それに兄ちゃんの出身の大陸は一夫多妻制じゃないのか？」

「一夫多妻制？・・・・・ああ、そういう」とか

そう言えば、どこかの大陸では一夫多妻つまり男一人に対しても女が複数という、生活費用がかなりかかる制度がある、という話を聞いたことがある。

何でもその大陸ではある時期に大きな流行り病で人口、特に男が大幅に減少した時期があつて、その対策としてその大陸では減少した人口を補填するという目的でそういう制度を作つたとか。その大陸は確か・・・

「おつさん。俺は風の大陸の者じやないぞ」

「あ、そうなのか。じゃあ勘違いしたな。ということは火の大陸なんか」

「そうだ。結婚もしていないしな。それにこれは俺が全部食つるために

買つたんだ」

「そ、そうか……いやな、つい先日も兄ちゃんみたいな黒瞳黒髪の風の大陸出身の男が2人ほど女性を連れて魚を買っていったもんだから。てっきり愛人を連れてレビュース旅行が流行つてんのかと思つて」

「へえ。風の大陸のやつがな。遠いのにな……」

「もうだな。その男も若かつたし」

「まあ、どうでもこいやーじや あなたおっせんー。」

俺は焼き魚のお代を払いその場を後にした。  
4人に合流し、

「何話してたの?」

ただ、焼き魚を貰つにしては時間がかかったので、ネクが聞いてきた。

「何といふか……文化の違いについて、かな

「ふうん。何の違い?」

「結婚について」

「……?」

「どうした、変な顔して？」

「あ、あんたでも結婚に興味とかあつたの？…？」

「やういうわけじゃなくてだな・・・」

俺は露店のおっさんとのやり取りを話した。  
旨いなこれ。

「なんだ・・・」

ネクが何故か拍子抜けしていた。

「まあ、珍しいことでもないさ。以前聞いた話だと風の大陸の奴は  
よく他の大陸に行くらしいし。

それにしても風の大陸の奴か・・・見た目は火の大陸の奴の見た目  
に似てるらしいけどどんな顔か見てみたいな」

俺は此処に来たという風の大陸の奴がどんな顔かを考えた。

「きっと、あんたよりは顔がいいでしょうねっ！」

ネクが急に不機嫌そうに言った。なんでだ。

他の者より一足先に首都カグツチに戻った私は今回の神剣探索の結果をシバ宰相とシェル姫にどう報告しようか、と頭を痛めていた。・人当たりの良いスサノオ王は姫が元服し政務に携わり始めて間もなく何処かの大陸へ行かれたということらしく少なくとも2ヶ月は首都にご不在である、というのも報告のし難さに拍車をかけている。

そういう悩んでいるうちに執務室に辿り着いてしまった。

「失礼しますっ！ サイハですっ！」

執務室の扉を開けると中にはシバ宰相が居た。  
？姫は？

「早かつたの、ガロウ」

「ええ。早めに対策を練る必要があると判断し私だけ先に走つて戻りました」

「走つて・・・？お主いつたい？いや、それよりもその口ぶりだと結果はあまり芳しくなかつたようじゃの。もしや見つからなかつたか？」

「ええ・・・今回の結果なのですが――――――」

私は、神剣探索の結果を報告した。

「成程・・・竜、それにオーラか・・・ナシラやお主のいう通り神

剣は必要が無いとはいえたなんとも間の悪い話ではあるの・・・まあ、オーラに関してはお主の武の腕はこの大陸では最上位に位置するから。容易く身につけられたのも納得はできるが。」

「・・・それで、いかが致しましたよう。先ほど言ったように、イグナで聞いたところトウヤ・ヒノカはどうやら火の大陸を出たらしいのですが」

私が竜と話して皆と相談した次の日にタチオ殿を再度訪ねたら、神剣（と思われるもの）はタチオ殿の先祖が持ち帰っていた、とのことだった。それをつい先日旅に出たご子息のトウヤ・ヒノカが持つており、鬼ヶ島の報告書からトウヤ・ヒノカがアズト・ミタラと共に行動していることを思い出した私がイグナのアズト・ミタラの拠点で足取り調べたところ、やはりまた一緒に旅に出たらしい、といふことが判明した。

「そちらはとりあえず置いておこう。神剣はそれほど重要な案件ではなくなったしの。今は各町村の防衛の強化が最優先じゃ。・・・それにしても、魔物の活性化の原因はなんじやうつな・・・学者を交えて一から策を練り直さねばならんの」

シバ宰相が疲れた顔でそう言った。

「そうですね。警備部の者が戻りましたら部隊の細分化や各町村への出張対策について等の話し合いをしようと考えております」

「つむ。そのあたりの案や部隊分けについてははお主に一任してや

つてもう一つ。最終的な決定は此方で行つがの」

「了解です。それとオーラに関しては・・・」

「皆が使えば確かに大幅な戦力増強になるが、時間がの」

「そうですね。自分で言うのもなんですが、適正が低い者は時間がかかります。魔物対策が先ですね・・・」

「うむ。まあそれについては追々の」

「了解しました。ところで姫様はビハリへ?」

「・・・用事があるので休むらしい。もう三日経つが・・・」

苦虫を噛み潰したような顔でシバ宰相はそう言つた。

（）

レビュアスに着いてから4日目。

俺は宿の近辺にある食堂は大体行つたと思う。

いや、別に食う以外してないとかじゃないぞ?

この辺りはレビュアスの港町でそこまで珍しいものがあるわけじゃないとはいえる。

そろそろ此処を出てアズト達が向かつた王都にでも行こうか、とは考えている。だが未だに此処に留まっている。

それは何故か?

「・・・」

「大丈夫か、ネク？」

ネクが一昨日からどうやら風邪をひいたらしい。

それで、1人異国に放つておくわけにもいかず俺は宿と一緒に留まつていてる、というわけだ。

リシナ達はネクを見捨てていくのは心苦しそうだったが、俺が1人で充分だと断りやつと旅立つた。その時何故かにやにやしていた気がしたが・・・

まあ、俺は期限の2週間後までこの港町に居ても構わないと思つてきている。

料理、特に海産物がやたらと旨いからな。

いや、それなりに収穫もあつたからだが・・・

「じめんね、トウヤ・・・色んな町に行きたいでしょ・・・」

「気にすんなつて。今読んでるこの書物はすごいぞ。色んな大陸の知識が増えるんだから。治つたらネクも見てみろよ。面白いぞ」

さすがにレビュースタジアムの玄関口と言つべきか。

料理屋を含め土産物屋、海産物屋、食料屋、そして本屋がこの港町には充実している。

旅に書物は必須だからな。

とにかく、俺は子供の時に疑問に思ったことがある。規模の小さい

カリュウ村とはいえそれなりに人の出入りはある。

カリュウ村の住民とは違う肌の色・・・褐色の大きなおっさんだったかな？俺は子供のときカリュウ村にやつて来たそのおっさんを見てどうしようかと思った。というのは、どう話しかけたらいいのか分からなかつたからだ。

だが褐色のおっさんは普通に喋つてくれた。それに見たこともない茶色の甘い食べ物、豆を原料にしたお菓子をくれた。  
おっさんの名前はなんだつたかな・・・憶えてないがそのときはおっさんが紙に書いた自分の名前を読んだ・・・読めた。

そう、俺が疑問に思つたこと。それは何故同じ人間ではあるが細かな種族で言えば肌の色や髪の色、生まれ育つた場所が全て違う者同士なのに喋れば分かるし書いた文字も読めるのか、ということだ。  
鬼族や魚民とかだつてそうだ。今もこうして俺は水の大陸の書物を普通に読んでいるし。

冒険記と書かれたその書物を読んだら、そんな子供のときふと感じた疑問が解消されたような気がした。

・・・成程。

世界は繋がつている、か。

・・・その書物を途中まで読んだところで小腹が空き、何かネクでも食えそうな軽いものでも買つてくるかと、俺は宿を出た。

／＼＼

確かこの辺りだつたような・・・?

私はあたり一面焼野原となつたウォルスを進んで來たが。記憶違いか？

それともあの女の魔導の術で・・・

「いや、もう少し海側だったか？」

ウォルスで騎士をしている当時は自分の職務と鍛練にしか興味がなかつたので、王家に伝わるという場所、水龍の祠の正確な場所をいまいちよく憶えていない・・・

「おお・・・此処か。どうやら焼けてはいないようだ」

ミシル・タイナは微かな記憶にあつた場所へと辿り着いた。

／＼＼

不死鳥の血を飲んで魔力がどれだけかつての身体に近づいたか？

それを試すために復讐すべき相手の中で最も弱いアルカード・ブラッディをまず倒したが、失敗したから？と私は思った。

あのあと偵察のため闇の大陸の端あたりに行こうとしたら転送魔法が使えなくなつていたからだ。

以前は使えたのに何故？と思つたが、狼がやられたことに警戒した魔導王あたりが転送魔法に対する結界を張つたのだろうと気づいた。さて、どうやつて近づこうか？もしかして今度こそ帰つて来れないかも知れない・・・あれを誰かに使ってみたい。等と色々あれこれ考えて、私は人としての生が終わつた場所、人以外の生が始まつた場所、つまりこの三万年の生の原点に帰つてきて思い出に浸ろうと

したわけだが。

そこで思わず出会いがあった。私が会ったその存在……火の竜は、三万年前にある者によって岩の姿に封印されていたが、その話を聞くうちにどうやら役に立ちそうな事が判つた。

ただ、火の竜は永年封じ込められていたせいか魔力が大きく減少しており回復に時間がかかるのですぐには動けないらしい。

じゃあ助けた甲斐がないじゃない。それに他の竜の眷族はどう探せばいいの。と若干強い口調で尋ねると、火の竜は動けない自分の代わりにと、ある便利な場所を教えてくれた。

それが、

「これね。龍巣か……」

それは龍巣という各大陸に1つある竜の眷族の拠点らしい。この火の竜の拠点は火の山のさらに奥、洞窟内にあった（本人（竜）は入らないのでは、と思ったが身体を縮めたり姿を人間のように変える術があるらしい）

火の竜の話だとこれを使えばどの大陸の龍巣にも行けるらしいが……

「さすがに闇の大陸の龍巣にいきなり行つて魔物だらけだとね……」

闇の大陸の魔物は理性のない化物が大半だ。しかも異常に強い。やられることはないだろうが目的の者に辿り着く前に魔力をかなり消費してしまうだろう。いや、闇の大陸は障気が濃いから回復も早いか？しかし嗅ぎ付けられそうでもある。色々考えた結果、

「とりあえず試してみましょうか・・・」

私は龍巣の洞窟最奥にあった、魔方陣に近づいた。

「へえ。こんな文字があるのね」

おそらく竜族特有の文字で書かれたのだらう。見たことのない文字が魔方陣に書かれていた。

それの上に乗ると、

「確か・・・この上で行きたい大陸を言えればよかつたと言っていたわね」

私は僅かに考えて、

「ものは試しか・・・・・水の大陸の龍巣へ！」

私が叫ぶと魔方陣が光り輝き、私は温かい何かに包まれる感覚を感じた・・・

デュカ・リーナの姿は火の大陸の龍巣から消えた・・・

／＼＼

私は記憶にあつたその祠、中に泉のあるそこの奥に入った。

「何も居ない、か」

ウォルス王家にのみ伝わるとされるこの場所を私が知った経緯は何のことではない。

何年前だつたか、18歳を迎えたウォルス王子が成人になった王家の人は必ず此処に来て中にある泉の水を一掬い持ち帰らなければならぬ、という決まった儀式があり1人では魔物などが出来たら恐ろしいという王子の警護で王子が私を伴つたため、私はこの場所を知つていただけだ。

「あの中にもしかしたら、神獣が潜んでいるかとも思つたが……」

それなりに大きな祠の奥にある泉を見て私は呟いた。

「どう見ても何も居ないな

それでも一応泉の底まで見てみるか、と思つたときだつた。

「光り出した・・・？」

直径五m程度の泉が淡い光を放ちだしたのは。

「もしや、此処は本当に?」

少し興奮して私はその泉を見ていた。

ザバッ！

泉から何かが飛び出るような音がした。

！？

その姿を見ると、

「・・・聞いてないわね・・・転送した先が水中だなんて・・・」

泉の中から出てきた何かは、私が忘れもしない、忘れようもない、憎き仇の姿をしていた・・・

第26話「世界を繋ぐ・・・」（後書き）

「意見」感想あればお待ちしております。

## 第27話 欲するものは

（）（）

三度目。

突然この機会が降つて湧いたような形になつたが前回この少女と相対したときよりも私はさらにオーラの闘法の上達を果たしている。今度こそは憎き仇を討つ・・・！少女の顔を認めた瞬間私はそう決意し持てるオーラを全開にした。

そして、

「前の時より感じるプレッシャーが上がっている？貴方はまた強くなつたのね」

少女デュカ・リーナが感嘆したようにそう言った。

「・・・私自身の力はそう上がりではない。会得しただけだ・・・オーラの闘法の真髄を・・・！」

私はそう言つと泉から出てきたデュカ・リーナへオーラ、そしてプラーナを纏つた全身で斬りかかった。

「・・・！速いつ！」

私は一瞬で距離を詰め袈裟懸けに斬つた。

が、かわされた・・・！

「危ないわね・・・この速さがそのオーラとやらの真髓なのかしら？」

私が連撃を繰り返すも全てかわされる？この少女、以前より速くなっているのか・・・？

だが、私は、

「そうだ！」己の力のみではない！大気の力を借りてっ！

言いながら態勢を整え剣を正眼に構えた。

「また、お得意の突き？そんなのは通用しないと何度も言えれば・・・」

「ハアアアアアッ！――！」

一呼吸で突きを20程繰り出した・・・！

「なつー?く、しまつ

ズバツ！グサツ！

手応えがあった。

「・・・痛いわね。以前よりも凄まじく速くなっているし・・・」

少女の身体に数ヵ所突きが当たっていた。

「どうだつー今度こそ貴様を討つひー。」

「・・・龍巣を出ですぐに戦つとは思つてなかつたから杖は置いて来たのだけれど・・・」

「言いながら、テュカ・リーナの傷がみるみる塞がつていぐ・・・龍巣？・・・いや、そんなことよりも、

「ちつーやはり魔導とやらか。即座に回復するとは・・・」

「・・・これは単に身体が再生しているだけで、別に治癒魔法を使つてないのだけれど？」

「なにつーどうことだつ？ 貴様は不死身のかつ？」

奇怪な魔導の技を使わずとも身体を治すだと・・・  
それではこいつは正真正銘の・・・

「化物め・・・」

「・・・・・・・・・・・・やうね。そのとおりだとゆづわ・・・」

私がそつとその少女、テュカ・リーナは寂しそうな顔をした・・・?  
?

「だが、化物とはいえ首を落とされではさすがに生きてはいまい・・！」

「・・・まあ？どうかしらね？それにその言い方だと次は馬鹿正直に首を狙う、と言っているようなものだと思つただけれど？」

「貴様が得体の知れない化物である以上、言葉で惑わす小細工や駆け引きなど必要ないつ！私の全力の速さと威力を持つて貴様を倒す・・！」

持てる限りのオーラ、取り入れることのできる最大限のプラーナ、を全身と剣に纏い、

「セイヤアアアアッ！」

首を狙つた最速の一撃を放つた。

ブンッ！

だが最速の一撃はかわされた。

「・・・危ないわね。でも、貴方は最初会つた時よりも本当に強くなつたわね。人のままにも関わらず・・・」

「貴様を倒すためだつ！私の全てを奪つた貴様をつ！」

・・・癪な話だが、私がここまで強さを求めたのも初めてあつたときにはデュカ・リーナの圧倒的な実力を目の当たりにしたからだ。そ

の圧倒的な実力の者を倒すために・・・

そして、オーラの闘法、プラーナの存在を知ることができ体得できたのはまさに幸運だった。

ここまで強くなれるとは・・・！

・・・感謝するぞ、トウヤ。

だが、  
再度、下への斬撃の囮を織り混ぜた攻撃を繰り返したが、当たらなかつた。

「貴様・・・以前よりも速くなっているのか・・・？」

それに感じるフレッシャーも増えて、いる・・・？

「そうね。以前と比べたら・・・」

「それも魔導とやらの力か・・・！」

言いつつ威力を抑えた速度重視の剣撃を繰り返す。

再度一撃当てて奴に隙を作る・・・！

「・・・本来のチカラを取り戻しただけ、といふといふかじり・・・？」

デュカ・リーナが私の攻撃を見切り、かわしながら言つ。  
あの杖がない今が好機だが、当たらん・・・速い・・・！

「本来の力だと？私を、この国を、滅ぼした時は違つとでも言つのかつ！」

「おつとど。・・・。そうね。あの時は六割から七割、といったところかしら・・・？」

「戯れ言をつ！ウオオオオオオオオオッ！？」

ドンッ！！

一瞬の隙に私は祠の天井に叩きつけられていた。

・・・攻撃が見えなかつた、だと・・・？

「ガハッ！・・・貴様、今何を？」

「・・・何を？」と言われても、貴方の強さに敬意を表して、「

言いながらその右手を此方に向けて翳し、

「いひしただけよ・・・！」

横に振りはらつた。

ブオンッ

「グツ！凄まじい突風が・・・！」

ズザザザツ

奴の居る方向からその場に立つていられない程の強い風が吹きつけてきた。

後ろに飛ばされてしまつ・・・・・魔導の技か・・・・・！

私が正面から風を受け止めていると、

「・・・・さすがに正面からの疾風だと貴方の強さなら耐えられるのね・・・・じゃあ、「ればどう?」

そつと奴は両手を合わせ、

「ウイングソード  
風刃!」

剣を持つていてるような構えを取つた・・・・?

「剣術はあまり得意じゃないのだけれど・・・・ハツ!」

此方に振りかぶってきた。

魔導の技かと警戒し、私は横にかわした・・・・

ズガニッ!

!?

デュカ・リーナが見えない何かを振りおろした地面が抉れている・・・?

「あり・・・・やはり剣では貴方を捉えられないわね

「剣? 視認できない剣だと・・・・!」

「魔導・・・無から有を造り出す技・・・貴方にはそう見えているのでしょうか？」

何だ？奴は何が言いたい？

「だけど。先ほども言つたけれど貴方の強さ・・・・・・・・・いえ、人間が辿り着ける最高峰の場所にまで己を高めたそのチカラに敬意を表して・・・」

デュカ・リーナはそう言つと、両手の握りの部分を此方に向けた。もし、本当に見えない剣が其処にに実在するならば・・・・

「最低限の魔力で、」

言いながら此方へ距離を詰めてくる・・・

私は剣を構え直した。剣士と相対するかの如く。

「殺してあげる・・・！」

「其処だつ！」

ギインツ

私が奴の両手から予測した場所に何かを感じそれを剣で受け止め、た？

剣と剣がぶつかり合う音だと？

「ぐつ。本当に剣らしきものがあるとは・・・どうこう技だ・・・！」

「見えないそれを受け止める貴方も大したものだけれど……。  
爆裂！」

バーンツ

「グアツ！」

何かが弾ける音がし、奴の手元から大きな衝撃を感じた。

特に痛みは感じないが。

「ハアツ！」

そのまま近くに居る、筈の奴に剣を振ったが空振りし、辺りを見る  
と奴の姿を見失った。

「ふう・・・動きといい力強さといい悪くはないけれど。このまま  
じゃ私には届かないのじゃない？」

後ろのほうから声がした。

「貴様、いつの間に？」「  
私が振り向くと、

「それに私にはやることがあるの。これ以上貴方に付き合つては居

られないわ・・・

「なつ！貴様！また逃げるのかつ！」

「逃げる？ふふつ。そうね。逃げるわ・・・」

「逃がすかつ！貴様を滅ぼさねば！私は・・・・・」

「その激情は代えがたいものだけれど・・・それだけじゃね・・・」

「愚弄するかつ！貴様つ！貴様だけはつ！ハアアアアアアッ！」

私は限界を超えてオーラを高める。

「・・・想いのチカラ、か。これも一つの可能性ね・・・」

「ウオオオオオオッ！・・・！」

全力をさらに超えた私の最速最高の一撃を・・・・・せめて一太刀を・・・！

ガキイーンッ！・・・

当たつた！だが・・・金属音？

「・・・・・凄い衝撃だつたけれど、硬度は此方が上だつたようね・・・

「

剣の切つ先を見ると奴は両腕を交差して、剣を受け止めていた……！

「何故だつ？先ほどは斬れた筈だつ！」

「……気づいていたかしら？先ほどから貴方の戦い方の真似をしていたことを？」

「？・？・？・？・！貴様まさかつ？」

「そう、身体を魔力で強化したの。貴方のチカラみたいにね」

「魔力・？・魔導・？・」

「正確にはエーテルだけれど……そんなことよりも貴方は「」の限界を認めるべきだと思うわ……」

「私の、限界だと……？」

「そう。というよりは人の限界、と言つべきかしら。人では、人のままで決して届かない高みがあるということを……」

「知つたようなことをつ！貴様に人の力の何が分かるつ！魔物と変わらない化物の貴様なぞにつ！」

あまりに此方を見下した言い方に、私は剣を振るのを忘れ怒鳴つていた。

「わかるわ・・・」

だが、私がそう言つと奴はデュカ・リーナは何故か寂しそうな顔をし、

「・・・・・・だつて、私も人間だつたから・・・」

と言つた。

「！？・・・貴様は生まれつき鬼族ではないのかつ！？」

「まあ、私のことはどうでもいいのよ。兎に角今の貴方程度では私に勝てない。それどころか、あの・・・」

言いながら、僅かに苦笑し、

「・・・そう言えば此処は神獣の拠点だつたわね」

急に辺りを見渡してそう言つた。

「貴様・・・！」

いつたい何が言いたい・・・そう言おつとしたところで、

「」の大陸には神獣に守護されているという逸話があつたでしょ？もしかすると此処にその神獣が居るかなと思つただけよ……」

何故こいつは水の大陸の守護神の話を知つてゐる……？

「まあ、魔力を持つてゐるという話だし魔力も何も感じない此処には流石に居ないか……でも転送できたから場所は間違つてはいな……？」

「何を、何を言つてゐる！」

奴が一人で不明なことを喋りだしたので私はつい尋ねるような聞き方をした。

「何だとつー貴様人を愚弄するのもいい加減に……！」

「何を？そうね……貴方が強くなれる可能性の話かしら……？」

「1つだけ言つておいてあげましようか……願う想いの強い人間は想い続ければいつかその願いが叶うものなの……だから貴方が私を殺したいと願つているならば、強く。そう何よりも強くそのことを願うことね……そうすれば、いつの日か……」

「貴様を殺せる、か……否、それはいつの日か、ではなく……今この時だつ……」

再び剣を振った。

が、

辺りに生暖かい風が吹き、

・・・見ると『デュカ・リーナの姿は消えていた。

「くそつーまたしても・・・」

いつぞや見た奴の魔導の技だろう。

いきなり現れたり消えたりするあの得体の知れない・・・

だが、此処まで強くなつた筈の私の剣すら届かないとは。

これ以上どうすれば・・・これ以上強くなるにはどうすれば・・・

奴を討つためには・・・

?

私が祠の中で座つて頃垂れていると、奴が消えたあたりの地面に何かが見えた。

私はそれに近づき手に取つてよく見てみた。

「これは一体?」

私はその拳大の黒く輝く石を見ながら、首を傾げた。

〜〜

「カグツチ資料庫」

其処では1人の少女、シエル・スサノオが書物を読んでいた。

政務を休んでも調べてみたものの・・・

「田ぼしい資料はない、か。これは資料というか・・・裏付けにはならないわね」

私は1冊の書物に田をやり、溜め息を吐きながらひとりじimedした。この3日ずっと文字を追つていたので田も疲れている。

現政府ができる255年・・・設立当初からの資料、書類など凡そ10万点程は、全て此処カグツチ資料庫に保管されているが、それ以前のものや大陸の歴史、神話等に関する物は微々たる量しかない。

「お父様も今は居ないし、色々なことに詳しいナシラもまだ帰っていないだろ?」シバは仕事しろって五月蠅いし・・・」

聞く相手が居ないのでこうして資料庫で調べていたが、

「ああー、もう少しこんなのあたしに合わないとつてのつ！」

頭を搔きながらいついた口調でそう言つた。

「でも、大昔にも魔物が居たのなら・・・」

私が疑問に思つて懇々政務を休んでまで知りたかったこと。それは、

「神剣と魔物の活性化に因果関係はないと思つたよね・・・」

先日シバと話していくて思つたことだが、どうもそんな気がする。

昔からそれこそ先祖の初代スサノオの時代から神剣がこの大陸にはあると言われてきて、未だに見つかってもないのに、魔物自体は昔から存在しているという記述が最近調べている多くの資料に載つてゐる。

おかしいとは思つていたのよね。

・・・そして、政務を休んでもそれを調べているのは、今の政府の運営の仕方に不満があるからだ。

将来的には自分が舵を取るカグツチとはいえ（既に婚姻云々に関しては既に諦めている）そもそもこの国には適性な判断ができる人物が余りに少なすぎる。

1人の学者の仮説を鵜呑みにし他に何もそれらしい意見がないからと言つて、その仮説の検証をするために何故下の者達はその意見以外を出さないのか。

下の者達とは具体的には、宰相であるシバの下、大臣達である。

特に政府の予算を握つてしたり、各町村との取引に直接携わつたり、大臣同士の会議で議長の位置に居る、宰相に次いで実権を持つてい

る1人の老齢な人物を思い浮かべ憎々しい顔をした。

まだ、あたしが政務に慣れてないからって好き勝手にやるもんだから・・・！

結局、現在の状況を見てみれば神官12名と警備隊1班を神剣探索につき込んで、折角謎の光の正体が神獣と判明したにも関わらずそちらに調査の手を割けない、という時間、人手の無駄をしている。

「はあー。でもそれらしい物も見つからないし・・・」

私は疑問に思つたこと、その仮説をひっくり返そうと今更ながら嫌いな書物の研究をし、神剣探索隊が帰つてくる前に「かつて魔物が活性化した時期があつたのでは？」という自分の説の裏付けを取り、大臣どもの鼻を明かしてやるうつとうして資料庫で過去の歴史を調べていたわけだが・・・

「これは、どうなのかな・・・少し違うか・・・」

先ほどから見ていた1冊の古い書物を見て呟いた。  
そこには、

〔滅んだ村〕

昔に、多分100年以上は前に書かれた物だろう、その書物の題名を見て気になつたあたしは中を読んでみた。

内容を大まかにいうと、何とかという今は無い村の住民が1体の魔物に襲われて自分以外の村人が皆殺しにされたという悲惨極まりなものだつた。最初創作物かと思って気楽な感じで読んでいたのだが、最後の頁を見るとその書物を書いた人物の体験・・・つまり実

話だと書かれていた。

命からがら隣の村まで逃げたその著者は何故そのような魔物が突如自分の村に現れたのか、何故近隣の村ではその魔物を誰一人見ていないのか、随所にそのことを不思議がっている記述が見られた。

これが実話だつたとしたら、いつのことか詳細は分からぬが魔物の活性化と何か関係があるので?と思ひ一応手元に置いていた。腑に落ちない箇所は一つあつたが・・・

「・・・魔物でも剣を使えるものなの?」

その書物に書かれていた、著者が見た魔物の姿は人に似通つており、黒い大鎧を身に着け黒い剣を持っていたとか。

／＼＼

俺はネクを宿に置いてオーラとブラー全開で走つていた。

一応、ネクには此処に戻つてくるから風邪が治つても待つてろよ、  
と言い残してきたが何か凄く不満そうな顔をしてやがつた。いや、  
お前・・・戻つてくるつて言つてるのに。

看病つて言つても近くに居て話するぐらいしかできない俺が居なく  
ても別にいいだろ?と言つと、蒲団を被つて無視するし。面倒くさ  
いからそのままほつたらかしにしてきたが。

それはともかく、俺が今こうして全力で走つている方角はウォルス  
という国があつた場所だ、と思う。

それは何故か。俺はおそらくウォルスという国があつた場所の方からオーラ、そしてプラークを感じたからだ。ウォルスがあつた場所に行くと言つていたミシルの・・・

それを感じたとき、最初俺はもしかして本当に神獣が其処に居て、何らかのチカラを示せ、みたいな儀式みたいなことでもやつてゐるか?と思つた。だが、途中でそのミシルの近くに何か嫌な雰囲気を感じたので、もしかしたら強い魔物か何かと戦つてゐるのかと思い、こうして全力でその場に駆けつけようとしている。多分150kmから200kmぐらい離れた場所だとは思うが・・・。焦つているのは先ほどからミシルのオーラも戦つていたと思われる嫌な雰囲気も両方感じなくなつたからだ。

決着がついた・・・のか?

俺は足を止めずに走りながらそんなことを考えた。

／＼＼

### ／闇の大陸の奥深く／

俺は強力な魔物でも居ないかと、一人でその辺りをうろついて歩いていた。

先ほどから魔物は結構出てくるが、それなりに手こじたえはあるものの俺にとつては大した相手じゃない。

獸の力だけでも百獸の王と呼ばれているこの俺には。

「おつと。そつ言えば此の近くだつたか

俺は闇の大陸に伝わる伝説を思い出していた。

「黒き魔神の巣……今の俺ならそいつも斃せそうだがなー。」

ランザー・レオパルドはそうひとりごち、ガルルルルと笑った。

「逆にお田にかかるつて見たいもんだがなあ」

「ここ数百年己に匹敵するほどの強さや魔力を持つものに出会つてない不満からそんな言葉が口をついた。

「そろそろあいつらを…………いや、まだまだ止めておくか」

闘争本能が満たされない己と互角ぐらいの強さを誇るやつらに喧嘩を売るか、と考えてみたものの、情報や奴らが得た領地を後からかつさらう、といった色んな利用価値がある同盟相手だから今手を出さるのはさすがにもつたといいと思い直した。

「ああーっ！ 強いやつでこねえかなーっ！」

そんなことを言つていたら、

「んつー…？」れはつ？

黒き魔神の巣、と呼ばれている巨大な洞窟の中から、先ほどまではなかつた膨大な魔力の奔流を感じた。

「おほつーまさか本当に居やがるのかつー出て来い魔神つー。」

そんな神をも恐れぬことを言い、洞窟の入り口の前に立つていると、膨大な魔力の持ち主が出てきた。

?

「?なんだあつ?一ソゲン?」

洞窟の中から出てきた者はどう見ても、大きな剣を持ち鎧を着た人間にしか見えなかつた・・・

## 第27話 欲するもの話（後編）

「意見」感想あればお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1121y/>

---

剣盗りモノガタリ

2011年12月20日20時49分発行